

川柳塔

昭和六十二年十二月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷七十二号



日川協加盟

No. 727

十二月号

1988年

新春おめでとう会

日時 昭和63年1月15日(祝)午後一時開会
会場 大成閣(和室)

大阪市南区大宝寺町中之町二六
(心斎橋大丸とそごうの間を東へ約100m)
電話 06(271)5230

挨拶
兼題

西尾 栞

「待つ」

西出 楓楽選

「車」

松川 杜的選

懇親宴
会費 六千円

同人・誌友を問わず多数ご参加下さいますようお願いしています。

川柳塔社

羽原静歩第二句文集

随想と川柳「いのち」

☆序文 西尾 栞・橋高薫風

☆著者の経営する「かおり幼稚園」創立二十周年を記念しての出版

幼稚園

修羅の世もやっぱり揚げる鯉のぼり

また会う日まで忘れじのこどもたち

旅

落人がぬっと出そうな明善寺

伊予絣トントンカラリ春の音

いのち

初春の闘志を抱いて飾り嵐

雲水と舞妓チラリとすれ違い

ツアアウトさてこれからの人生か

☆川柳作品だけでなく、故郷伊予の随想や友人知己の思い出の記

あとがきにそえて、香苗夫人の一文あり

青柳の糸よりかけてみどりなす

峠の蔭に憩う家あり 香苗

定価 二千円

発行所 川柳塔社

次は川柳の番

西尾 葉

依万智さんが、サラタ記念日で旋風を巻き起したと思うたら、京都市に住む二十八歳の松本恭子さんが俳句の処女句集「レモンの街で」を出して、サラタ同様、爆発寸前の売行だという。初版千三百部の殆んどは俳句仲間で売れ、その後、出版元の牧羊社へ五千部、五千部という追加注文で嬉しい悲鳴をあげている。恋ふたつレモンはうまく切れません
コーヒーのセピアにわたしの恋深まる
夏風ジェラシー上手にしまったわ
逢って下さい霞立つ間のブランコで
シャワー全開夏は哀しみ持っていった
ドレスごと抱かれた流星の音きいた
朝冷えの毛布にくるまるロック流し

好きと告げてさみしんぼうのゆりかもめ
薄墨桜きれいな嘘を下さいな

作者は長崎県島原半島で生まれ、三姉妹の長女で双子の姉、仏教大学二年の秋、慕っていた祖母が亡くなり、「青玄」の伊丹三樹彦氏と出合い俳句の花が咲いた。

菊冷えの枕のくばみ祖母は逝った
花火買う祖母に逢いたい数ほどです
すみれ咲く一抱えもの薬です

聴診器の胸にさりさり五月来る

鶴の求愛ダンス無重力ってこんな

火取虫恋の終りもまのあたり

わたしの宇宙標機キュッと吸っている
どうして短歌と俳句だけがこんな旋風
が起こるのであろうか？ 川柳句集発刊
の折には、よく相談を受けるのだが、先
ず自費出版で部数は五〇〇とか六〇〇と
かい、如何にもみみっちい数量をきく。
そしてどこか知れ合いの印刷屋さんがあ
りませんか、格安を狙った消極的なこ

とをきく。そこで予算をきいて、印刷屋を紹介する。そして五〇〇部限定非売品として柳人、縁者にもらってもらうという洵にお粗末な謙讓発刊状況となる。

サラタ記念日には(株)河出書房新社という発行所がついている。松本さんのレモンの街では牧羊社がついている。

先ず出版するには矢張り、その道その道の発行所を踏むのが一番の近道ではないか。今度発行された「奴風」にしても「繪皿」にしても、サラタ記念日やレモンの街での歌や俳句には一歩たりとも劣るものではない。寧ろ優秀である。もつとも書房が扱ってくれるかどうかが問題である。書房からは非発行させて欲しいという句を先ず作らなければならない。今や川柳は、短歌、俳句と比肩の位置にある。今度の旋風は川柳の番である。心してこそ。

座右の句

足跡を残そう砂のある限り

(恵二朗)

私の句

子にそそぐ愛は化石になろうとも

矢内 寿恵子

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

次は川柳の番

西尾 葉 (1)

ふたたび茴香の根の下から

八木 千代 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選 (4)

自選集

東野 大八 (30)

■川柳太平記 (115) 川柳の群像 近江砂人

黒川 紫香選 (34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十三丁)

水煙抄 (36)

秀句鑑賞

藤村 メ女 (33)

同人吟

新家 完司 (59)

愛染帖

橘高 薫風選 (56)

〈女性コーナー〉茴香の花

小出 智子選 (60)

ふたたび

茴香の根の下から

八木 千代

それはいつも心いっぱいにみつめつづけてきた茴香の四季でした。智子さんが選をなさつていても私もいっしょに呼吸していたつもりでしたが、いよいよ選者交代のときになり、ずっしりと重みを感じています。

せっかく耕された土壌と美しい花々を受け継ごうというのに根が固くなるようでは困り者だと、肩の力を抜こうと心がけています。おそれがありますがそれをふりはらうようにして柔かく素直にせんに土の一部になりきれるように、そしてしゅちゅう方向をたしかめて土のめぐみを吸っては地上の茎に送り、花や葉のおもいをどれだけ深く土の精に伝えねばと自分の心もいっしょけんめいに耕そうと思います。

まだ一年しか経っていない初々しい遠慮がちな茴香の花々。目立たないように咲こうと考えていられる方もありますが、始めて触れてみる風のタツチや、これもはじめて仰ぐ空のゆたかさに新しい息吹きを身につけられて、今までより違った花を、自分自身の花

俚諺的川柳 (2)

大根だき

唐津の柳人・熊本の柳人

川柳を生きる支えに

初歩教室

「結論」

一路集「思い出」

「音」

柳界展望

本社十一月句会

各地柳壇 (佳句地10選／飯田悦郎)

■12月各地句会案内

91

■編集後記

93

阿達義雄 (62)

布施幸子 (63)

川島諷云児 (66)

春城武庫坊 (67)

阿萬萬的 (68)

渡辺独歩選 (70)

藤田泰子選 (70)

寺田裕美選 (71)

柳田裕美選 (72)

各地柳壇 (74)

本社十一月句会 (78)

座右の句

あやまって夫婦となりしこと愉し

(春三)

私の句

死ぬまでを忙しそうに生きてみる

新谷忠昭

を咲かせようと思われた方もあるに違いありません。

そこでお願ひがあります。どうぞ二年めは自信を持つてのびのびと思いきり力を試してみて下さい。ということは根も試されるのを覚悟という事です。自分で花をひらかせてみてこそ、まわりの花々の良さもわかり現状も把握できて目標もさだめられ、こうした積み重ねが三年め四年めの大輪につながるわけです。花も大事、葉も大切。茴香を支えるのは根の方などほんの僅かなものです。でもいっしょに生きさせて下さい。選者が支えているわけではありません。選者は支えてもらっているのだと私は思うようになりました。葉も茂ってもらいたい花も咲き切ってもらいたい。その花々が実になるようになったらどんなに嬉しいことでしょう。太陽も大気も意識して茴香を育てようとしてくれるのだと信じたいのです。

正直に打明けますと地上の花やみどりの葉のおかげで根も呼吸しています。炭素同化作用がなかったら土の下は窒息してしまいましょ。一枚いちまいの葉先が私にはとっても大切な存在です。栄養を送って花を咲かせるのはその作用のおかげです。時間が許す限り個人の相談も受けるつもり。病まれて困るのは根ですもの。みんなて本気で育ちましょ。いっしょに勉強しましょね。

川柳塔

西尾 栞 選

米子市 林 瑞 枝

牛の瞳に小さな冬が揺がりぬ
湯上りの優しき面を大切に
子の背丈柱が拍手してくれる
よく通る声直球を投げてくる
刃こぼれを感じる秋を生きている
音大を出たこおろぎのオペラだな

兵庫県 遠 山 可 住

アメリカの話が似合うキッチン
尼さんと約束がある曼珠沙華
桜島の灰を土産に買ってきて来る
飛行機の中で借金思い出す
砂風呂の隣も神経痛らしい
ぐつとくだけて焼酎に見送られ

堺市 高 橋 千 万 子

慎んでいる沈黙を誤解され
下手に口出せば火の粉がかかりそう
心入れ変えてそれからどっと老け
良心がこんな私をあわてさす
お花見のように酔えない菊の花

倉敷市 小 野 克 枝

銀色を金に染めつつ登る坂
根気よく暁天を待つ運を待つ
泥水をかぶると仏に突き当り
生命まで担保に入れた願い事
愛と呼ぶとても哀しい絆です
損の無い話へ声の仲間入り

八尾市 高 杉 鬼 遊
株持たぬしあわせな日もとくにあり
居なくては困るに妻を叱るなり
とむらいの帰りに熱い酒を飲む

釈鬼遊わが戒名に惚れている
年賀はがきの予約をまたもしてしまふ
明日のこと考えているトイレット

松原市 谷垣史好

愛は果敢なくマラーは長すぎる
秋深むチェロより細きチェロ奏者
定年やコトンと蝶番がはずれ
這い回る蟻にはタダの地面なり
ドカベンと土地ころがしは重刑に
あほらしい夢ばかり見る十二月

竹原市 小島蘭幸

少年のように長女がいる広場
美しい姉妹愛となるピアノ
不惑とや少し獣の匂いもつ
粉骨碎心の父を笑うてやることだ
ひとりになって不惑不惑と言うてみる
灯台の白さ逢いたい人がいる

倉敷市 野田素身郎

もの静かに観光シスターご一行
東京の人よどこから湧いてくる
役に立つたたぬは別にして案山子
ここは寺町金木屋がよく匂い
後遺症指が痺れる秋の風
敬老の日息子は二人とも戦死

熊本市 有働芳仙
カチカチと鳴らぬ時計の世に変わり

大安も仏滅もない祭りの灯
一生に一つの嘘を貫けり
ハニムーン見込み違いの二つ三つ
財産をねらう笑顔を見抜かれる
女房に負け癖ついている無口

大阪市 西出楓楽

若いといつて欲しくて齢を言うらしい
快晴も故人の美德なのだろう
腰痛ははすに構えたせいらしい
朝起き会に参加してから昼寝ぐせ
ゴキブリに反射神経試される
晩秋の蚊は残党でしたたかな

和歌山市 松原寿子

純粹なおんなが溺へ迷い込み
逢いに行く返す言葉を抱きしめて
精いっぱい嘘で流れを変えてみる
女として拳に炎えるものを秘め
大好きだからあなたの行方気にかかる
軽い罪おもたき罪よ人愛す

寝屋川市 稲葉冬葉

くる来ない花のいのちを大切に
公園のブランコ雨を待っている
傘借りた人の名前を忘れてる
カルチャーを渡り歩いて余生かな
十戒のひとつを持って不眠症
建前論を聞いている笑顔

弘前市 波多野 五楽庵

妻と二人あんな坂こんな坂来てしまふ

歯を削るとても悲しい顔をして

母と住む母の選んだ人に決め

胃カメラに黙ってくれと言う瘤

そんな馬鹿な夜明けの雨の胸さわぎ

定年になつても火事へ走る記者

岡山県 土居 耕花

レジに来てからも松茸考える

みの虫よお前は専守防衛か

特攻の真似は古いぞ火取り虫

ゴキブリよそこら当りもローンの内

胆のうの亡霊に又悩まされ

入院をせよとは医者も第三者

桜井市 岩 本 雀踊子

つまらない夫と思う日の寝顔

長病みの妻の笑顔は何んだろ

逝った子と逢う眼裏の風車

年金だけの銀行取引しています

楽に殺す医者を探しているんだが

年金の暮し坊主に会釈され

堺市 中川 滋 雀

年輪の数だけくぐつて来た戦

やすらぎの古墳へ秋も深くなる

満月を見上げ童話の影という

天井に思案の果てが詰つて

面白い話になつてきたら電話

どう直しようもないから○をつけておく

松原市 佐藤 藤子

学生のがやがやと日は西に

ポスターの少女息子を咬す

うどん屋のおじさんと聴くベートーベン

愛妻家だから絡んでみたくなり

物影から見ている鈴をつけた猫

手をふつて送ってくれる登山バス

近江八幡市 前川 千賀子

萩の里鬼の民話を語り継ぐ

尾花より淡きいのちと長き夜半

やがて訣れか川原撫子術もなし

女郎花写真一葉焼くを見し

誰がための婦道の絶えず藤袴

旅先の映画も少し哀しかり

島根県 堀江 正朗

盲人にまだなりきれぬ愚の一字

盲人にそつと触れてく冬の蠅

眼底に心静かな走馬灯

喜びに掌の触れる日も闇の中

大切にされすぎていて出る不満

畳の目拾い苛立ち静めんと

唐津市 久保 正敏

減反にネズミ産制考える

会長が禁酒禁煙して困る

筋書を曲げる深夜の第三者

平静でなくなる夜景きみが居る

拔擢の梯子が揺れる風当り

地方紙の身近な記事にバンが跳ね

医者好きで眼科と外科へはしごする

留守番の読書へ間違い電話来る

飛入りが年齢を聞かれて悪びれず

外人の解らぬ言葉へ鹿なつく

板前が競馬の話につり込まれ

不器用な良人へ目薬注してあげ

しのびなく風鈴の音になって秋

この橋を渡ると許すことにする

友達の悩みの中に私いる

母責めた言葉が肌に責めてくる

男より仕事に炎える離婚歴

結婚退職見送るわたしでほつとする

米一合を量り違える筈がない

神隠し面の一つがあの日から

肩パットすこし力を抜かないか

聞き下手なイミテーションの耳飾り

枯枝の鳥の詩も聞いてやろ

秋霖や市井の隅でおから煎る

大阪市

津

守

柳

伸

辻 白 溪 子

宮 西 弥 生

西 山 幸

他人には寛大すぎる父の笛

帳ヅラの黒に呪文をかけている

ご先祖がへばりついている千枚田

銀杏散るどちら向いてもひとりきり

会者定離枯れ葉見事に振りかかる

血圧がとても気になる恋の罨

紅葉待つ心の奥にある想い

イヤリングゆれて心がつたわらぬ

こだわりを少し流した秋の雨

つたわらぬ思いにゆれる秋桜

チャンスには弱い女の涙壺

趣味に生きる余生へ風もあたたかし

軍歌しか知らぬが右翼ではないぞ

檻の中猿が座禪を組んでいる

犯人のように嫌煙権に睨まれる

嫁ぐ娘に贈ろう父の懺悔録

諍いの中で鳴ってる鳩時計

十二月二階に破れ太鼓居る

米子市

林

荒

介

傾いたままで伸びゆく塔の影

大津絵の鬼は素直で人好しで

善人と呼ばれたままの父でよし

まなうらに母を描いている枕

大阪市

黒 田 真 砂

吉 岡 美 房

林 荒 介

遠い日を透かして転ぶラムネ玉

弘前市

田中 叶

首の皮一枚残し平もよし
ほど遠い話を妻とする夜中

缶切りがないから寝てる妻起こす

泣いている子がありなべて秋日和

秋の月むかし地主と小作人

自販機に月の出づるもいとおかし

和歌山市

福本 英子

近いから遅刻することだってある

譲渡税までは知らないアワダチ草

結局は無駄に終った長電話

居待月もう草臥れた萩すすき

ブルース復活女王さまも傘寿とか

慎重に控えたメモの無いバッグ

米子市

小西 雄々

善人が増え面白くないドラマ

足跡を大切にして余命表

襟足の白さが映える書道展

村おこししてもふるさと無人駅

名水を土産に帰る都市砂漠

米子市

石垣 花子

貧しさの匂いもしない麦のめし

写経する心のトゲを抜きたくて

時々是小抽斗さえ謀反する

雨の日はゆっくり話す糸電話

酔った顔あわてて叩くコンパクト

米子市

菅井 とも子

養殖の魚が差別に馴れて来た

白い矢がささり此処から抜けられる

何気ない老母の教えは後から

終点が見えず呑気に生きてます

ふるさと

あの部屋がまだ待っていた疎開先

米子市

青戸 田鶴

大根の白さ豊かな秋をもつ

時々砂嚙みながら生きています

平穏無事そんな暮しにひたるまい

北の海波は疑い深くなる

風と息あわせてコスモス揺れている

米子市

野坂 なみ

生きる事だけ考えて生きている

二十一世紀の地球で生きて見ませんか

地獄極楽幼い胸の絵は確か

善人の隣の席が今日も空く

枕木もきつと誇りを抱いている

米子市

田中 亜弥

神様の藁をなう日がやってきた

雑念をもつと大空から落ちる

股のぞきして大空を好きになる

でっかい肩男まさりで生きてきた

白扇をにぎると肩が凝ってくる

米子市 政岡 日枝子

僕はピエロでいつもあなたを笑わせる
私を捨てに行くなら花の野へ

バカになる帽子をやっとぬぎました
師走だからルノアールでも飾ろうか
五十肩痛い痛いのとんでいけ

米子市 澤田 千春

何もかも白く晒して罪を消す
故里に帰ればみんな善人だ
当然のように足跡波が消し
かごめの輪入れてほしいな白い月
笑い袋ひらけば今が極楽だ

大阪市 河井 庸佑

学校で残され塾でまた残り
陰の声謙虚に受けて自省する
いい年齢で裏が読めぬのに弱り
前向きに検討しますとそれっきり
子は親の鏡うっかり忘れかけ

大阪市 藤田 頂留子

ぬす人も肩書つきという世相
フグのヒレべたべた繁昌ぶりを張り
良い品とほめて居るのは店員さん
箱入りを買ったらのしをつけましょか
叱られた猫が解せない十二月

大阪市 本間 満津子

待つ人と違うチャイムの幾度か

電話なら喧嘩しそうで手紙書く

思い出す度に勇気の湧く握手

逢うときに別れ松茸に気前よし

コスモスに囲まれ優しい顔になる

大阪市 神夏磯 道子

菊でさえ杖のいる木と要らぬ木と

どびんむししばし沈黙の人となり

長所と欠点摩擦して夫婦

糸通せぬ母は漬物ばかり漬け

妻が持てばどんどん上る奴唄

大阪市 柳原 静香

へそくりも満期が来てる誕生日

日本地図故郷は雨が降っている

円高に縁なき暮しさんま焼く

ショッピングカー少し重たい秋日和

菊の香やいまだこの世にある未練

大阪市 板東 倫子

拳銃を持てば魔性になる男

鬼つ子と言われ一番母に似る

白が黒黒が白でもかまわな

たんすにゴンたんすにゴンと衣がえ

大阪市 古川 美津枝

④印つけて一巡した噂

雨音はつる夜長のもの思い

御平癒を祈ってサンマ焼いている

石橋をたたいて捻挫とはマンガ

一心寺ゆるしを乞うているうなじ
しとしとと四角に降って十二月

和歌山市

若宮武雄

秋が来て男やもめの二年生

あのひとに何故まといつく不倅せ

木犀の匂いへきつと来る計報

わが年を忘れた報いぎっくり腰

曲らなければ天国へ往けるはず

和歌山市

堀端三男

生きてゆくつかい棒に恋などを

書きなれてるので香奠受けをする

主題からときどきそれる艶話

愚痴よりはましかと自慢話聞く

水を崇める思想が滝を神にする

和歌山市

内芝登志代

天高く百歳くつたくない笑顔

この花が見られますよう種を播く

屋上の植木鉢にもいたみみず

結納受け書く淋しさと安堵感

わいわいと美味しいカレーへ花が咲き

和歌山市

垂井千寿子

鬱の日は又食べている肥えている

皿割って割って夫婦の仲の良さ

ダンジリへ孫の温さの肩車

お隣の留守へ宅配よく届く

よく笑う外人でしたスパイです

和歌山市

後藤正子

うらうらと陽を閉じこめて秋の中

絵の中を走りつづける汽車ぼっぱ

秋を写して鏡の中はやがて冬

波打ち際の泡の消えゆくひとり言

見つめられて風に応答える秋桜

気働きする友と居て気草臥れ

蟬螂の斧とは気障なことを言う

矛盾ばかりが罷り通っている矛盾

高所平気症斯うして人間土地離れ

北風に告げたい愛を口籠もる

有頂天になって兎のダンスする

単細胞カラスの寝言におどらされ

秋深む風情いとしきこぼれ萩

涙など流しておれぬ青い空

この世には縁がうすいと虫が鳴く

弾まない毬を温める持ち時間

武装した栗身内から虫がつき

なまじつか逢わねばよかった曼珠沙華

人はみな直く生きよと韭の花

泣き黒子持つて生れた偽善説

鳩だつて豆のあるうちだけ慕い

出雲市

板垣夢酔

出雲市

板垣夢酔

フライパンの丸さの中で妬く夫婦
口止めの話五階へもう昇り
坊さんも人歓楽街でお布施撒く
地下足袋で稼ぐ仕事に齢はない

富田林市 板尾 岳 人

人肌に触れる気儘な父の風
酸漿を嚙んで女を捨てられず
ぐうたらな風に出合った母の死後
逆立ちの出来る男と友達に
真夜中の柱時計にある不倫

富田林市 藤 田 泰 子

更衣捨てねばならぬもの数多
よく進む時計に油断してしまふ
げらげらと笑う痴漢撃退法
パットまで乗せて妻の怒り肩
四面楚歌春咲く種を蒔いておく

富田林市 田 形 美 緒

山陰の旅

来世の良縁頼む神在月
恋実る出雲大社の良いみくじ
アベックでつまらない顔フルムーン
母想う歌碑を写して息子に送る
子宝の湯にフルムーンの灯がともる
まだ少し愚痴が溜っている余生
輸入でもしようか嫁の来ぬ田圃

松江市 恒 松 町 紅

吊り橋で男の意地が試される
メイクする女へ秋が夕ぐれる
ロボットにいつか号令かけられる

松江市 舟 木 与根一

減反減反台風も遠慮する
米余り豊年踊りはしておれぬ
地上げ屋もおらず雑草花盛り
年金の酒はたしなむことにする
ニューリーダー茶飲み話を盛り上げる

京都市 松 川 杜 的

秋日和菊の花壇は未だ薔
似たもの夫婦妻も私も十二貫
改築は止そう同居はしてくれぬ
秋の画廊に秋の絵が掛けてある
路郎賞まだまだ夢をみてるよう

京都市 都 倉 求 芽

飛行雲崩れて秋の空濁る
三日月が好き男の淡い恋
柔い風だが真直ぐに吹く自信
アナウンサーの言いそこ間違ひ箸止める
岩が勝ち水勝つ日ありて鬼の舌震

京都市 山 本 規不風

冬嫌いの女へ温い話する
唐津城辛い別れの銀木屋
耳哀し女と涙する唐津
天高し無人の競艇場が美しい

会長の無口は人を魅きつける

島根県

西村 早苗

口の動き一つひとつをしかと読む
魂胆をもたず毅然と風を受け

週刊誌裸寒から十二月

今日からはライバルとなる椅子一つ
親しみの眼を憎しみの眼でみつめ

島根県

小砂 白汀

朝の川無風快晴湯気をたて

米熟れてすずめ地蔵をふり向かぬ

美しく老いたく思う秋ざくら

老妻病んで敬老の日も米を研ぐ

冬の月抱いて静かな水たまり

島根県

堀江 芳子

停年の来ぬよう妻の座大切に

小走りのスリッパ初冬軽く乗せ

憂愁をどこまで流す冬の川

ピーポーのよく走る日へ怖けづき

天高し白いごはんは食べ飽きぬ

島根県

榊 みどり

思い出の指輪がまわる秋の夜

十五夜に守られ帰る塾の道

おみくじを結ぶ二人へ鳩がくる

命日の鐘の余韻に正座する

亡義姉の声そっくり受話器義妹から

尼崎市

春城 武庫坊

当分は仮面外せぬ秋日和

蕎麦枕夢のシナリオ書き上げる

真実を知らず退院語る友

秋の陽とバカチョンカメラ美女作る

敵おらず味方もいない秋の月

尼崎市

春城 年代

いわし雲亡父がもひとつ遠くなる

一線を越えて征たせた遠花火

男尊女卑ではないが男を大切に

メルヘンのような水車と家鴨たち

朝方のゆめ見にこころ捉われる

尼崎市

奥山 美智子

もったいない事を聞かせる占い師

ジョークも軽くこぼれて朝の宿

ブランコの高さに夢が置いてある

さりげない仕草に女においけり

身を洗うほどに響いて滝しぶき

西宮市

林 はつ絵

菜を刻む時はひたすら母である

自惚れに貧しい影が離れない

掌を洗う水は冷たいノラの家

バー少し上げて失敗ばかりする

びっくり箱の底で不倫の貌眠る

西宮市

奥田 みつ子

姑病む(三句)

亡母よりも長い絆の嫁姑

ママママと頼り切つて二度童子

看病に疲れ花屋で深呼吸

もくせいの香り去年は知らぬ人

結論の出ぬ問答を秋風と

西宮市

西口 いわゑ

ばらを切るばらも思案の顔をする

三面鏡と千の絆を女持つ

千里眼のような手紙は母の文字

鬼あざみ花束からは遠くいる

萩すすき友禅染めのように揺れ

奈良市

宮口 笛生

御飯粒一つうるさく育てられ

豊作の重みをかつぐモミの嵩

朝夕の冷え込み酒がうまくなる

一家してうれしく孫に手をとられ

泣き声もさすが男の児でござい

奈良市

天正 千梢

美しき老いなどはなし診察券

二千二百六十人御文書書きかえねばならず(百歳以上長寿)

貧乏暮らし笑い乍ら出来る幸

はめられすぎました落し穴

まほろばの稜線めっぽうお気に召し

鳥取県

川崎 秋女

新聞を待つありがたい朝が来る

ライバルがニコツと笑ったある怖れ

心経千巻みな善人の貌で出る

万智さんに負けないサラダも詩もある
生きていて良かった87の月の道

鳥取県

松下 たつみ

ガードレール命の保障まではせず

故郷の居心地一夜の水清し

コスモスの行儀は風のせいにされ

タンスでゴン流行遅れの柄守り

ジープンの女に秋の山豊か

鳥取県

土橋 螢

妻の妬心は煙草の煙のようなもの

ニュースキャスターが赤い羽根つけている

「もう嫌い」愛の反語と承る

すこし軟派で戦争に征ってきた

もう少し酒が飲みたい奴といふ

鳥取県

新家 完司

すくすくと校庭の樹も少年も

だらしない親に代ってどついたる

黙ってるポチのおみやげだけを買う

いつからか何気なく食う白いめし

五十年前はおしめをしていたな

鳥取県

羽津川 公乃

肩越しに夫も覗く体重計

菊人形芸術の秋極まれり

水加減にも触れ新米を母送る

善人の仮面はがした酒の量

子に賭けるレール終着駅がない

唐津市 仁部四郎

家族史の初稿を迫る除夜の鐘

家族史にマル秘があるとダメですか

家族史の扉に祖母の子守唄

家族史で国の歴史は割り切れぬ

家族史の合計でない民族史

唐津市 田口虹汀

お月さん今日で私も七十九歳です

会長の傘寿を祝う新能

幕切れも近いルージュを濃くひく

利の枷がとれて明る靴の音

薫風や拈華微笑の弟子師匠

寝屋川市 江口度

縦書きの好きなペンならもっている

包解く前に少うし振って見る

俺のせいじゃないと叫んでいる筆よ

争い好きの油を積みにペルシヤ湾

子育てが済んでもローン延々と

寝屋川市 宮尾あいき

独りにも慣れて亡夫の夢もみず

日暮れ道サンマの塩焼きらしい風

おきのどく私に似てます孫猫毛

栗団子月が出ようが出るまいが

黄菊白菊我家の庭に秋深む

寝屋川市 岸野あやめ

虫メガネ磨いて相場欄を読み

恩人の噂に聞いた変りよう

おふくろの耳は噂の吹き溜まり

電話より手紙が欲しい里の母

電話では元気な母のふりをする

今治市 越智一水

いろいろに妻呼んでみる老いの坂

ふり向けばタンゴのような風が吹き

ヘルメットかざれば妻も若く見え

水使う妻が水から秋惜しむ

夫の色に染まってあせた鏡かけ

今治市 矢野佳雲

この原を出ずここに死ぬ虫の声

長い目で見るとバランスとれている

夫婦して違う駅弁買って乗る

道連れを連れて戻ったランドセル

立食いのうどん隣は肘を張り

倉吉市 奥谷弘朗

くちなしの青虫殺す役は僕

女房が無理な注文ばかりする

教養が浮気心の邪魔をする

宿命とあきらめられぬのも因果

一癖は妻を泣かせる女好き

倉吉市 渡辺独歩

スリルとは妻から離れることを言う

善人は朱の交わりを好まない

地上げ屋を眠らすカルテ作ってる

お隣のペットは嫌い仏頂面
使い込みしたがる女と懇ろに

松原市 玉置重人

息をのむ紅葉秘境の宿の下駄
玉碎の島で日灼けを自慢する
河内弁ちよつとイラチで善人で
占えば星がきれいな天の川
丸い鼻とてもあかるいいい嫁で

松原市 小池しげお

若鮎へ年寄りの鵜はのどをつめ
これ以上若くできない美容室
ゴキブリに身構えている居候
立呑みのラムネでゲップして別れ
庭師ふと祖母の氣立てのことにふれ

岡山県 嘉数兆代賀

一本道十七音字に惚れぬいて
泥にまみれた記憶の中で腰曲る
おんぶして手を引いて来た鼻緒ずれ
老い二人誰に遠慮もない余生
どっち向いても手を貸す柳友がいてくれる

岡山県 矢内寿恵子

天高し野にコスモスのフラダンス
後入りの金魚一匹和を乱す
老春へ自作自演のシナリオを
むらさきのふくさがはずむ菊日和

七転び八起き追い風向い風

岡山市 川端柳子

散髪を済ませた庭の男振り
いいなりになろうと思う父母を恋い
世の中がどう変わろうが母は母
カマキリの姿も枯葉色の秋
目玉焼分け合う片目宛の幸

岸和田市 福浦勝晴

さりげなく肩に置かれた掌の温み
便箋にごちゃごちゃ書いた得手勝手
木枯しへ教授の歩幅均等にお
お葬式もつたないほど上天気
真実を書けば駄文も生きてくる

神戸市 山口美穂

頼りないわたしが頼りにされている
赤とんぼとコスモス風の話する
今日の疲れ話せば言葉尻上り
悔い少し今日の日記は白いまま
忘れてた夢をみなおす秋の夜

兵庫県 辻文平

紫が好きで男をまだ知らぬ
鬼も蛇も抱く母さんの知恵袋
隠してる疵を見たがるのも他人
足袋白く訣れ言葉にふれてみる
すり鉢の溝に埋まる母の過去

平田市 久家代仕男

過保護から飛べぬ鴉になりました

白露より湯豆腐にする宵の膳

燃えつかぬマツチばかりを携けて古い

嘆くまい私も星も生きて居る

ママごとをした美代ちゃんも杖が要り

浜田市 中川幸一

男株すこうし下げて共稼ぎ

美しく老いたいなどと無理を言う

戦陣訓バカ正直に散った友

大正に背伸びをさせるカタカナ語

貰い物でも平和です民主主義

美濃市 安平次 弘道

秋刀魚焼く煙庶民の詩があり

思考ゼロ悲しきメリーゴーランド

科学者の笑顔化石はおしゃべりで

進学の子ヘナイターの音を消し

緊張感がとても嫌いな非常口

名古屋市 越村枯梢

パイテクで貧乏遣伝は絶ち切れぬ

皮下脂肪増えて面皮も厚くなり

紐付きと知らずに飲んだ二日酔

窓から窓へ団地の恋の綱渡り

酒よ酒俺と一しよに泣いてくれ

柳井市 弘津柳慶

全快も近く味覚を取りもどし

お祭の太鼓もうれしい退院日

意地張って孫は寂しく寝て終い

そもその出会いは友の披露宴

車窓から街の灯遠く離れ出し

東大阪市 森下愛論

たった百年人間どものバカ騒ぎ

余生云々老醜の愚痴であり

手土産の倍持って去ぬ里帰り

艶話無口が一膝進んで来

茶碗酒ウイスキーでは気分出ず

呉市 林野甦光

雲を読みながらピッケル握りしめ

事後いつも悔む男の目玉焼

話つく迄は話の外にいる

すり傷へ唾つけておく負け戦

終電車の音が響いた縄のれん

伊丹市 樫谷寿馬

秋空の高さへ舞っていく受賞

ピッタリのスリーピースで賞を受け

老人が確かに多い昼のバス

裏切りに会うかも知れぬ子を育て

洗濯を取り入れこんなに喜ばれ

諫早市 原田メイシユン

大正の女房で俺にはさからわず

にが虫をかみつぶした顔で守衛さん
酒の席診断書を妻持たせ

コンピューターに俺の命左右され
居合道の免許へ押売りとんで逃げ

笠岡市 松本忠三

勉強が嫌いあなたの子ですもの

老妻と喧嘩何年ぶりかいな

猫の手も借りたい猫が寄りつかず

一芝居打ってみようかだけのこと

済みません言っただけでもいいほうよ

下関市 石川侃流洞

マンネリになつては困る自動ドア

ベア・ミドリフ雷さんに狙われる

人間の鎖が核に立ち向う

昔むかしの話が好きな老人会

楢山で一人芝居の幕を引き

倉敷市 稲田豊作

古稀過ぎて地球の回転速くなる

犬と猿にデタントの策がない

背くらべをせぬ団栗の仲の良さ

欲を少し持てとは妙な叱りよう

直線を逸れると父がうるたえる

仙台市 川村映輝

豊年で困っているのは食管法

根ほり葉ほり聞いて忘れて又も聞く

鬼とまで言われ億万置いて逝き
飽食時代食物粗末にする恐さ

十六年十二月八日は息子の誕生日

大田市 藤田軒太楼

持ち寄った魚拓に老いの花が咲く

誘致した会社短命らしい風

難聴の老いにも秋の音たしか

車座になつて同志の和が育ち

不協和音たてて結論まだ出さず

町田市 竹内紫鏑

毛深い人も時計の広告

爪を染めても繰るマンガ本

小津の映画を見る祝日

名札はずされ土産渡され

テレビ講座で気になる筆順

玉野市 小谷仙山

綿菓子がよく売れている文化祭

やるしかない男が岸をはい上がる

猫の風邪くらいが馬鹿にはならぬ金

来年の春までねむる樹の裸

泣き笑いどちらか一つにしてほしい

竹原市 森井菁居

俺の来た道俺だけの径で良い

年寄りがいて無花果が膳に乗る

セールスに徹し触角進化する

食足りて良い事ばかり考えぬ
爪を切りながら策士になつてゐる

高知県 赤川菊野

竜馬像男のロマン駆りたてる
幸せを掴んだらしい帯の位置
かと言つて媚は許さぬ自尊心
隠し味程度の愛でつないでる
居ないいいバー私元気に生きてます

豊中市 田中正坊

萩の花武蔵の里は秋早し
もくせい香り少しおしゃべりで
専守防衛カラタチの棘冬のバラ
告白は今だ今だと滝の音
名優の老いた素顔が美しい

八尾市 宮崎シマ子

雨三日大工の親子パチンコ屋
金が絡むと仏様では居られない
洗髪の匂の妻と月見酒
金木犀母の小さな嘘こぼれ
捨て猫を變るがわるに抱く下校

貝塚市 行天千代

墓の径長くつづいて曼珠沙華
燃え盛る花の心の有った日も
ある日ふと見付けた友の裏の顔
外科の先生苗字のルーツ聞きたがる

失業の背なの薄さよ秋の風

羽曳野市 中村優

あの日から易書離さぬ日が続く
すすきが原へ紙ヒコキが迷ひこむ
旅に出る気持にさせた一行詩
ペンタコが疼くせりふを書いている
タイムカードが御存知今朝も滑り込み

大和高田市 岸本豊平次

所により雨なら行こうリュックサック
日本史を消させた墨が剥けてきた
各停に乗る足取りにある余裕
旅の子にテレホンカード持たせとき
野の花を活けて女が一人住む

姫路市 人見翠記

亡母の忌に蚕豆供えて思うこと
植木屋の手抜きを見たり八時間
やれやれと秋たつ朝の深呼吸
食欲の出る今宵の箸は津軽塗
お食事がたのしい秋の箸さばき

箕面市 坪田紅葉

やさしさのひとこと聞きたいねじり花
コスモスの花にかこまれハイポーズ
老いたとて女は女紅をひく
振りむかず人波に消え安堵する
可愛さがにくさ百倍孫の口

松江市 柳 楽 鶴 丸

お金音痴の妻で貯めている

「禁煙」何枚お書きになりました

何も知りません存じません赤トンボ

愚痴一つ言わぬ妻で気が疲れ

大阪市 江 城 修 史

ままならぬ浮世は向い風ばかり

方便の嘘は暮しのかかる嘘

コスモスよ心に残る人はいま

忘却という幸せがある限り

大阪市 北 勝 美

バランスの上に平和が保たれる

バランスをいつも見ている出納簿

設計士バランスばかり考える

唐招提寺伽藍バランスに目をみはり

大阪市 中 西 兼 治 郎

精力剤のんでパチンコ屋にはいり

無料パス老人の足弱くする

反対の結婚生れた孫がとき

人はみな罪人ですと言う聖書

大阪市 寺 井 東 雲

救急車着いても医者はおわてない

顔真赤猿は反省しています

納得のいく給料は貰えない

理想追いじっくり選って嫁き遅れ

大阪市 坂 口 公 子
ワッショイワッショイ他所者だけど酔う祭り
寝ちがえた首の言いわけなどはせぬ
すじ骨がどうにもならぬネックレス
奇声でもあげぬとどんぐり目立たない

大阪市 大 野 武 太
ささやかな奢りと思う錦鯉

六〇点主義でちよっぴりゆとりもつ

うとましや財テクなどと騒がしい

流す汗過去も未来も考えぬ

大阪市 松 尾 柳 右 子

怖い夢つづき布団を干している

帰したくない夜あけましょナポレオン

善人の友の絵皿は赤ばかり

テレビだけ喋って夜長の夫婦独楽

大阪市 渡 部 さと美

玄関へ秋を極める鉢をおき

おふくろの味しみ込んでいる次男

取ってよいところにあつたしぶい柿

山降りて靴に無情なアスファルト

大阪市 大 塚 節 子

金持の国家の中の下意識

愛憎も消えて相寄る通夜の客

十月の台風大阪無事通過

針をもつ杉村春子娘なり

大阪市 吐田公一

廻り道をした幸せもある夫婦

風糸が切れた自由な定休日

明暗の香りを持った菊の花

仏から静かな顔をもらい受け

和歌山市 牛尾緑良

引越して出てきた物と失せた物

禁煙で三日ぐらいで言わへんで

茶飲み友達ばかりでもない老人会

キープしたボトルにたかる女の手

和歌山市 神平狂虎

なす術も知らず落ち葉の後を追う

からす瓜島には老いた母が居る

北を指す自分の中の風見鶏

風船も少ししばんで島へ向く

和歌山市 福井桂香

富士大石寺参拝 (二句)

ロマン抱く夫婦で仰ぐ富士晴れて

富士山に招かれすすきに見送られ

山中湖スワンボートで漕ぐ二人

夕焼へおもしろい夢を抱く

和歌山県 寺田裕美

最後は夫婦黙って落ち穂拾つてる

くいしばる奥歯が明日を信じてる

海に出る河ゆつたりと身づくろい

萩散つて月がだんだん欠けてゆく

和歌山市 山川克子

こんな時すぐに呼べない人である

あなたならどうする誰も見ても時

惚れていることは愚かな事ですか

シンバルを叩くゼンマイ切れるまで

和歌山県 天満三千代

なにもかも育てて土の無口なり

コンバインおどり疲れて夕やける

秋風が楽しい話題連れてくる

万一のいが俄にくるいだす

和歌山市 木本朱夏

丸木橋途中で鬼に追いつかれ

待ち合せ妻は他人の顔で来る

なれそめは銀座の恋の物語

ライバルにもあった円型脱毛症

岸和田市 清野こう

菜園の虫は情け容赦もなくひねり

ゴキブリを夜叉の気持で追い廻し

ボランティア患者に呉れた笑い顔

月丸く誰が吹くのか祭り笛

岸和田市 古野ひで

仲よしが時々鉦をむけに来る

弟の子まで気になる姉である

ふり返る事の嫌いな夏帽子

ひと言が心に虹をかけてくれ

岸和田市 原 さよ子

NTT株屋が誘いかけてくる
秋晴れへ心許して風邪を引く
今食べてきたよと鰻井平げる
暇と金ないが健康だけはある

岸和田市 芳地狸村

父さんが料理を習う均等法
お互いが素直に言えぬお早うさん
指先が魔術に見えるたこやき屋
金婚の妻へ出したい特別賞

鳥取市 両川洋々

落人の涙を溜めてダム湖満つ
傷口を酒で洗うて旅ひとり
初恋を赤紙つれて征ったきり
伝説よ悲話よ湖底で目をさます

鳥取県 林 露杖

曼珠沙華燃えて落暉に立向う
月明に工事場寂と砂漠めき
我慢しろ大動脈瘤よ年越しだ
一病を抱いて越年恙無く

鳥取県 金川満春

笑っても泣いても一度は行く所
子へ孫へ綺麗な地球残したい
行商の魚屋戦争未亡人

愛終る振り返らない峠道

鳥取市 森田熊生

大の字に眠る畳が広くみえ
残業を終ってからの丸い月
わからないままでともかく拍手する
古々米になるとも知らず稲豊か

鳥取県 森山盛桜

切っ先を男の肩で受け止める
先生と並んで虹を見えています
直角に曲がってからの立眩み
みんなしてお地藏さまを売る話

鳥根県 松本文子

淡水化論争しじみは砂を食む
身内にも独居老人増えている
菊咲けば菊の数ほど涙湧く
一生を女ハンカチ握りしめ

鳥取県 さえき やえ

きつちよむさんの話風の子よつといで
老木が樫になる日の秋祭り
独学で歩く男に影がない
この先の地図は子どもに描かせよう

鳥取県 江原とみお

ワンタツチの傘でさつさと出ていった
十葉の花は裏切りなどしない
僕の作る風は青空恐怖症

穀象と俺とくらべているらしい

島根県

錦織 文子

それぞれの位置から石がものを言い

二階からの空へ祈りを深くする

秋風へ熱い番茶の彩が冴え

柿りんご栗いちじくの平和郷

島根県

石田 清泉

コスモスにハツとハンドル廻り

氏神も今は昔の物語り

無雑作が光りを放つ書道展

ただ総理の名だけが欲しいおらが国

島根県

藤原 鈴江

声だけを聞いてまた会う日を待とう

橋渡るときのわたしはまだ若い

赤もよし着れば七十唄が出る

うすれゆく記憶の中に住むあなた

島根県

松本 はるみ

遺言に書いてなかった懺悔録

秋時雨南京豆の皮をむく

倅せが明日もあると花を買う

バス停にコスモスだけがゆれていた

唐津市

浜本 義美

廃線の開閉橋は開いたまま

碑に哀し一揆の民話聴く

玄海の汐噴きこぼれサザエ焼け

サラ金も適わぬ利子で妻に借り

唐津市

筒井 朴竜

緑高を今へ誇示する五輪塔

観光バス里の御輿と擦違い

だんじりを見下す二階バスの旅

仲秋の名月を酌む酎五勺

唐津市

山口 高明

大学へやったばかりに中核派

食文化寿司も世界の仲間入り

皇室に属さずよかつた身の自由

弱虫の兄貴で妹棒を持ち

唐津市

浜本 ちよ

曳山の威勢知らせる笛太鼓

男は自惚女は見栄に金使う

伝書鳩に的はずれだけ話しとく

霜柱やんちゃ坊主のように踏む

米子市

寺沢 みど里

極楽へ着くまで髪は乱されぬ

遠まわりして吊橋に揺れてみる

肩パット外し喪服の列にいる

善人の手で包丁を研いでいる

米子市

光井 玲子

今朝の夢誰に話そう吾亦紅

うす味へわたしの秋も深くなる

秋刀魚焼く猫のきげんを取りながら

いつからか白黒つけぬ老父となり

出雲市 石倉 芙佐子

たかが悪女と真実さえも打消され
死ぬなんて馬鹿なと小鳥目をつむる
待ちぼうけばかりしての彼岸花
ともだちと平行線の話など

出雲市 小玉 満江

屋敷跡萩と芒の花ざかり
観月会月はとうとう出ずじまい
ペンだこは出来ぬが大きな座りだこ
点滴が三途の川を渡らせぬ

枚方市 宮川 珠笑

ぼけ防ぐためにと孫を託される
立ち飲みのお癖が宴席もてあまし
まどぎわになつて生きてる広い趣味
早寝ちへ目覚まし代りにされて父

枚方市 二宮 山久

生きてゐる喜び妻子の寝息かな
妻の持つひもの長さは許される
音消えた都会真夜中救急車
おたがいの欠点つかぬ四十坂

倉吉市 渡辺 菩句

糞虫が貌出すいま野球応援中
コーヒーが残つてゐるのに急きたてる
同じ見本のシャンブーが銭湯に来てゐる

達磨にはいつも笑つていてやろう

倉吉市 淡路 ゆり子

灯火親しむ眠り薬の本を読む
久方のお寺詣りで鐘を撞く
亡父亡母が急いで来る言っている
ニュースを聞いて充電をする老いの日々

岡山県 荻野 鮫虎狼

体力を作る汗です金をかけ
真直ぐに引けぬは鋸の所為にする
敬老の日だけ元気で旅に出る
温かい明かりが洩れるうさぎ小屋

岡山県 小林 妻子

月見草にきけば武蔵の恋語る
老いの私語又正月が来ましたね
なんとなく逢う約束が出来た仲
休耕の田の沈黙が悲しすぎ

高槻市 川島 諷云児

ワンマンについてゆけない土踏まず
真っ白いハンカチ妥協を許さない
仲裁に来たのに惚気聞かされる
耳寄りの話補聴器ONにする

高槻市 竹内 花代子

リフォームでデザイン変える形見分け
学生の列音羽の滝を占領し
栗をむく仏と話す栗御飯

塗装屋に足止めされた秋日和

神戸市

仲

どんたく

雲の色雲の形に四季の曲

守備範囲せばめてちろりと老人と

抵抗の無いはかなさよ櫛の秋

地獄の門鬼はたらふく食っている

神戸市

山

片

紀

雄

喧嘩してケロリとお茶をいれ替える

ご亭主はほどの値の柄がすぎ

旅よりも着物気にする空の色

反省と忘れる会でもとどおり

姫路市

大

原

葉

香

金集め下手なら政治家にはなれぬ

情報過多知識の海に溺れてる

百田ライター男の明日が落ちている

怒鳴り節それでいいのさ僕の唄

姫路市

釣

遊

光

秋だなと感ずる腹の空き工合

傷心の女を泣かす木曾の雨

りんどうよ幼なじみが又消える

嫁と居て唯それだけで羨まれ

松山市

谷

信

夫

なるようになって海路の日和あり

不憎不怨日にち葉がよく効いて

御神輿のお通り木屋におう堀の外

よく稼ぐ妻を信じて独り酒

生駒市

森

田

カズエ

三世代同居で皿のバラエティ

受け皿の苦労重さに耐えるだけ

よくしゃべる客へ無口が注ぐビール

水泡に帰したと上手な言いのがれ

松原市

北

野

久子

娘の初産(一句)

女の子お姑様は上機嫌

安らぎの一つに夫も老けました

反抗へ夫の愛はまだ確か

おおらかに老いるお金が減ってゆく

羽曳野市

榎

本

吐

来

母老いし深夜のベルが抱くおびえ

律義さも隣に劣る甲斐性なし

中流から突き放された地価騰貴

妥協する背中に残る正義感

羽曳野市

佐

野

白

水

妻と娘の長電話どちらも炊事中

冬を越すミノ虫桜の葉を着てる

腸切った友へ癌のこと聞きかねる

天皇と同じ日に友手術しましたと

東大阪市

崎

山

美

子

達筆の手紙へ返事出しそびれ

下書は出来たがやはり電話にし

ワープロで息子が無心言ってくる
髪型をかえて気分をもちあげる

宝塚市 丸山 よし津

秋風に出番の多い喪服干す

寂聴尼ペンも法衣もよく似合う

言いたい事言つて仲良い嫁姑

お世辞なしに大根うまく煮えている

浜田市 佐々木 裕

持つて生れた弱気手柄を落す

振り返つて見るが誰も従いて来ず

雑兵の中にこわい奴が居る

針なんか飲んでやるかと太い嘘

橿原市 岩井 本蔭棒

いのちもう双葉でおわる貝割菜

僻村の意地海外で嫁さがし

ふるさととは水と空気がうまいとこ

露天風呂憂き世忘れる湯があふれ

和泉市 西岡 洛醉

定退の自適みちのく湯に浸り

横文字のカルテに謎が残つてる

回り道したのにあつた落し穴

真っ白の下着に今日も生きて居る

七尾市 松高 秀峰

駅弁の蓋から拾う戦前派

忠告も耳に入らぬ有頂天

上げ潮に乗つて初心を忘れかけ
怒るよりほめる姑のうまい知恵

羽咋市 三宅 ろ亭

執刀を信じた陛下のご回復

風呂の窓開けたら仲秋の月

不識庵も吟じた今宵の能登の月

人を見る目ときには妻の方が冴え

河内長野市 井上 喜醉

許すなら怒りはそつとしておこつ

中流の女のいくさ狭い視野

ロボットの踏み台になり首洗う

決断もできぬ弱虫すぐとぼけ

宇部市 平田 実男

執行猶予中で仮面はつけたまま

五十年忌仏のことに触れず飲み

窓際になつて猫背がひどくなり

三世代住み豪邸にうらやまれ

茨木市 井上 森生

秋風に揺れて芒の独り言

戦争も我慢も少し知っている

いが栗の栗を育てたいがの役

納得のいく松茸のこの香り

弘前市 斉藤 島

約束を交わしてから長い雨

収穫の日だけ手伝う次郎なり

ごみ箱も欲しかろう勤労感謝の日
屠殺場を見てきて聖書読んで秋

堺市 柿花 紀美女

秋風に日暮れの早い老いの部屋

針路少し変えたが元へ又戻り

平和そな顔で時代劇見てる妻

目刺し焼いた幸せ遠い日と思う

高知県 曾我部 裕

台風がそれでうれしい稲を刈る

マンネリのメニューを変えてくれた嫁

天皇さまを来るなど言える世の移り

車内検札もありましたありました

兵庫県 脇田 米朝

落ちつかぬ思案かかえる膝小僧

欲張って壺から拳が出てこない

乾盃へ前口上が長過ぎる

仮面皆ずらり並んだ朝の駅

交野市 山本 テルミ

主婦にだけたつぷり時間くれる午後

一日に何べん阿呆になれば済む

満月が見事に裸木に割られ

スカートのヒップ気にして秋を食べ

静岡市 永倉 僕川

冗談もまぜて話題へ進む酒
宿浴衣過ちに酔う港の灯

醜女のイヤリングくさりにも見え
定退の背広バツジを外さない

川西市 松本 ただし

ポックリ寺変な時には効かぬよう

七十の坂道こおろぎ鳴いている

割切れぬ物割り切って仮分数

思う事言うて傾くやじろべえ

大阪市 町田 達子

易の灯へ手を出すギャルの日暮れどき

路地裏にも少し情緒の虫を聞き

くぎ付けになって追うてるサスペンス

大阪市 北山 悟郎

前立腺の話そこかしこ戦友会

表彰状以下同文の列の中

乱塾に親の懐ろ過熱する

大阪市 井上 白峰

都会人自負する人の故郷訛り

前の嘘忘れて次の嘘を言う

前向きの姿勢で心は後ろ向き

岡山市 井上 柳五郎

ペアルック老いの二人が腕を組み

口下手と自縛自縄のどもり勝ち

へつらいの満ちるこの席逃げたいな

岡山市 行吉 照路

錆びたねじ地震に耐えた自負があり

弾む毬担当区域はまかせとき
セールの布石半年先を打ち

岡山県

二宗 吟 平

竹べらヘルソンの土が泣いている
はめてから貰った花の名を忘れ
酔うた時言えとは無茶な知恵を貸し

岡山県

山 本 玉 恵

保険屋が人の命を軽う見る
人間不信狸のまあい瞳が笑う
くず箆で昨日の夢がさわぎ出す

米子市

茂 理 高 代

やさしさが欲しくて拗ねる帯の冷え
気まぐれに化粧がしたい雨の午後
組板のリズムが呆けを封じてる

米子市

川 上 より子

請われてる想いごはんより温かい
新人類と住んでいるから見において
新人類の腹話術は優しいよ

吹田市

茂 見 よ志子

承知して嘘きいてやる釣忍
食欲の秋包丁を砥ぎあげる
火種抱く女はよせつけないことに

吹田市

園 田 文 子

Tシャツで気どらぬ旅の二人づれ
耳うちのあやしい影が笑ってる

地上げ屋の虫虻に泣く生地獄

出雲市

小白金 房 子

足早に渡る雨の交差点

ご先祖の美田を守る父の意地
子の出世戻らず古老の鍬光る

出雲市

竹 治 ちかし

ため息で妻の家計簿とじられる
子と歩幅合わせた母の温い影

故里の夕焼け色は母の色

寝屋川市

平 松 かすみ

神様にいけずされずに真珠婚
お父さんお父さんと娘は義父に酌ぎ

流し目にだんだん強くなるハート

寝屋川市

堀 江 光 子

老け役でトップスターの返り咲き
どこにでもある山なれど故郷の山

外国で見る日の丸は目に熱し

鳥取市

広 本 文 子

唄になり絵になりたくておんなです
眺めれば花もあなたもちりぢりに

さむらいの腰でポケットベルが鳴る

島根県

北 川 民 子

月満ちるまでは宵待草になろう
欠伸して推理小説侍らせる

まとまりかけたところへポケットベルがなり

高知県 中内 朱 坊

喝采はないが背かぬ土と生き

無月でもさすが名所の桂浜

古里で一番美味い岩清水

高知県 北川 竹 萌

打つ手無くお旅所の松枯れてゆく

奥入瀬の桂月遺徳酒供養

顔役の顔に正論押しやられ

姫路市 丁 坪 サワ子

独り芝居涙の種も切れました

事後承諾の話へ耳は貸せません

サングラスの中で思案をする目玉

姫路市 中 塚 遊 峰

節くれの指が物言う寡婦六十路

争うて泣いた園児が先き歌う

問題の土地あわだち草の花ざかり

富田林市 片 岡 智恵子

みちのくの旅

底より水湧く十和田湖で御座候

八甲田山いくさの過去は舗装され

わんこそば疾風のように飛んでくる

富田林市 松 本 今日子

運動会終つて話題は七五三

吊り橋を揺すっているのは私かも

研修に温泉ゴルフが入れてあり

和歌山県 山 田 高 夫

割り勘で触れ合う趣味を語る酒

忍び込む月へ白蛇の喘ぐ息

柏手をこだまで返す神の留守

和歌山県 青 枝 鉄 治

高野山参詣

柿の里石童丸も食べたろう

三度目の職の椅子には肘がない

祭りの寄付隣の額にプラスする

福岡県 横 地 雅 風

出ると打つ出ないと舐める世を渡り

去年今年晴耕はテストで明け暮れる

時々天狗の孫を聞いてやる

静岡市 渥 美 弧 秀

いとし子も母も好きです連絡簿

ひと言が多くて祖父の灯が揺らぐ

檀山に近い夫婦の幾春秋

羽曳野市 田 中 隆 二

それなりの夫婦と思うお茶を入れ

風の盆別れ上手な酔芙蓉

秋の章別れのドラマ書くおんな

西宮市 瀬 尾 六郎太

さあ十月白から紺へ気新た

旬の秋刀魚食べて風は秋

古きかな蓋についた飯丹念に

和泉市 岡井 やすお

対策は悪が儲けた後に出る

燃えつきて定年というユニホーム
離婚から運命線が狂い出す
雰囲気でこうも違うか酒の味

えらい人もやっぱり罪はなすり合う
だんじりが踊って通る赤信号

藤井寺市 福元 みのる

親知らぬひよこに土知らぬ小芋

ひいき目に見てもやっぱり70点
昨日までマイケルさんを知らなんだ
富田林市 新開 千代女

ボケた人ほどボケてると思わない
火と燃える晶子水さらさらの万智

五所川原市 加藤 彩人

一本の酒生き甲斐となる余生

当て有って散歩が通る廻り道
裏の裏の裏知ってて騙される
岡山県 直原 七面山

親子二代音痴で孫にピアノ買い
朗らかな妻で足し算だけが好き

茨木市 堀 良江

年甲斐もなくやさしさに負けました

黄金の雲あこ湾は風いでいる
柿たわわ伊勢路の駅に一人佇つ
豊中市 上田 登志実

「お気楽に」そうはいかない上司です

打ち込めるものある幸を秋日和
海南市 三宅 保

日の丸を愛して残るわだかまり

無位無冠畑が一番似合う夫
円満な夫婦と尽きぬいい話
福岡市 吉川 一郎

かわりも困るが無視されたくもなし

ワープロを打つとペンだこ淋しがる
箕面市 椎江 清芳

隣まで来て引き返す福の神

浮気でもしろと女房に励まされ
他人から見ると此の身も他人かな
大阪市 塩田 新一郎

丸木橋ついて来るのは妻一人

義理というつけが回って来る師走
豊中市 一瀬 福一

玉手箱お蔵入りする貸金庫
約束のレール敷かれて誕生す
大阪市 横山 為子

自選集

米澤 曉明

逆立ちをすれば川でも渡れそう

小出 智子

迷わせて陰で見守る親でいる
働ける老いへ年金だけたより
男心まる出しでよしコップ酒
連れ立って行こう財布がちと軽い
父ちゃんが一人一役崩しそう

早やばやと炬燵を出している自愛
銀杏散る十年先が見えてくる
エンピツの思えばながいお付き合い
無理なこと言うと言っている仏
杖にする木なら一本植えてある

高橋 操子

人間を野性に戻す握り寿司
浪曲が好きで腹巻放さない
片ちびの靴へポケットベルが鳴る
白百合の気位 雑草寄せつけず
おのろけを聞いてあげよう鳳仙花

月原 宵明

或る時の仏へそくり皆はたく
子や孫についてゆけない世が進む
見直せばふるさと知れない山や川
大自然木々のささやく声かしら
台風の後はからりと晴れた空

八木 千代

健康法に無理はしません歩くだけ
風邪ぐらいは若さが勝った過去のこと
無信心な僕を長生きさせてくれ

金井 文秋

あきらめはせぬ鉄棒の逆上がりがり
寝返りをうつたびに鳴く虫がいる
遅ればせながら思春期更年期
洗い上げて干しかたにこだわっている

たまに書く手紙下書きしてみよう
ドンダリの背比べ政治どう変わる

藤村ノ女

一杯のコーヒー別れが街にある
うす味へ娘が気遣う老いを知る
何気なくなさけをかけてうたぐられ
奥の手の葵の紋は慌てない
奥の手を干すあたたかい風を待つ

正本水客

土鈴のように安心しきった顔がある
蕎麦のいのちは水と頑固にそばを打つ
傘さして苦手意識に立ち向う
膝抱いて慰めの言葉まだ続く
上衣ぬいでこだわりのない席を選ぶ

黒川紫香

北の窓はもう雪空になっている
人形の帽子に止まる冬の蠅
峠から冬仕度する村を見る
ネクタイを結んでくれる女に逢う
沢庵をポリポリ入歯よく馴染む

市川鈴魚

うまく言いぬけると秋が追ってくる
後添いの茶目っ気保険屋となじみ

上目使いの嘘が上手に酌ぎに来る
とてもいい便り水仙芽が揃い
風はいたずら訣れた夢をつれて来る

児島与呂志

久し振り電話の声に情を聞く
そこそこに馴れても人生騙される
風化した戦の痛む膝小僧
追伸の三行書いてまだ迷い
きまぐれな情性で早起きなどしない

工藤甲吉

坪何十万の空き地でチンチロリン
争えぬものよ爪まで齢をとる
長生きをして哀しいという手紙

天皇陛下下痢臓炎手術

脾炎じゃないかと吐き気脅かされ

恩師の故・長谷川霜鳥句碑 生地黒石市に建つ

ふるさとへ還り地酒を嬉しがり

本田恵二朗

人生行路時には喜劇もあって佳し
糟糠の妻瘦せ細り瘦せ細り
朗らかに笑み交している指言葉
丸儲けのように師の技盗み取り
喜怒哀楽全科卒業してしまい

大矢 十郎

大切な手紙ポストへ雨しきり

陽だまりの話を企みなどはない

言いまけたけれど心底を知りました

コスモスよお前土地ごと買われたぞ

ブロック塀賢しき心のまま矢り

野村 太茂津

意地悪婆さん大学生に訊いてみる

首っ引き泥縄煎じ詰めてる玉の汗

負うた子に教えられてる受太刀で

眉唾の答えが返り諦める

諦める外なし二十一世紀

長 野 文 庫

秒針があつて益々忙しい

指定席などと屋台のおでん屋で

鳩にもう記憶が無いが寄つて来る

つかみどり掌の大きさはこれだけか

古傷が痛むようにもある回顧

山 内 静 水

名月やくつきり月にいる兎

どうみても浅ましい吾が面よ

ヨードン ライバルが一人いる

引きさがるほかなしご無理ごもつとも

忘れ物先生もばけなはる

藤 井 明 朗

明治から歩く負けない意地もある

ワープロが流行孫もすすめに来

お人好し腹を読まれてる笑い

嫁がおじいさんと呼ぶのでむつつりも出来ず

落葉さらさら桜土手寒うなる

水 粉 千 翁

まんまるい余生で仰ぐお月さん

萩の扉の月の雫に濡れて住み

見ぬふりで月のベンチに負けました

おろかにも月までとどく梯子酒

罷り出てさすが蓬萊山の月

橘 高 薫 風

谷垣史好兄ご母堂を悼む

大往生森羅万象澄む中で

七五三お出まし猫が太鼓橋

みかん山にても親しいさつま芋

みかん山黄金におけら這い出たか

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

藤村 女

魚屋で蝶の動悸見ていたり

谷垣 史好

夕飯の用意にとマーケットに出て来てさてと魚屋の前に佇つた時そこには生きのよい蝶が動いている姿を目にし片身はおさしみにしてあとは煮付にと先ず値段とも相談がある主婦の姿を想像する。

保険屋にパチパチ生命弾かれて

有働 芳仙

あなたのお年ではまだまだ保険に入れます事故保障と入院給付金をつけて最高額でいかがですかと勧められている姿。

おんぶされ渡った橋を父背負い

久家 代仕男

田舎の丸木橋か？ つり橋か？ 年老いた父を背負い渡りながらいつも自分を背負つて渡った父の昔をしみじみと思ひ浮かべている姿。これが人生なのですね。

冷戦の朝も味噌汁湯気を立て

嘉数 兆代賀

昨夜の言い争いも腹に納めてけろつとした姿で主人を送り出すのが妻の務めであるとおしえられて来た明治女の意地でもある、夫婦なればこそである。

空想の歩幅で続く秋の道

堀江 正朗

秋だなとさわやかな空気を吸い表を歩いて見る。盲人だが少年の目を想い出し春夏秋冬を肌を感じるまま桜並木の土手には今秋桜が真盛り。なよなよと風にまかせてゆらいでいる秋の小道を網膜に空想にふけつていいる。

カタカナの仕事何するお方や

西出 楓楽

時代と共にカタカナの言葉が多くなりカタカナで言えば何か文明のように聞こえるけれど仕事をすれば職人さんである。色々な言葉が出来てきましたネ。

軽石が石の貌して浮いてみせ

中川 幸一

軽石はたしかに石の仲間です。石ですよ。初恋は遠い日水車が廻つた

渡辺 独歩

美しい水の流れに水車が廻っていた思い出は美しい。それは遠い昔になつてしまつたが彼女はどこでどうしている事か。故郷の小川にもう水車は見あたらないのではと思つ。

滝ツボにうたれビールも修行する

高橋 千万子

人間だけかと思つたらビールも滝に打たれている。修験者だけではない滝に打たれたビ

ールはさぞかしのどにしみ通りうまいことでしょう。

ラブレターあとは切手を貼るだけで

江口 度

さあ書けたぞ彼女はどんな顔するかな。返事をくれるかな。いい返事を祈ります。

じんむすいせい菊の糸譜をまだ覚え

奥田 みつ子

明治生れはほとんど暗記させられたものです。貴女の時代でもありましたか、昔の事はいつ迄も忘れがたいですね。

老眼鏡拭きつつ秋の夜が更ける

藤井 一二三

秋の夜長を読書に耽り、ちよつと疲れた様子で眼鏡を拭きつつ一服、テレビでもとスィッチを入れて、さてコーヒーにするか？ 紅茶にするか、ブランドーを一滴落しませよ？ ぼちぼちお休みになつては、明日がありますよ。

自転車の数も商敵見て通り

藤田 頂留子

店がひまなのでさて一週り同業を見て来ようとお出掛け、何処も同じかな客の入り又自転車台の数も数えて見て廻つている。

豊かさに慣れて大事なものを捨て

長野 文庫

どちら向いてもどこへ行つてもほしい物が手のとどく所にふんだんとある。修理して使う事はせず新製品新製品と使い捨て。どこ行つても山の様な粗大ごみ。どんどんとお金を捨てている様は明治人間にはたまらなくなる。

川柳 太平記 (115)

川柳の群像

近江砂人

東野 太八

「青木月斗（俳人）氏宅で花木天平（リ）氏が私の名刺をつくづく眺めてこう言った。

「この砂という字はサンズイの砂の方が正しいように思う、沙人とかえなさいよ」

「実はスナンドとか、シャジンとかよまれグツとすることが多いんです。よほどの人でないとノツケからサジンと読んでくれません。しかし砂を沙と変えようとは思いません。私は砂という字の形やら味やらがとても好きなので変える意志は毛頭もっていません」

と返事をした。たとえ中江藤樹の近江聖人のニセモノといわれても……（「三味線草」随筆）

近江砂人は本名夷佐^{ヒササ}。明治41年2月11日大阪市生れ。新聞広告代理業栄社社長。大正14年十九歳から作句、昭和3年「番傘」同

人となり近江砂人と号したが、近江というのは、本姓の夷を分解して大弓、それをシャレてオーミとなった。

○娼婦らのバラソル寂し奉戴日 砂人

戦時中のこの句が筆者の心になぜか灼きついている。奉戴日というのは対米戦争の宣戦布告をした十二月八日を銘記し、政府令により、八の日は娼楼も飲食店も自粛させて休日とした慣例の日である。

さる会合で顔を合わせた砂人にこの句のことをいいたら「思い出に残っている句です。

寂しを哀しとしたかったのですが……と懐しそうな笑顔をみせた。これが初対面、随分と昔の話、この月から中絶していた「番傘」が届くようになり、折にふれて各柳誌の拙文に

対するあたたい感想や批評を貰うようになった。心やさしく律義な人だなと思った。

「天地人制のあった昭和のはじめの番傘例会で、天をとった砂人君を私等はそれ以後注目しはじめた。水府氏の親戚（水府夫人信江の実弟）で、吉井勇門下の歌人だと誰かが言った記憶がある。ある者はこれじゃあ近江歌人だといった。それから間もなく二十歳台の私達はいつか交りを深めていった。どちらも子なし夫婦で、齢も違わぬので自然と気が合った。」（松本波郎悼文）

昭和39年菊野夫人同伴で欧米の旅に上ってその嬉しい旅日記が番傘に連載されていたがその翌年暮卒中で倒れた。同年夏、水府が死去したあと主幹に就任したばかりだった。幸い一年後に回復したが、その療養につとめつ番傘の大神帯の運営に力を尽した。そうした最中の昭和42年9月、番傘の内紛が起った。この事件は番傘の社運を左右する大事件に発展するかと案じられたが、この騒擾事件をよく克服。昭和53年11月番傘創立七十周年大会を催し、「近江砂人川柳集」が出版された。このあと、ある会合で砂人と顔を合わせる機会に恵まれたとき、茶のみ話で砂人が

「貴方は中国に永年いられたようだが、万

里の長城を御存知ですか」

と切り出されたので、私の兵役時代、熱河省承德にいて、華北の長城付近が演習場でしたと答へ、往時の長城の模様を詳しく語った。

「羨ましいですね。私は長城を歩けなくとも一度この長城をそば近くで見たかった」と寂しく述懐していた。これが砂人主幹との最後の出会いで昭和54年1月10日没。文明院演壇砂人居士が法名、享年七〇。

砂人は文化功労者として大阪市民表彰（昭和50年）をうけ、著書に「川柳の作り方」（明治書院刊）「川柳実作入門」（大泉書店刊）「川柳入門」（保育社刊）に晩年の「近江砂人川柳集」等がある。

「川柳のように短い詩型の文芸で、作者の感動を読む人に伝えることは難しいことであるが、このような感動が伝わらなければ、その作品の価値は乏しい。古今往来名歌名句として人口に膾炙するのは理解しやすい作品である。そして感動の伝達性も顕著である。

佳句佳吟一読明快いつの世も 砂人」

（「川柳・鑑賞と解釈」川柳誌所載）

これが近江砂人の53年間の川柳の生涯を一貫した川柳上の確固たる信念であった。

砂人晩年の川柳界での大きな仕事は、日本

川柳協会の設立にあった。番傘主幹たる砂人が、本協会の設立発起人の一人であったことが昭和49年の日川協設立総会を実現させたといっても過言ではあるまい。実行委員長格で東奔西走する堀口塊人に、砂人は十萬円のカンパを行い、塊人を感激させたことは、すでに塊人の項で述べた。

「砂人氏の文脈は劇作家食満南北に始まり東京を離れた逆境の吉井勇の知遇も得たり、また作家長谷川幸延との交遊、劇作家北条秀司との交遊、近くは作家藤沢桓夫夫妻の仲人をしてからのつき合いなどがあり、加えて出版界とのつながりは、四冊の川柳入門書を執筆、刊行に及んでくる。川柳人としてこれだけの顔をもった人は少ないのではないかと思う」（「川柳」近江砂人のおもいで、磯野いさむ）

「法隆寺の百済観音と救世観音を詠った全部仮名書きの句が砂人川柳集に十句ある。

その頃、書家で歌人の会津八一氏の仮名書きの歌集「鹿鳴集」が大和路の古寺を訪ねる人々の間で人気があり、愛唱されていた。ハーフアンクの砂人氏は直ちにこの手法を採り入れて数句を残された。

近江砂人、生島鳥語、松本波郎ら番傘の先輩たちとの古寺巡礼に私が加った。昭和19年

戦争奇烈な中で私たちの心の憩いだった。

（略）その中で砂人氏は着々と見聞の川柳化を図り佳作を残されているのに、私の句帖には殆ど収穫のなかったのが恥しい。（同上）

寂光院駕籠が一挺届きそう

砂人

「近江砂人、彼は鼻の為に苦しめられている。鼻は自尊心のシンボルだ。彼は自らの技巧をもてあましている。

いろ街の中に淋しきかきもち屋 砂人
吉井勇の愛弟子で創作にも筆をとる。彼の若さ、をもつてしても秋風のしのび寄るような技巧はいいか、わるいか

丹前の綿よ吹け吹け春となり

砂人

「それはブレンソーダのような春でした」シラノ、砂人、君だからこんな批評をするのですよ、わかって。（昭和7年4月「番傘」堀口塊人）このころ砂人を番傘同人に推薦したのはこの塊人で「私の義弟だからと言って甘く考へて貰つては困ります、あなたに任せます」といったのは水府である。砂人24歳のときだった。（参考資料「番傘近江砂人追悼号ほか」）

★次回は「大山竹二」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十三丁)

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故岡田 甫

566 夢中に成はつ魂茶屋に置キ

八木 魂は刀。茶屋を通す客は茶屋へ刀剣を預けた。直接妓楼へ上る客はその内証へ預けた。

かうさんのやうに大小わたすなり

一八二二

囚人のよふに大小ひんもがれ 宝二智二
武士の魂ともいふべき大小を茶屋に預ければ、遊びに夢中になるはずだ、という句。

多田 賛

人は武士なぜ町人に成て来る

五二三

567 人別をめてたくぬけて名が替り

八木 吉原細見を「人別帖」などともいう。

「人別をめてたく抜けて」で年明、または落籍を示し、吉原の遊女の籍を抜けて、のことである。源氏名から、もとの娑婆の戸籍の本名に帰って「名が替る」のである。

石田 晋 「遊女」から「奥さん」と呼び名がかわった、と軽く考えてはいけなにか。

小野 結婚と考えていました。

石田 成 礎賛。いわゆる正規の「人別帳」であれば名は替らないのではないのでしょうか？

大屋 右同。源氏名から本業の呼び名に変わったで良いのではないか。

多田 私としては「嫁入り」と思っていた。

旧家などその家独特の嫁の呼び名などあった

か。遊女説は新説で傾聴に値する。

568 蛇の出遣に賑ふ六あみた

八木 「蛇の出入り」は、春秋の彼岸を指す。二月と八月。彼岸には六阿弥陀詣もさかんなのである。

六あみだへび迄出たりは入ッたり

一三三三

へび穴へおさまり切るとさむくなり

安九宮 3

多田 賛

569 しぶ皮をむいてひらりと猪牙へ乗

八木 「洪皮が剥ける」は垢ぬけして容貌が

美しくなる、又は物事に順れて巧者になるとの意。

舟宿へ内のりちぎをぬいで行き 一34

という句がある。主題句も似た趣向で、舟宿で着替えて（渋皮を剥いて）垢抜けしたかつこうになり、ひらりと猪牙へ乗る、という句。

石田晋「渋皮をむく」は、着物の着がえか、真白面から遊び人へか、物事に馴れることか。着物の着がえと馴れとが掛けてあるようにも思えるが。

小野「賛。石田説の如く、着がえと粹になると掛けてあるように思う。

多田「同右。

570 竹村の伊勢あたしはい所てなし

八木「伊勢というと、川柳ではケチの代名詞みたいになつてゐるが、吉原の竹村伊勢という菓子屋は、どうして、大麥古くからの有名な、とんでもない、ドケチな所ではない。

竹村の伊勢しわくくない土地で売り

一〇二六

南「あたしはい所」は場所、竹村の伊勢は、しわいどころかその名に反して、金を撒き棄てる所、吉原にあるとの意に解してしました。

大まかな所だに菓子や伊勢とつけ

四〇30

石田成「同右。

竹村伊勢はしわく無いここに住

一五一二九

多田「賛。

571 堂守ハ塔から落た大工也

八木「寺院の建設工事又は修理の際、大工が塔の建築現場で高い所から落ちる、という事故を起した。彼はけがをして体が不自由になり、高い所へのぼる大工という職業を続けることができない。そこで、でき上つた寺院の「堂守」にやとつてもらつてゐる。

石田晋「堂守は老人や身体不自由者が多く、近くに五重塔などがあるとところをみると、あそこから落ちた大工だろうという想像句ではないか。

多田「同右。

572 生酔の女房寝声て礼を言イ

八木「男が生酔、よっぱらつてしまつたので、友達が送つて行つた。女房は毎度のことで馴れてるので起きて来ず寝声で礼をいう。南「賛。但し礎「起きて来ず」というので

はなく、あわてて出て来たが待ちくたびれてうたたねしていたのか、その礼をいう声が寝声だというのではなからうか？

あしたおっしゃれと内義へ下戸渡し

二二

御ていしゆをわたしすると下戸の声

明八義一

多田「賛。

573 おとろかれぬるにそろ／＼客は逃ケ

八木「「おどろかれぬる」で、立秋を暗示していよう。秋は吉原の年中行事が多い。

句意は、立秋の頃、そろそろ八朔とか、二度の月見の仕舞いをつけることを迫られるので、客は逃げ出す、という句である。

南「賛。

秋きぬと目にハ見えねど客が切れ

四九36

客こそ見へね秋の来るつらい事

五一3

大屋「賛。

秋来にけりと傾城をおどろかし

二三39

という場合もある。

多田「賛。

水煙抄

黒川紫香選

羽曳野市 吉川寿美

藤井寺市 高田美代子

果せない夢見続ける木の枕
我武者羅な風を味方に立ち上る
口軽なおんなが回す風車
逃げ足の速い男と秋の雲
病歴を一つ殖やして秋深む

今治市 野村京子

ちぎり絵の花秋風に褪せて行く
標的へ矢をためらわぬのも女
鍵盤へ少女の指の恋ごころ
ハイハイと聞いて父より強い母
賞められた髪型にして逢いに行く

竹原市 信本博子

ダイヤモンド宝石箱で孤独なり
不満気にポトリ青柿木を離れ
満月に帰るしかないかぐや姫
恋燃えて踊り疲れた赤い靴
水槽の中で魚の人定め

言い訳が少し上手になって秋
家中の灯を点けているひとりの夜
ルール作ってナンセンスが続く
達筆も下手も読むのに苦労する
西へ西へ続く道あり重い枷

長岡京市 木本如洲

子がひとり去って砂場は昏れている
招待の酒で笛吹くピエロたち
自画像が生涯描けぬ父でよい
意味のない笑顔こころの貧しい日
藪の径水車に旧い水がある

富山市 舟渡杏花

シーソーゲームの果てふところの不発弾
ホラ貝の音色それぞれある派閥
以心伝心生きていたかと来た便り
待たされて一日終るエキストラ
耐ハイでバイバイうしろ振り向かず

八尾市 高杉千歩

亡母が主役で十三回忌小春空

運命線信し呑気な夫婦箸

幻想の花をバックに筆をおく

横顔が好きで自画像まだ描けず

筋書を変えて噂をまき散らし

広島市 流奈美子

童心が影絵の中で生き続け

自分史に記す情けを受けた数

夢ばかり写す鏡が手離せず

返事ほしくて人形のへそ押してみる

吹きだまり扁平足が寄って来る

倉敷市 田中好啓

開経傷おんなに祈ること多し

旅好きの靴は穿きよく脱ぎやすい

隔日にパンの匂いと味噌の香と

二日酔いが嫌い焼酎ばかり飲む

野薊のやさしさ虫に宿を貸す

名古屋市 藤井高子

児の声が天へ届いて鬼消える

そうかそうかと老いた柳はさからわず

アウトローで寒い靴など履いてます

年金暮しでふわりふわりと流される

手袋の白にころりと騙される

高槻市 河瀬芳子

よろこびを分つ亡夫へ灯を点す

花束に隠れた棘は見ぬことに

韋駄天で行こうかそつと下駄を脱ぐ

空に襷あるのか昨日の雲たちよ

兄妹の語らい呉れた一周忌

佐賀県 寺中三枝子

ディフェンスの固い女の十二月

しゃきしゃきと冬の野菜はお喋りで

庭づたい声かけ合って姑と住む

パトカーが暮れの死角を突いてくる

乱舞する枯葉よ遠い遠い春

堺市 桜沢あかり

カルチャーの窓から秋の二上山

じんわりと効く漢方薬をすすめられ

銀行で身の上話する遺産

ぶらぶらとしてたら列に組み込まれ

本心を聞き出す酒を買いに行く

高槻市 笠嶋恵美子

もう虫も鳴かぬ夜道を足早に

寿と書くよろこびを娘がくれる

なんだかんだと世話をやいても他人様

十二月仁王の鼻に汗が浮く

風呂敷を丸くたたんで利口振る

草津市 久保和友

美術館の前でとまった救急車

三重塔の三階から見たこの世

人間くさい絵がない足立美術館

糠袋は母からのもの皆生の湯
そして秋の感じでのぼる大山寺

熊本市 永田俊子

誰も来なかった今日は土曜日ワイン飲む
そう言いながら弥次馬になっている

伝言板の一行にあるドラマ

消しゴムを片手に暮す慎重派
損しない程度に合せる口の裏

熊本市 宇野昭代

パチンコのキャラメルですが仏様
かくし味程の助言を母がくれ

どうにもならぬ事を気に病む親心

手加減を申しつかっている拳固

敬老の日のご馳走が胃に溜り

熊本県 大川幸子

もの悲し柘榴静かに割れる夜
折鶴を飛ばせば後を追う未練

杵音のない餅搗きへ慣らされる

初対面なのに通うものを持ち

空腹へサンプルさえも匂い出す

鳥取県 土橋はるお

銀行のタオルばかり干してある

耳掃除したら笑いが止まらない

赤い羽根つけて善人顔をする

前置きの長い乾杯の音頭だ

雷の子と屋上で鬼ごっこ

岐阜県 渡辺杏村
枯葉散るベレー帽でもかぶろうか
かあさんに頼り切ってる年の暮

ゲレンデを夢に画いてアルバイト
木枯しについ誘われる縄のれん

ワープロでのんびりつくる年賀状

吹田市 井上照子
菊活けて昨日の傷をなぐさめる
籠にいて飛べない鳥が歌うたう

背の丸い母に紅葉と京料理
一つ星あの指切りをなつかしむ

ライバルの後姿にみる自信

新発田市 上鈴木春枝
まちがえた電話へやさしすぎる声
新米を送り今年の義理果たす

バーゲンで会って目礼だけしとく
本心をそつと聞かせるコップ酒

形勢へまずは無口になっておき

久留米市 鶴久 百万両
いのちきみに預けて魔女の名を捨てる
痛くないとわかっていても歯科嫌い

囑託の目から序列の愚を嘆く
器用なる男を敵にした落日

天高く秋風を縫う阿蘇の旅

守口市 森川 まさお
印象が纏まりかけて個展出る

話の中に駄洒落多くてくたびれる
庭と畑の間の柿がよく実り

貪欲な鴉の羽根は矢張り黒

一点を照らしただけの話所の灯

静岡県 藺田 獭 沓

下に置かぬおもてなしでは肩が凝り

旅先の絵はがき落とす丸ポスト

マネキンの着てるサイズの上を買う

クモの巣の破れ今年も秋深し

裁判所出て秋風の心地よさ

東予市 小山 悠 泉

筋道を通して父の一本気

バトンタッチする子が居ない稲を刈る

島総出花嫁を待つ菊日和

叩かれてねばりを見せる喧嘩独楽

大阪市 上田 柳 影

聞かれたら幸福ですと今言える

欲のない余生の顔が美しい

悔い少しあって仁王の眼を避ける

写され上手でポーズもちゃんと堂に入り

京都市 松川 芳 子

太っても痩せても恐い体重計

情には弱い女の肩パット

隼の如き指揮者の目の動き

口紅の濃さを鏡がたしなめる

熊本市 黒田 緑

薬にも毒にもならずついて行き

二点間の最短距離に踏み迷い

いささかの自由を潜望鏡の視野

可愛くも憎くも見える風の向き

京都市 木村 たけし

妥協するそばん膝が落ちつかぬ

家計簿に迫る言葉妻はもつ

エプロンの白にかくれる午後の雨

七十のいのち童話と生きている

米子市 小村 てい子

川底の石と人情ばなしする

風に舞う子供同士の空威張り

ひと回り灰を蒔いてもおとこと女

夫婦茶碗を洗い続ける秋彼岸

唐津市 相葉 あき

夜長です虫のオシャベリ聞いてやる

脚本にしたい思い出だつてある

結論は一ランク上の人がする

音立てる工場の中で安住し

米子市 足立 由美子

時々は開き直って生きる日も

じゃがいもの様にデコボコ生きている

目標はないが気ままに生きている

約束を裏切りはせぬ白い指

鳥取県 山根 八重

月見草遠い汽笛をきいて咲く
笹舟をそつと浮かべて亡母思ふ
渡し舟赤いトンボも客となる

滋賀県

安田志津

赤い羽根ついた去年の服でゆく
りんどうの紫活けて秋一人
決心がついたは秋のなかばすぎ
大げさに親展と来る依頼状

西宮市

松本一郎

花道を知らぬ思の椅子一つ
日本にまだまだ見たいところがある
満ち足りて何故か寝られぬ夜がある
寝たきりの母に季節は虫が告げ

熊本県

高野宵草

俺よりも吞める息子へ苦笑する
実印は力一杯押さえられ
左手をかばえば右手が神経痛
脱サラのように鉢から地に植わり

佐賀市

江口万亀子

ワンテンポ遅れて笑う妻でよい
余生いま残る頁を愛で埋め
一年生応援されてたちどまり
夢のキープ余生の為にしておこう

兵庫県

森脇和子

男手があつたらなあと棚を吊る
紫が好きで小唄を口ずさむ

胃の透視黒い汚点は妬心かも
訃報聞く朝の受話器が手に重い

尼崎市

鈴木良征

それぞれに思いを秘めているラッパ
そのうちに無能な奴は足を出す
萩の花そよと秋風呼んでくる
嘘ついて日毎に人氣褪せてゆく

尼崎市

森安夢之助

頂上で登った苦しさ忘れている
欠伸して外出をする懷手
鐘が鳴る夕陽が赤い鴉の子
ぬり絵するクレヨンの子赤瘦せている

尼崎市

山田保蔵

ポーナスも夏の休みも他人ごと
よく冷えたビールに挨拶長すぎる
動くなとおさえて撮ってる宮参り
動かして見よとりハビリ痛い足

佐賀市

古川一徳

フレームを替えて眼鏡で若返る
元氣なうち書いた遺言照れて見せ
身のほどは弁えている靴の底
正論でくる妻世間を狭くする

大阪府

神保拓生

健康のおかげ夕餉にビール付く
人なみに兎小屋からフルムーン
パパの顔はみ出た孫の葉書来る

お見舞にメロン目当の孫が来る

寝屋川市

太田 藍子

汗だくになって着せてる娘の晴着

行列につられて買ったタイコ焼

冗談と見えぬ大胆な話題

おさそいへ昨日も今日も紅葉狩り

八尾市

鷺見 章

好物が三日続いた重い箸

遠巻きの輪へ高らかに救急車

屋台そば路地の真上は北斗星

縫いぐるみ抱いて未婚の少女趣味

尼崎市

尾宮 弘治

吊り橋で震える妻の写真撮る

病み勝ちの父を励ます古時計

コーヒーを運び二浪の背を叩く

一文字が抜けた病母の文を読み

青森県

福士 トキ

どう背伸びしても見えない堀の内

くよくよは二の次秋の空は晴れ

手についた仕事は一つご飯炊く

お隣が解体されて山が見え

和歌山市

田中 輝子

出直す一步身辺整理から始め

いさかいの朝も弁当作りおく

矢印の切れた所ではっとする

背を流す思い出一つ積むように

下絵から噂に挑む線を画く

演出をした着流しに影がない

女子大が三々五々に群れている

上着脱いでいても長男らしい位置

静岡市

杉山 やす

向ってはやえない事が多過ぎる

へそくりが少し貯まるとたまされる

金のいる話になるとみな無口

悦びを部屋一ぱいに敬老日

守口市

結城 君子

有給休暇全部使ってほめられる

やっこさむいた栗から憎い虫

猫ぎらい猫の画面にアレルギー

又同じ話になって今日終る

貝塚市

池田 寿美子

眩しい湖に白鳥揃うて今日わ

おっとりと株に鋭い友一人

土瓶蒸したつぶり味わう夢を持つ

日比谷公園にて

噴水の夕陽に映えて本音吐く

徳島市

宮武 まつ女

負け犬で届かぬ声で天にほえ

半分ずつ濡れて二つのランドセル

吟詠の会で花束子にもらう

鈍行でとっても嬉しい夢をくれ

大阪市 山田 妙子

手探りでたどり着いたら元の道

これでもかフアックスまでが追ってくる

でめきんへ顔ではないと話しかけ

季節ごと娘らが殻を脱ぎ捨て

鳥取県 太田 幸枝

爪伸びる倅せ朝の爪の音

変化球となりの塀を越すように

北壁を登るスリルな趣味がある

JRになっても汽笛変らない

大阪市 今西 静子

ただいまに秋がこぼれる子のリュック

舞うことが好きで可愛い藤娘

2DKピアノは里に置いたまま

変りばえしない地下街で母迷う

吹田市 栗谷 春子

レストランと呼ばれるものがこんど建ち

運動会の朝というのに怒られる

金木犀鏡の前で髪にさす

しんどくはないが余生が長過ぎる

岡山県 千原理 恵

ライバルが芸に磨きをかけてくれ

御輿よりでかいと思う肩車

甘党で貯めた話はまだ聞かぬ

笑顔ばかり繕っている花の精

鳥取県 小谷 美千

飾り窓の小使小僧マント着る

燎原の火か十五の春の野心とも

すすき野の風の行方が気にかかる

おしゃべりな雀に胸を切り裂かれ

広島県 田村 新造

生造り生簀のチヌを指名する

黒ずくめあの娘忍者になったのか

白内障妻に目医者へ連れてかれ

横滑りで来たのにあごで使われる

熊本県 岩切 康子

原宿の若者茶の間へニールック

鉛筆に手垢も沁みて今日を終え

日曜日決心ついて動き出し

精一杯犬と戯れる休日

今治市 渡邊 伊津志

新築の報告をする墓参り

無邪気さをまだ持っている母の声

人柄がみんな出ている旅の恥

ふるさとに帰って僕を取り戻し

京都府 小林 英子

星空を満喫してる露天風呂

豆アンカー迫力見せる秋日和

懺悔する滝に白衣が透けている

自問自答そしてようやく許す気に

西宮市 秋元 てる

時めいている人だから許さない

真似事のような祝いに鯛届く
会長がいい人なので休めない
母ちゃんは奥の手いっぱい持っている

尼崎市 吉 永 伊三郎

残り火をかき立て女足袋を履く
シルバーの席に残った赤い本
松葉杖やっぱりバスに乗り遅れ
道を説く衣の袖が空けてある

島根県 菅 田 かつ子

クレヨンの青が無くなる秋の空
病みつけばみんな優しくしてくれる
安物の傘が役立つにわか雨
礼服の重さが私をしばらくつけ

和歌山県 森 三 枝 子

無器用な妻へ器用な夫がつき
久し振り法事の席が賑やかな
編棒のリードに酔っている毛糸
色気より食い気と行こう秋だから

岡山県 伏 見 すみれ

名代官まあるく納めた久世の里
手相見が言うた言葉はまだ信じ
夏休み虫の好きな子嫌いな子
孫去んで閑居を秋の風が吹く

前月分 竹原市 岩 本 笑 子

サンマ焼く夕焼け空は今暮れる
よくしゃべる口だと思ふ長女次女

レースのカーテンに見つけた夏の忘れもの

竹原市 岩 本 笑 子

考えている間にバラが咲きました
ここが終着駅ああ雪が降るか
三面鏡見知らぬ顔が笑うてる

静岡市 柳 沢 た ま

父ちゃんの握り拳でコブが出来
セールの相槌打って買わされる
通勤のバスもいつしか指定席

米子市 新 正 子

母が待つ故郷の同じ円い月
ネギ刻む音が可愛い新世帯
幸福でそして淋しいひとり旅

大阪市 亀 井 円 女

善人と居るとちよっぴり眠くなる
男の浪漫は嫉ましいほど清らかだ
子がや々と自分のルールを敷き出した

西宮市 上 嶋 ふさ子

河鹿なく川のせせらぎ宿の下駄
虫の音にそぞろ歩きの物思う
コスモスが今を盛りとゆれている

熊本市 北 川 一 進

分の悪い時はのんきになって見せ
冗談を上手に話題変える知恵
代議士になれば遠縁急に増え

静岡市 沢 田 き ん

大胆に夫と腕組む町はずれ

引き出しの奥に潜んだ男文字

かくしてた言葉ころつとすべり出し

愛媛県

八塚三五島

いっばいに傘を開いている女

愛は束の間かたい握手になる別れ

恵まれていると気付いた万歩計

倉敷市

田辺灸六

旅をしてたつぷり秋に染まりたい

病む窓に今朝も見えない陽が昇る

結論を迫る口紅濃くひいて

静岡市

三浦つね

野良犬が信号無視で逝っちゃった

目覚しが隣の部屋も起してる

隙間なく並べて梅の土用干し

岡山県

後安ふさえ

病む友へ一句をそえて元氣付け

浴槽へ電話のベルが呼びたてる

古里を思い出させる萩の道

旭川市

朝倉大柏

親に似ぬ子でみんなからほめてくれ

声出して笑う話は罪がない

手火花の中に少女の妻がいる

唐津市

菊地香代子

上の娘のドラマ見る瞳はもう女

コーヒーが美味しい酔いが少しある

コンバクトタベの酔いは何だろう

静岡市

浅子まつゑ

秋風に淋しげに鳴る風鈴が

草野球虫が飛出すホームラン

駅弁をたまには食べたくなる私

尼崎市

木下義嗣

情熱を消さずに動く胸の内

たくらみのある広告に騙された

逃げ道を教えてくれる風に遇う

尼崎市

的場十四郎

万歩計動いて病逃げている

橋渡ししてから二人の仲の良さ

電柱に片足あげる犬の知恵

鳥取県

黒田くに子

フンフンと愚痴聞き鼻毛抜いている

浮草よ故郷の岸へ戻ろうよ

軍靴の音がレールからも響く

寝屋川市

宮崎菜月

秋燈へ男むつかしく影を置き

稲刈って月のハンコを頂きぬ

嬉しい日心の青空広げたり

鳥取県

津村八重子

老いの身に時のきざみが早すぎる

一人娘が嫁ぎうつろな宵となる

角砂糖一つ気にする肥満体

広島県

森川抜智

初盆の仏は野球の選手とか

ただ事でない電話にそつと寄って聞き

お地藏さんのような顔になりたいな

静岡県 片 平 静 代

子供皆大人になってつまらない

笑顔なら少し美人に写ります

ジョギングの見知らぬ人と立ち話

大阪府 稲 本 凡 子

人恋し今日は一度もない電話

一日の予定珍客に潰される

同窓会トイレに仮面落ちていた

堺市 山 本 半 銭

孫連れたお客で話進まない

こんなにやくに裏表ない母の味

机の上片付けてから怠け癖

鳥取県 乾 隆 風

鼻輪をつけた女には見えぬ嫁さんだ

つまずいて吾が白足袋をふり返る

秋刀魚焼く妻の割烹着が白い

京都市 森 川 春 子

病院の献立やはり食べ残す

声上げて案山子を見ている都会っ子

絵馬堂のにおいの中でただ一人

豊中市 三 宅 つえ子

銀杏の実拾う人なく寺の庭

車椅子私の夢に灯がともる

玉の実をまき散らしてゐる公孫樹

岡山県 牧 野 秀 香

八十年働きつづけた胃ですもの

切れた糸繫げば瘤が引っかかる

丸かじるリングの色と孫の頬

高松市 竹 川 折 荷

捻ったら事足る朝が起きられず

在るところにない真夜中の盗み酒

鼻にしかもうリングするところがない

八尾市 椎 尾 公 子

幸福という駅名があり切符売れ

カラフルなポスターずらり駅の壁

屋上よりビヤガーデンの提灯が

静岡市 安 本 孝 平

良心の限界に住むかたつむり

愚痴一つ吞んで氣遣う喉仏

寝言とも思えぬ妻の恨み節

鳥取県 乾 喜 与 志

雑草の可憐な花よ語ろうよ

野仏を囲みコスモス法話聞く

駅伝を送り迎えて秋ざくら

大阪府 川 原 章 久

片影の土塀に萩のこぼれ咲き

能衣裳白壁に映える上野城

布団太鼓亡母の法事のひる下り

河内長野市 大 西 文 次

象の鼻長いと象は思わない
大学に入りアルバイトに励む
職安で欠伸ぐらいは許される

和泉市 中 川 楓

四十年若き亡父の顔うかぶ
何時からか余生だったか太い指
灰皿になやみの痕が山とある

竹原市 古 田 比呂子

まるい瞳をした末っ子をひぎに抱く
エプロンのポケットいいものみつけた
おしゃべりがエスカレートするこわさ

島根県 小田川 智重子

不機嫌が靴の音から続いている
千代紙にべったり憎いセロテープ
亡父多忙なのか夢にも来てくれぬ

大阪府 藤 森 小雅子

酒とろり愁いは秋の灯へとける
アメリカの話を屋台の椅子ででき
捨て犬とすて猫同じ路地にすみ

愛媛県 石 手 武

花束でさぐりを入れる恋の脈
サンダルの変協どの足にも馴染み
三面記事まさかと思う名を見つけ

大阪府 松 岡 久留美

五葉の松折目ただしい人思う
思い出を尋ねて秋の一人旅

若夫婦明日にかけける銀の音

岡山市 中 嶋 千恵子

底辺のくらしの中にある温み
老いて未だ夢をみている老夫婦
嬉しさをかくし切れない孫の声

藤井寺市 楠 昭 子

紅ついたシャツ雑巾と洗いたい
矢印へ行けば昨日の人が待つ
植木鉢花も明るい窓へ伸び

竹原市 石 原 淑 子

秋の陽へ思いの丈を赤トンボ
胸算用崩れっぱなしの二人旅
久し振り友と二人の菊人形

大阪府 宮 下 と し

フルムーンボンボン船の海の色
満ち足りて子宝だけに恵まれず
秋日和菊によりそう車椅子

佐賀市 石 田 源 吉

給料を運び終った駄馬である
社業には馴れず宴会だけに馴れ
警備員も居ることは居たホテル火事

桜井市 前 山 美恵子

大発見頑固おやじも膝枕
透明人間だったから始めよう
身勝手な自分を責める雨が降る

尼崎市 佐 藤 美代子

よそ者が好きに言ってる古都保存
スケッチ画に祈りを込めて送る文
さすらいで野立に出合う秋日和

高石市 宮田 純一

深夜ひとり女体が揺らぐ露天風呂（奥飛騨温泉郷）

国宝も必ず美男でない仁王

ふるさとの鉄路が消えた路線地図

出雲市 金森 知恵子

裕ちゃん

太陽の季節愛した胡蝶蘭

好きな花心にとめて聞いておく

多からず少なからずで聞き上手

高槻市 津田 スミ子

專業主婦の肩身がせまいみなパート

一軒が二軒になって売り出され

自販機の灯りがうれしい夜の道

大阪市 吐田 純子

一通の電話にもらう人の情

潮騒に疲れを癒すフルムーン

檜山の話聞く日の耳掃除

大阪市 富岡 温子

松茸を横目で睨みしめじ買う

耳にした事で話題を作る老い

木犀の香に誘われて廻り道

伊丹市 小熊 江美

耳いたい話になると咳ばらい

青二才には負けられぬと父の囲碁
良いところでボーイがコーヒータ持て来た

岡山県 後安 江山

不揃いの梨の言い分店先で

我武者羅に生きて女の帯をしめ

箱入りの紙人形が泣いている

和歌山市 丸岩 晏

風が棲んでいるのかコスモスの庭

音すべて吸いつくされた除夜の闇

女に逢うときめきに似て柳誌待つ

泉南市 坂根 流水

陽のあたる座席をさがすよい季節

宰相の候補に野党ただ無言

長生きの秘訣きかれて何も無い

十和田市 阿部 進

いい相撲取っているのに負けが込む

均等法互角に飲んで先に酔い

真心を青空市で買って来る

新潟県 高野 不二

いざという時出せるから貯金箱

病院で計る血圧高くなり

軒かいてて返事もしてる父悲し

尼崎市 明壁 敏之

押売りに座り込まれた昼下り

キープした瓶に吞平と書いておく

土用干し去年のはこり叩き出し

兵庫県 奥野テル

世の常と思えど悲し会者定離
宅配で祭りが届く母の味

編針の目毎に愛が炎えている

黒石市 相馬英三

瘦せ薬売れて今年も平和です
雑草と言われても咲く毒あざみ

馬車馬でも時には御者に笑顔見せ

静岡市 青柳金吾

クラス会皆倅せな顔ばかり

月曜日トクホン匂う通勤車

小春日に膝を枕に耳掃除

出雲市 久谷まこと

柱傷亡父の小言が甦る

親馬鹿の見本が並ぶ体育祭

ダイレクト乗ってはならぬ暮らし向き

岡山県 松本元江

午前五時里は静かに寝ています

絵に書いたように山から陽が昇る

うそ寒い風ばかり吹く年の暮れ

静岡市 大石たき

袖の下くぐるお札のきたなさよ

のんびりと昼寝の後の大あくび

月の夜曾孫と手を引く影ぼうし

田辺市 染道佳明

べっぴんさんのお蔭百円負けてくれ
反逆の時を待っている足の裏
顔見えるほどのブロック塀にする

大阪市 朝田晃世

雨だれが石と妥協のシンフォニー

手のうちを見せて逃げ打つ詰将棋

月あかり思い出ばかり点々と

佐賀県 山口松枝

杭だけが残る境界線の跡

お別れに振るハンカチは派手にする

思い出の港が見える丘に佇ち

弘前市 真喜内 實

戦から生きて還した神がいた

生かされている顔髭もよう伸びる

野薊の棘に触れたい蝶も来る

静岡市 西村千代

待つ人もない気楽さで一泊す

愚痴などとは言わず竹踏み数かぞえ

秋祭り田舎おでんのうまいこと

藤井寺市 菊地繁夫

いい夢を見させてくれた籐枕

補聴器で蚊の鳴く話聞いてやろう

鍋物がフウフウ美味い冬が好き

寝屋川市 井上すみれ

子供囲碁大人の顔がずっと並び

争いに二歳のギャングが火消し役
すすぎが原子供の帽子の浮き沈み

豊中市 玉井房子

借り物に引張り出されて一等賞

色白のおしゃれなあめ娘黒できめ

柄になくしやちこばってる美女の横

岡山県 杉本伊久栄

句の種を探して歩く秋の野辺

後手で思案一句の指を折り

葱きざむ女で倅せかみしめる

豊中市 小林一夫

母子像のどれもマリアのような顔

見送ってふと空腹を思いだし

湖の伝説だから信じよう

尼崎市 中澤向西

へボ将棋飛車は追われて逃げるだけ

石鹼を無精男にプレゼント

十五夜に上げたダンゴが一つ減り

唐津市 浜本治幸

広告を見てシタマゴ買いに行く

蛸噛めば義歯の力の空しさよ

着て見れば素的な服が似合わない

静岡市 滝花喜平

万札の足が速くて追いつけず

大昼寝猫と雀が餌を盗み

雑談の中から拾う知恵袋

河内長野市 植村喜代

ついて来た犬が途中で気が変わり

一びきに誘われて鳴く虫の声

静岡市 久保きぬ

転職になれぬ靴音街を行く

連休の疲れ欠伸で締めくくる

和歌山市 森茜

弱い者いじめをしてる二枚舌

一病をもつてブレイキきくくらし

榎原市 西本保夫

ミニ菜園返上妻の手がきれい

ささやかな楽しみ妻のアイデアが

奈良県 田中紀美代

萩ききよう絵筆の先を秋がゆく

奈良市 米田恭昌

闇討ちにあった気のする人事異動

ゴマをする部下と飲みたい夜もあり

静岡市 中川みつ

見栄みえの御世辞聞いている阿呆らしさ

合理化で切られた首が売れ残り

熊本市 鶴田謹爾

御馳走も僕には一皿だけで足り

雑草の中に見付けた散歩道

和歌山市 根 木 実

花咲いてます小さな駅でありますが
独りとは見られたくない花飾る

鳥取県 田 村 きみ子

露天風呂食べたいような月仰ぎ

黒梓の亡父におはよういつて出る

唐津市 野 田 旭 恒

コンタクトはずせば世間狭くなり
夕立にネグラ追われた蚊に出会い

兵庫県 円 増 貞 子

ひつまぬビックリ箱のとぼけがお
愛の二字いつから聞かぬ共白髪

和歌山県 北 山 凡 太

四の五の言わず付いて来いとは得手勝手
数だけで押してくるなら通せんぼ

泉佐野市 真 崎 浪速子

馴れ過ぎの猿に手を焼く高崎山

特ダネに社会部の灯はまだ消えず

岸和田市 三 輪 通 彦

お若いと言われて赤を選っている

お悔みの言葉に迷う不慮の事故

吹田市 山 田 里 子

料金の不足で着いた寄付願

ひさびさに大声出させる子のリレー

弘前市 小 寺 ギホウ

娘達の戦争が始まる朝が来た
飲みかけのグラスに口紅置いていく

米子市 大 田 みさと

背伸びして山のあなたは見えません
押入れに白装束の旅支度

大阪市 島 路 太 郎

財テクに強い彼女のひとり旅
父と子と母と娘とゆく菊人形

岡山県 池 田 半 仙

コスモスも縛られている道路べり
玄関の花瓶花ある爽やかさ

流山市 神 田 治

日曜日飲んで寝させて欲しいパパ
「先生は狂わなかったですか」愛

八戸市 島 田 昭 治

言いかけてやめた言葉が引っかかり
あばら家に掃除洗濯好きな妻

岡山県 三 村 美恵子

同じ土耕やし話の合う仲間
人まばら忙しそうなコンバイン

島根県 岩 田 三 和

足の指ぬくめたくなる秋の本
ライバルにスマッシュきめる玉の汗

呉市 蔵 重 成 人

戸を叩く風に仮面はもうつけぬ

ガス栓を開いて独り怖くなる

大阪市 堀口 欣一

成田山のお守りつけて特急車

コウモリがとぶよ緑地の夕まぐれ

久留米市 中垣 米之

総裁選コップの中の茶番劇

日の当る場所で羽搏く風見鶏

鳥取県 久野 野草

招かれて招いて絆固く組み

瀬戸の海別れの汽笛波に消え

岡山県 福原 悦子

山愛す夫の肩をいとおしむ

北海道旅の下絵は箱に溜め

静岡市 丹羽 定次

サイレンを寢床で聞いてまた眠る

トイレから満足そうな顔を出し

島根県 今川 三津江

ヘリコプター用事ありそに空を舞う

秋の風百日草も疲れみせ

鳥取県 西浦 小鹿

夕暮れの何事もない風が好き

小春日和に世間話と布団干し

和歌山県 山田 久子

また一人去る人のいて日記帳

二人目も手離すことになって母

待ちわびた名月生憎雨となる

ふるさとも見ているだろう丸い月

出雲市 高橋 きよし

里芋の寄ってたかつて親を抱き

目薬へ夫もやはり口を開け

広島県 藤解 静風

ほころびをつくろい合うて老い夫婦

名月に母窓ごしに手を合せ

岡山県 平田 たけよ

孫が持つバットへコントロールする

ブルドッグを連れた人ですぐ解り

益田市 里本 たかし

いい秋が幸せそうに歩いてる

道に敷く銀杏踏まずに通りたし

摂津市 望月 かずこ

夕月を二人で愛することもあり

一輪の花で珍客待ち受ける

島根県 松本 聖子

雑念ばかり出て来る坐禅くむ

慰めようもなく万年青の根が傷み

竹原市 古田 太虚

子の器にすぎた嫁だよ仲が良し

波乗りのスリル日本海にいとむ

島根県 鈴木 ふみ子

呉市 岡田 寿美礼

月見草大和の野辺でひっそりと
別荘のつもりで想う老いの部屋

鳥取市

山田草人

腹立てぬ修業のごまを描っている

夫に手を引かれる闇は怖くない

羽曳野市

麻野幽玄

餌付箱秋は豊かに盛るデザート

丸かじりリングに似合う赤い頬

岡山県

江口有一朗

うたた寝ヘラジオは調子崩さない

来年も生き抜くプラン箇条書き

鳥根県

児玉幸子

夕月を賞でる峯寺のお茶の席

コスモスの風につかれて秋深む

川西市

田中喜俊

中流ですと車にゴルフ乗せてった

宵闇に芒がなびき秋さみし

鳥根県

加本義良

決断を迫られている別れ道

飽食の雀は平和甘くみる

唐津市

原野常善

もう酒は飲まぬつもりが嘘となり

朝市にとかく人氣のふかし諸

鳥取市

山之内洋

十五夜は砂丘で一人見るでなし

お手紙に何か違った跡がある

和歌山県

田中隆積

去り際も衣笠さんを見習おう

減税の分は子どもへお小遣い

静岡市

谷紀代志

休戦のラッパを孫が吹き鳴らし

飲む程に貴様と俺の戦友会

富田林市

加藤ミツエ

松茸のつもりでしめじの土瓶蒸

紅葉で露天風呂にも紅をさす

愛媛県

西山えつ美

空巢騒動家族の指紋までとられ

真夜中にねずみが部屋をノックする

東大阪市

大平太一郎

通勤車喜怒哀楽も鮎詰めに

円高の試練に耐えて世界知る

唐津市

入江喜久夫

小春日に物言う花と摺れ違い

倦怠期すぎて女房の精気満つ

鳥根県

坂本雪路

機械化が進む減反きびしすぎ

一日の旅でも楽し趣味の友

鳥取県

西川和子

選り分けた種でいい実が取れました

Uターン心配の種増えました

日本平動物園紀行

静岡市 諏訪志げ

ブランコに乗った親子の笑い声

ペンギンはヨチヨチ池を這いあがり

岡山県 富坂志重

団結にけむたい人も有って良し

世なおしに出て来てほしい黄門さん

鳥取県 木下芙葉

生涯を主人の舟であやつられ

つかの間の逢う瀬別れの汽笛なる

大阪市 榊本落児

帰る家あるから俺は旅に出る

東京で関西風の関東煮

吹田市 西岡豊

この人は頼りになると酒を盛る

湯の街のネオンにスリルありそうだ

大和郡山市 渡部トキワ

秋雨に庭木も息をついたよう

運動会赤白みんな参加賞

岡山県 土居ひでの

名月も芋もだんごも甘党で

細ぎれの思い出つなぐかがり糸

京都市 山脇正之

鯖ずしがずいき祭りの母自慢

医療器より老医の触診信じたい

猫の手代りにロボット酷使され

木犀の匂うとこだけ空気澄み

大阪府 平井露芳

乗鞍岳初雪の朝日本晴れ(乗鞍岳に登る)

熱いから焼かずに土へ埋めてくれ

熊本県 立道善太郎

反省をした一年を先送り

一群に飛べない野バト一羽いて

新宮市 船越正

カセツト本耳で読み読み手内職

松茸の香り頂く市場かご

大阪市 喜多佐津乃

東西の塔におぼろの当麻寺

曼荼羅を拝み別室裏手前

豊中市 額田明吉

ネックス恋の仕草も少し慣れ

会えばまた酒が喋らす秋の宵

◆ジュニアの部

吹田市 木原絹

一年で一番食べる四季の秋

母さんのきげんがいいのでおねだりを

枚方市 二宮正彦

オルゴール音の天使がおどり出す

何時間昼ねをしてるのお人形

尼崎市 新井晶子(小四)

愛染帖

橘高薫風選

大阪市 渡部 さと美
出世街道はずれて人の瞳にもどり
花博へ地下鉄音もさせず掘り
島取県 江原 とみお
落穂拾う昔をひとつずつ拾う
汁粉屋に妻とゆくのも償いか
米子市 八木 千代
柿の花はいつ咲いて散ったのですか
満ち潮は土の中にもあるだろう
今治市 月原 宵明
サンガラス秋のさ中をろくでなし
むらさきの臉謀叛のある少女
笠岡市 木山 遠二
天高く人肥え十月十日なり
女性の世うちの女房だけは別
広島県 森川 抜智
満月だ今日は陛下のご退院
ゲートボールはやらぬ老人会には行かぬ
青森市 工藤 甲吉
秋天は高くポカンと孤りいる
モンローを読んだのしい秋灯下

大阪市 小出 智子
お隣の猫もこの頃医者通い
止むを得ず醋の秋見送って
島取県 新家 完司
くしゃみしたびょうしに殻が割れました
落葉松ではなかった枯れた松だった
弘前市 波多野 五葉庵
窓際の椅子で不撓の字を探す
この頬をととても姦婦とよませぬ
平田市 久家 代仕男
曼珠沙華しおれ大地に涙あと
鬼と鬼背中合わせに鬼の舞
富田林市 藤田 泰子
枯葉より紅葉の彩を保護色に
散り際にしても銀杏の黄金色
米子市 澤田 千春
夕暮れて芒が光る月の道
伸びた影が私をみつめ離れない
米子市 川上 より子
月の夜想うてはならぬ上げた毯
ふりむくと池に必ずおっこちる
寝屋川市 堀江 光子
北浜で鳴らした顔も丸くなり
大地から生え出たように大和古寺
愛媛県 八塚 三五島
流れ流れて母なる浜にある想い
息つめて表通りを駆けぬける
大阪市 板東 倫子
幕下ろす日のマジックか余命表
逆境に男が見せた幼児性
堺市 高橋 千万子

冗談で話したウソのあと始末
余生静かに過去を心に坂降りる
伊丹市 榎谷 寿馬
いが栗を割るといつても亡父が出る
米子市 田中 亜弥
タンポポが今も咲いてる母の文
和歌山市 西山 幸
ピリオドが上手に打てぬ五色豆
和歌山市 根本 実
嫁つちまったここに独りのオールブラックジョー
豊中市 辻川 慶子
空蟬も落葉にまじり焚かれてる
米子市 林 荒介
鉄棒の高さに首がついている
和歌山市 神平 狂虎
本陣の真ん中にある文庫本
倉敷市 田中 好啓
敦盛を舞うて敦盛好きになる
島根県 小砂 白汀
炎えて炎えてどうにもならぬ曼珠沙華
倉吉市 田中 八太朗
汗をしてどんぶり飯の充実よ
黒石市 相馬 英三
キノコ採り熊と綱引きしてみるか
島根県 堀江 正朗
魚屋の魚のかおを描いてみる
米子市 政岡 日枝子
魚との話を君に教えよう
寝屋川市 江口 度
自衛艦二度と乙旗掲げるなよ
大阪市 北勝 美

萩の花に見合った蜂がくる

島根県

松本文子

期待した留守居にたった三頁

吹田市

栗谷春子

母と姑人間というヤジロベエ

佐賀市

古川一徳

右左見ても信号渡れない

高知県

赤川菊野

一本の傘をふたりでさしてくる

鳥取県

土橋 螢

孤りの床で戒名などを考える

尼崎市

春城年代

陽と遊び風と戯れ自適する

唐津市

山口昌子

酒は味方句読点なら打つてある

大阪市

亀井円女

幼な子に湖の絵の深からん

米子市

青戸田鶴

ガン病棟の窓に映りし娑婆の彩

唐津市

浜本義美

愛犬の葬儀済ませてから死のう

真面目市

椎江清芳

後向きになって風から逃げてゆく

米子市

木本朱夏

女房を濡らしたくない男傘

唐津市

田口虹汀

人を斬るベンのインクが底をつく

愛媛県

石手武

天高く水を呑んでも肥えまする

和歌山市

橋はるお

逆立ちをする約束は反古にせぬ

島根県

堀江芳子

みやげ話土産広げて弾むなり

大阪市

今西静子

骨壺に入れた宝石見ていたな

鳥取県

土橋はるお

元談の中に結論匂わせる

和歌山市

山田高夫

痛いたし女盛りへ喪服着せ

岡山県

伏見すみれ

コンサート残音抱き妻と出る

和歌山市

後藤正子

君が代は国歌でないと驚かせ

佐賀市

石田源吾

耕して荒れた心の芽を育て

和歌山市

前田美子

前略にはじまる夢のつつきなど

和歌山市

山口三千子

幾十年父母の死因を書く検査

町田市

竹内紫鍔

月見酒一人酔うには惜しいよな

米子市

小西雄々

初めて終りの艶文自分宛に書く

和歌山市

岸あやめ

知事賞の隣に掛かる不運な額

田辺市

染道佳明

傷かくす傘は真赤な色にする

米子市

田中みね

子も四十手抜き上手な主婦の顔

和歌山市

岡智恵子

夜もすがら源氏と語る秋夜長

佐賀市

江口万亀子

終着へ急かず焦らず行くつもり

和歌山市

田中みね

永平寺眼鏡の僧とよう出遇い

富田林市

片岡智恵子

笑い声ばかり送って長電話

新発田市

上鈴木春枝

野の草を摘み小さき女関優雅なる

和歌山市

望月かず子

風紋を消さず待つてる蟻地獄

米子市

新川千賀子

秋灯下旅のチラシもみんな秋

京都市

松川杜的

子規忌すぎ静寂に返るこぼれ萩

守口市

結城君子

炎上の化身紅葉は黄から緋へ

近江八幡市

前川千賀子

点滴の下でともあれ南無大師

岡山県

土居耕花

アーケード街はだんだん狭くなり

豊中市

上田登志実

郷愁の受話器に入れ歯の音がする

鳥取県

西川和子

枯野から父の息吹きが長くながあく

鳥取県

小谷美つ千

散髪後街を一巡してもどる

藤井寺市

福元稔

カラフルなシャツも手伝う稲刈り日

茨木市

堀良江

岡山県

川端柳子

パチンコは淋し帰りに花を買っ

堺市

山本半銭

松原市 小池 しげお
年上の女はキンモクセイが好き

西宮市 草刈 堕 駄
台所を新品にして味が落ち

岡山県 千原 理 恵
鍵っ子の風大空に夢かける

西宮市 瀬屋 六郎太
よくもまあ話がつきぬ老婆と娘は

名古屋 藤井 高子
五分五分と呼ぶ冷たさもあり浮世

羽曳野市 吉川 寿美
疑えば掌からこぼれる糖衣錠

兵庫県 吉田 明
飽食に粟穂の欄間遣したい

東大阪市 中尾 しんじ
ふと耳にした風便り秋は憂し

米子市 茂理 高代
十五夜の月に笑った泣き羅漢

五所川原市 加藤 彩人
上を向いて歩こう妻は歌が好き

岸和田市 芳地 狸村
職安で汚れを洗う軽い首

大阪市 松尾 柳右子
陽が昇り素顔で動く裏の街

米子市 光井 玲子
うしろの正面にいつでも亡母がいる

鳥取県 ささき やえ
病みぬいて蛙きらめきの旅に出る

枚方市 宮川 珠笑
他人住む生家を子らと通り過ぐ

仙台市 川村 映輝

結論を真先に言う老会長

米子市 白根 ふみ
北山に金箔のしみしが浮上する

岸和田市 原 さと子
通帳の残が嬉しい年金日

和歌山市 堀端 三男
ご挨拶頭にのった紙吹雪

岡山県 松本 元江
秋暮れて里は錦の色に染む

弘前市 真喜内 實
チャルメラが吾が村に来る月曜日

兵庫県 脇田 米朝
仲裁に入って喧嘩買うてくる

出雲市 竹治 ちかし
父の火が消えて故里遠くなり

宝塚市 丸山 よし津
思いきりプランコ振って忘れよう

奈良市 米田 恭昌
生えぬきの社員集めてとばす檄

和歌山県 北山 凡太
結論を旨く示唆している議長

米子市 野坂 なみ
葦屋根の里恋しがる道祖神

岡山県 小林 妻子
ぎりぎりの背伸びへ積木くずれそう

米子市 小村 てい子
同志ならかごめの中で焦らない

海南市 三宅 保
原点に戻って下駄を履いてみる

岡山県 池田 半仙
爆弾の絵を描く落下した熟柿

今治市 渡辺 伊津志
じゃじゃ馬の銭の手綱が解けかかり

大阪市 榎本 落児
人生は作詩作曲歌手も要る

羽咋市 三宅 ろ亭
黄門を観てサラダ日記繰るある日

兵庫県 北川 とみ子
安らぎとなる仏前に香を焚く

高石市 浅野 房子
意地張ったのが悔まれるひとりぼち

東大阪市 大平 太一郎
風見鶏地価高騰にときの声

岸和田市 三輪 通彦
木屋が香ると父の忌思い出す

豊中市 中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 * 橘高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「忘れる」選者 森中恵美子

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ

ジオセンター」川柳係

発表

12月27日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

水煙抄

秀句鑑賞

―前月号から―

新家完司

うすもの下に乳房がふたつある

小谷 美 千

うすものは時に綱鉄の鎧より手強くなるが
神秘のペールに包まれた双丘は男たちの、い
や人類のまほろばである。

今に見て居れと帷巾掛けをする

児 玉 歌 子

怒っても建設的な作業で紛らす女の甲斐甲
斐しさ。しかしこんな時の女性には近寄らぬ
ほうがよろしいように。

あとつぎはないが鉤を研ぎ澄ます

金 子 匠 果

あとを継ぐ者がいないさびしさに耐えてこ
そ男。継ぐ者に邪魔者あつかひされるより、
一人でキツチリ職人道を歩く清々しさ。

本当にほんとでしようねお月様

河 瀬 芳 子

よつぽど嬉しい事があったのですね。お月
さまもニッコリうなずいています。

君注意したまえ豆腐にも角がある

上 田 柳 影

やさしい男は強くてめつたに怒らないが、
怒った時は本当にコワイのです。

ポツクリと死んでみんなを困らせる

土 橋 是 老

つもりでしようが、大統領が死んでも社長
が死んでも太陽は東から昇るのです。

上を向いて歩こう月が美しい

島 路 太 郎

月も地球も「偶然に出来た」にしては美し
過ぎる。人はもっと優しくなれるはずだ。

たこやきのおばさん鼻に丸い汗

桜 沢 あかり

働く人の汗は真珠よりも美しい。それにし
てもこの観察眼ノ川柳の種は無限にある。

先輩は何時もお金を持ってない

森 安 夢之助

金は無くても早く生まれただけで先輩は偉
いのである。金が無いのに堂々としている先
輩も、その先輩を立てている後輩もエライ。

夏越した金魚すくい金魚たち

古 田 比呂子

プカプカ浮いている金魚の鼻を何気なく指
で弾いたらキリキリ舞って死んでしまった。

あの遠い日の戦慄、いのちの脆さと恐さを教
えてくれた赤い小さな小さないのち。

雨も好き紫も好き人を恋う

森 脇 和 子

人を恋うと雨さえ愛しくなる。紫が好きに
なるのは秘めた恋だからでしょうか。

デートです靴を磨いて出かけます

西 川 和 子

こつハッキリ宣言されるとひやかし甲斐も
ないが、キツパリとした健康的な句姿に読者
まで楽しくなっています。

酩酊の法事の僧を助手席に

驚 見 章

スマンナアはとけさんの思い出話に花が咲
いてつい飲み過ぎてしまった。まあこれも供養
やナンマイダブナンマイダブ……。

どう見ても夫婦ではない二人連れ

今 西 静 子

この鋭い観察眼にさらされた御両人に思わ
ず同情してしまつたわしです。

よんどころない事情あり丸坊主

大 西 文 次

どんな事情が聞きたいけれど、よんどころ
ない事情なんでしょうね。同情しますが笑っ
てしまいます。いさぎよい男句である。

新聞で鼻をかんてる米寿かな

相 馬 英 三

新聞で鼻をかむ時はクシヤクシヤと揉んで
やわらかくするのですぞ新人類諸君。ティシ
ユベーパーなんか無くなる時が来るかも知れ
んので覚えておくように。

老眼鏡さがしてる間に句が消える

山 脇 正 之

逃げた魚は大きい。消えた句は文部大臣賞
だったかも知れん。ニヤリとした人はみんな
経験者。共感が大きいほど句は生きてくる。

尚香のむ

小出智子選

思うこと同じで美容院が混み

道具屋を今日も素通りできぬ父

神さまのひいきと思うことにする

童謡がりバイバルして生き易し

言い足りぬ昨日と言ひ過ぎた今日

夢がまだいっぱいあつて雑魚寝する

人をまだ信じ切れない栗のいが

生きてゐる幸せ爪をまるう摘む

秋は憂しもののあわれを知りすぎて

二つ得て三つ失う冬景色

小箱集めてせつせと夢を詰めかえる

手品師の様に障子を張る妻よ

今日も元気ですかいたずら電話さん

消しゴムの屑溜まる日が続くなり

茜雲世間話も出尽くして

コスモスが揺れて噂の中にいる

いがみ合うふたりへ月がかけはじめ

パレットへひと色そえて秋にする

芒野へ胸の支えを置いてくる

松原 佐藤 藤子

尼崎 春城 年代

堺 鈴木三千代

羽曳野 吉川 寿美

大阪 西出 楓楽

米子 政岡日枝子

和歌山 西山 幸

大阪 鈴木 節子

宝塚 吉田 笑女

大阪 堀 いくの

リュック背に夫の趣味へ仲間入り

冷え切ったベンチで温み分ちあう

離されていつか忘れてゐる気骨

新しいペンは昨日を嫌っている

気が付けばミカンすっかり赤くなり

不整脈私のどこかに住む悪魔

雑談のはしばしに出るくらし向き

突っ張っています弱点隠すため

栗弾け隣に嫁の来る話

大怪我の素になつて手前味噌

言い分のひとつに花屋遠すぎる

風買いに村のはずれの何でも屋

何処でどう踏み違えたかひととりぼち

年寄りをみくびっている針の穴

クラス会アメリカ帰りの輪をさける

ありがとうお墓の花が替えてある

三面鏡うしろ姿も見なさいよ

四十年ぶり友達に逢うバラを付け

職業欄主婦と大きく書き入れる

年月がやさしく炎消してゆく

萩こぼれ逢う人はみな華やかに

暑さから逃げると嗤う蟬しぐれ

てきばきと閉まる株屋の自動ドア

芸が身を助けてからの物語り

向う傷なめて素直になつてゐる

和歌山 桜井 千秀

大阪 鍛原 千里

富田林 松本今日子

堺 高橋千万子

和歌山 堀畑 靖子

出雲 園山多賀子

姫路 中塚 遊峰

奈良 天正 千梢

西宮 奥田みつ子

高石 浅野 房子

倉吉 淡路ゆり子

八尾 高杉 千歩

松原 北野 久子

藤井寺 高田美代子

堺 小西 小雪

守口 結城 君子

名古屋 藤井 高子

和歌山 後藤 正子

姫路 釣 遊光

貝塚 池田寿美子

岡山 矢内寿恵子

大阪 上江洲勝子

十三回忌すませて亡妻のもとへゆく
 オバアチャマきれいと余生言われたい
 フランスパン抱え孤独な秋の街
 お姉ちゃんでしょうと我慢強いられる
 回転木馬声かけ合つて母と子と
 黄昏に一人暮しの灯を案じ
 女一人座る障子が白すぎる
 失念を詫びてなぐさめられている
 執刀が近づく数を読まされる
 さよならが奇麗に書いてよい別れ
 ありがとうあなた仏の灯を守る
 名月にやっぱりすすき供えましょ
 売出しの墓地を夫婦で思案する
 過去ばかり恋して錆びるオルゴール
 筒抜けの話だ決してあわてまい
 廻れ右廻れ右して結果待ち
 嵐来る期待とすこし胸さわぎ
 失うた私を時がとり戻す
 新書一冊病んだ鱗が落ちていく
 人柄にひかれ心のドア開く
 対等にしゃべった夜が恥ずかしい
 たてられた噂へ耐える口を閉じ
 名を聞けばまだときめいてくる心
 天性の明るさ苦境乗り切れる
 さりげない優しさにあう秋ざくら

横濱	大橋よしゑ	和歌山	森	茜
米子	石垣 花子	和歌山	松本	文子
宝塚	丸山よし津	島根	湯浅	由梨
奈良	横井都姫子	和歌山	寺中三枝子	
佐賀	湯浅 由梨	島根	松本	文子
和歌山	湯浅 由梨	和歌山	松本	文子
愛媛	柿内佐々子	和歌山	森	茜
米子	茂理 高代	和歌山	木本	朱夏
寝屋川	稲葉 冬葉	和歌山	松原	寿子
羽曳野	福田満洲子	和歌山	中西千鶴子	
吹田	茂見よ志子	吹田	栗谷	春子
和歌山	木本	大阪	本間満津子	
和歌山	松原	鳥取	さえきやえ	
和歌山	寿子	和歌山	山口三千子	
新発田	石倉芙佐子	出雲	上鈴木春枝	
堺	宮本かりん	和歌山	田中	みね
富田林	片岡智恵子	和歌山	田中	みね

空想を繋ぎつないで貨車走る
 二十年嫁も娘と変りなし
 自画像の笑顔の裏は見せられぬ
 嫁の言う長生きしてねを信じよう
 造花でも哀しい時があるだろう
 なかなか丸うばかりは老いられず
 露天風呂月と約束一つする

岡山	千原	理恵
貝塚	行天	千代
岡山	清水悠貴女	
姫路	丁坪サワ子	
島根	喜島	ノブ
寝屋川	岸野あやめ	
鳥取	田村きみ子	

ゴシックの一句目、四季の移りと共に、事ある毎に女性性は髪のことには気を遣う。頃は十二月、美容院へも行っておかねばと考へている人は多い。二句目、「神さまのひいき」と言い切る割り切りようがおもしろい。さっぱりとした作者の人柄がよう出ている。三句目、昨日と今日の対照をはつきりさせて、この世を生きるむづかしさを思い知らされる。何枚かの投句のお葉書にもありましたが、「一年の何と早いこと」と。だがこの一年で気付くことは、川柳をされて間のない方がぐんぐん力を付けてこられたことに眼を見張る思いが致します。いろいろお話をさせて頂き良かったことが沢山ありましたのに、昨年末から体調を崩し、それが果せたかったことを残念に思います。どうかお体を大切に引き続いての健吟を心からお祈りしています。ありがとうございます。



ハガキに雑詠3句 毎月10日締切
 投句先 〒683 米子市花園町一四

八木 千代

俚諺的川柳

(二)

阿達義雄

『諺語大辞典』に多く見えるのは居候の句であつて、

○居候置いてもあはず居てあはず

○居候角な座敷を丸く掃き

○居候三杯目にはそつと出し

○居候せう事なしの手煩惱

○居候におくびなりの餅

最後の句だけは俚諺にしても、形式から見ると川柳の形ではないが、これも『浮世床』の初篇巻之下の中に、

「川柳点に沢山あるものは居候さ、

(1)居候よんどころなく子はんのう

(2)多葉なしに粉ばかりのむが居候

(3)居候大首なりの餅を食ひ

(4)居候置候をはだかにし

と前句付にある通り恩を知らぬものよ。」

とあるから、「居候におくびなりの餅」の俚諺は右の(3)の句の変形であることが分る。な

お、この(3)の句は柳樽拾遺第十八にも見え、その源流は、

▲掛り人おふくび形りの餅を食ひ

(宝暦十三・宮二)

右の様に宝暦十三年の川柳評万句合・宮印二枚目に見えているものである。

この「おふくび」とは、着物の「おくみ」で、「おくみなり」とは衤の様な斜の形で、餅でいうなら角の切れ端しである。此処で、掛人から居候への変遷が見られるが、川柳点の初期は皆「掛人」となっていて、居候の語の現れてくるのは、天明六年八月十五日開巻の

居候いんぐわと子供きらひなり

右の川柳点からである。又、「居候三杯目にはそつと出し」の句は、川柳評万句合にも、『柳多留』の初篇から百六十七篇までの間にも見られず、文化二年刊の『絵本ひらく花』に見えているものである。即ち、之は元来の

川柳点ではない。

次に、色や恋も金次第だという意味の俚諺的川柳として、

○惚薬佐渡から出るがいっち利き

○ゐりよりもつと能く利く佐度の土

○黒焼にせねど小判は惚れ薬

と似た様な句が俚諺化して伝承されている。

昔から、ゐりりの黒焼が惚れ薬として知られていたことに立脚して作られた句である。

「惚れ薬佐渡から出るがいっち利き」の句は、『滑稽発句類題集』中巻の挿絵の中に見える句で、文化末年頃のものである。なお、

○色男金と力はなかりけり

などの俚諺は今も生きている句と言つてよからう。

また、「先生」を愚弄して詠んだものとしては

○先生と言はれる程の馬鹿でなし

○先生と呼んで唾壺棄てにやり

の二句が見られ、この風潮も既に『浮世床』

二編巻之上文化十一年刊に現われておつて、

「彼の川柳点に、先生と言つてはいふき捨てさすといへりし類にひとし」と記され、これは宝暦十二年の川柳評万句合梅印三枚目に、

「氣のつかぬこと」という前句題に附けた句の、

先生とよんで仄ふきすてに遣り

(宝曆十二・梅三)

に、その元を発したものであろう。

更に『柳多留』百一編を見ると、

どうだ先生は安くあつかはれ

(『柳多留』二〇一篇)

という似た様な句が発見され、文化時代が先生下落の時であつたようである。

未亡人や女房の大発展を詠んだ句で俚諺化

されているのは

○石塔の赤い信女が子を孕み

○町内で知らぬは亭主ばかりなり

○よく結うて悪く言われる後家の髪

右の三句である。

人間の慾を色々な角度から見たものとして

は

○泣く泣くもよい方を取る形見分け

○思ふ事一つ叶へばまた一つ

○這へば立て立てば歩めの親心

などの俚諺があり、最初の句は確かに川柳だが、後の二句については、藤井博士は歌の上

の句であると記されている。

親子の情に関する諺の中で

○孝行をしたい時分に親はなし

というのが見えるが、これは『柳多留』廿二

篇の中にある川柳点の句であり

○盗人を捕へて見れば我子なり

右の句は、一般に川柳の様に誤認されている

ものであるが、藤井博士は、『大筑波集』に

見える「切りたくもあり切りたくもなし」の

附句であることを明らかにされている。

最後に残った俚諺の川柳を一括してみると

○講釈師見て来たやうな虚言をつき

○売言葉握り拳で買ひたがり

○辻番は生きた親父の棄所

大根だき

布施 幸子

境内に据えられた直径一メートルもの大釜

三つ、ほかほかと盛んに湯氣を立てている。

大釜で煮る篠大根は一万五千人分の約三千

本、と聞くと「余つたらどうしやはるのやろ」

と要らぬ心配をするが、ぞくぞく押し寄せる

参詣客に懸念は吹っこんで、「みんな中風が

怖いやなあ」べつの感心をしてしまふ。

これは十二月九日と十日におこなわれた了

○大男総身に智恵が廻りかね

○皮一枚剥けば美人も慟慟いれいれ

○下手将棋王より飛車を大事がり

○竹槍は切られてもやはり元の竹

などである。

■訂正 10月号58P下段11行目「子女の髪」

を「下女の髪」に訂正します。

徳寺の大根だき風景 京の師走に大根だきを

する寺は、他にも三寶寺や千本釈迦堂が知ら

れているが、「中風封じの通称寺・ダイコダ

キでら」とは鳴滝の了徳寺をさす。

ダイコダキでらの大根だきは、浄土真宗の

開祖親鸞上人と深いかわりを持つている。

建長五年(一二五三)の初冬、上人が嵯峨

の月輪寺へ行く途中、鳴滝村へ立ち寄った。

村人たちが畑の大根を引いてきて、塩味にた

いたものを差しあげると、上人は「おいしい、

おいしい」と喜ばれた。そうして、あたりに

生えているススキの穂を折り、無造作に束ね

て筆代わりにし、『佛命尽十方無碍光如来』

の十字の名号を書いておれに置いていかれた。

のちに運如上人がその名号を拝んで、さらに

『南無阿弥陀仏』の六字の名号を記したと伝

えられ、徳寺は両上人の遺徳にちなんで建てられたといわれる。

京都の南郊の農村で生まれた親鸞上人は、九歳で比叡山にのぼり、雑役をしながら仏教を学んだが、活力を失った寺のあり方に失望し、新しい教えを広める法然上人の弟子になった。ところが弾圧事件に連坐して遠い越後に流される。

上人は見ず知らずの地で農業に励みながら布教するというきびしい暮らしにめげず、赦免後も長く北国にとどまって信仰の道を説きつづけた。

京へ戻ってから貧しい生活は続き、数々の試練に出会う。鳴滝へ寄ったころは八十歳の高齢ながら身も心もいたって健やかだった。『弘法は筆を選ばず』の諺があるが、ススキを筆の代用品にした親鸞上人は、このちも大変な運命に耐えて九十歳の生涯を全うした。偉大な上人をしのび、健康で暮らしたいとの願いを抱く人たちが、遠方からまでやってきてタイコダキ寺の大根を頂き、体も心も暖まって帰ってゆく。

鳴滝という地名だが、昔この地にあった滝がゴーゴーと鳴り響いたので、村人は異変を感じて避難した。その直後に大洪水になったが全員事無きを得た、という伝説があり、地

元には「洪水さん」という苗字の家も残っている。そんな伝えも災厄よけの信心をいつそう深めているのだろうか。

大根の原産地は、地中海の沿岸コーカサス地方で、紀元前三二二世紀ごろ、西アジア、中国、朝鮮を通じて日本へとやってきた。

古名を「於保称」といい、「大根」の字が充てられて「だいこん」と読まれるようになった。物事のおおもと、心の根本を意味する大根と同文字であり、古くから神供の中心となってきた。魂が宿り、声を上げると信じられ、年取りの日も決まっていた、その日は大根畑へ入ってはならぬ、というおきてもあった。

東北地方では、「二股大根」イコール「大黒さまの奥様」との信仰もあり、旧十二月九日の夜を「大黒さまの妻迎え」とし、小豆ごはんには二股大根を添えてお供える。そういえば根が二つに分れた大根には、人の体そっくりの形をしているのがあって、新聞の『おもしろスクープ』などに写真がよく登場している。

古事記の仁徳天皇の時代には、女性の腕を大根にたとえたことが載っていて、「まア、お大根みたいなお手ですことノ」とは美人へのほめ言葉だったらしい。「まア、お大根みたいなお足ですことノ」と言えば、ほめ言

葉でなくなるのがふしぎである。

とまれ、祝食に用いられ、晴れの膳にのせられて、めでたい食物と崇められた日本の大根は、世界一まるまると太って健康で味がよいと聞いている。根にはジアスターゼ、ビタミンC、葉にはビタミンA、それに近ごろ不足がちとされるカルシウム、ナトリウム、リン、鉄分を含んでいる。

かつて食中毒が起った例がないとの結構な食物でもあるが、その長所をもって「当たらない」役者に「大根役者」の名が奉られた。大根側からみれば名誉毀損といえよう。

戦時中は根も葉もたっぷり入った大根めし、大根雑炊となってお腹を満たしてくれたのに「水くさい」とか「味ない」とかのイメージが強まったのは気の毒だ。

タイコダキ寺の大根だきも、昔は塩味だけで結構うけていたのに、近頃は油あげ、醤油入りのぜいたくな味づけとなっている。

永倉僕川氏（静岡市）より

金一封拝受いたしました

川柳塔社

■「各地柳壇」追加

聴障川柳

稲田

豊作報

深夜まで二浪の部屋に灯が点る

豊作

夜の秋しずかに酌んだ牧水忌

鶴翁

母子家庭夜の洗濯機が廻る

三香

やりくりの知恵盛りつけた夜の膳

和江

看護科深夜は別に貰います

みつる

名月が水上バスで揺れる宴

八恵子

サスペンスドラマ二時間夜が更ける

真女

夜泣きする嬰兒に嫁は氣を使い

承平

夫の留守安氣と不安のまじる夜

文古

初孫に夜毎花火をせがまれる

行江

砂遊び終って夜の部は花火

珍顔

夜の蝶甘い言葉で錢を取る

たみ

夜学して夢はふくらむコンピュータ

一眺

夜桜に心ほのぼのする私

広行

酒好きは一杯やれる夜を待ち

健太郎

サークル檸檬

片岡智恵子報

温泉の効能書よりカラオケで

三四子

温泉で夫婦のしこり溶けてゆく

泰子

老い二人やっと来ました有馬の湯

千代女

川柳塔

(前月分) 富田林市 松本

デカンショのリズムで暮す二、三日

さつまいもころころ秋の子守唄

さびついたナイフが突然狂い出す

自然薯も私も愛を待ってます

年金で温泉めぐりの夢をかき

湯の里は小鳥獣に小宇宙

美子

老人と話が進み温泉行き

雅子

露天風呂ころろ大きく洗われる

登美子

温泉へ行くへそくりを溜めている

智恵子

外湯めぐり素足が鳴らす宿の下駄

今日子

温泉で白髪も皺も増えたこと

美緒

近畿文字放送作品募集

題「友だち」

森中恵美子選

3句

締切 12月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

ご芳志

笠鳴恵美子様

川柳塔社

第61回

中部地区川柳誌上大会

課題と選者(2句・清記選)

「海」

齊藤 大雄選

「神」

渡辺 蓮夫選

「目」

堀口 北斗選

「緑」

志水 剣人選

「熱」

山田 良行選

「歌」

前田夕起子選

「人」

森中恵美子選

「志」

橘高 薫風選

賞

参加料 五百円(誌代は別に400円、切手不可)

賞

合点30位まで呈賞(1位から10位まで橘。他に最優秀句、優秀句も橘)

賞

昭和63年1月9日必着

締切

★句箋は各題別に横4cm、縦19cmの白紙を使用、2句連記、裏面に記名

投句先

〒465名古屋市長久香流1-315 青木晴風方

投句先

中日川柳会事務所

投句先

投句先

投句先

投句先

投句先

投句先

投句先

投句先

投句先

唐津の柳人・熊本の柳人

川 島 諷云児

9月26日(土) 川柳塔唐津支部五周年記念川柳大会に参加する一行20名を乗せたひかり一号は快音を響かせて博多に着いた。

ホームまで出迎えて下さった虹汀会長その他の人の笑顔に囲まれて用意のバスに乗り込む。今回は初参加の人が多いのにも拘らず車内ではもう旧知の如く打ち解けて話が弾む。虹の松原、鏡山といつものコースらしいが初参加の人には雄大で美しい眺めに驚嘆する。玄海灘を透して彦岐の島が見える。

宿舎は一步出れば瀟洒な唐津城が見上げられる閑静な城内閣、当夜は内輪ばかりの宴で食後、柳宏子教室の「折り紙」に悪戦苦闘して眠りにつく。

9月27日(日) 大会の朝だ。抜けるような青空の中を朴竜氏の案内で城下町を散策しつつ曳山会館に入る。唐津くんち祭りの賑やかさが偲ばれる十数基の豪華な曳山に目を見張る。大阪御堂筋パレードに参加する鯨の山車が修理されて庭で組立てを行っていた。

隣の文化会館が川柳大会会場である。既に到着の人及び世話人の方に迎えられ旧知、初

対面関係なしに抱き合うようにして席に着く。柳人ならではの明るいそして優しい人達である。朴竜氏の司会に始まって虹汀会長の挨拶、太茂津氏の祝辞、柳宏子氏の柳話と続いて昼食に入る。食事中豪放で楽しい曳山太鼓がアトラクションとして披露された。

再開後の披露に一喜一憂或いは爆笑する中で幼い三姉妹の句が読みあげられると万雷の拍手が起こる。地方大会ならではの風景である。来年への期待に胸を膨らまして散会。



唐津の記念大会にて

〈優秀句〉

「通う」 仁部 四郎選

よく通う道には四季の花が咲く 紫香

「許す」 真島美智子選

道草を許そうあすへ弾む娘よ 茂子

「利息」 撫尾 清明選

時間よ止まれ利息が俺を追ってくる 百万両

「会長」 出端 九一選

組の真中に会長席があり 芳仙

「撃つ」 山本規不風選

撃たれても振らねばならぬ旗を振る 正敏

「奥の手」 藤村 女選

奥の手をじっと待ってる将棋駒 英子

「ラスト」 黒川 紫香選

ラストにはきつとわたしと踊ってね 笑女

その夜は唐津支部の皆さんと夕食を共にし

カラオケ、民謡、奇術と多彩な芸を夜遅くまで楽しむ。

9月28日(月) 今日也快晴。唐津の皆さんと

共にバスに乗り郷土史家山崎先生のご案内で

名護屋城址を抜け、波戸岬から乗船、美しく

て碧い海の風景を楽しみながら加部島に上陸、

田島神社にお詣りして佐用姫の悲しくも美しい物語を聞く。再び乗船したが風波が高くて

奇勝七ツ釜を見る事が出来ず残念だった。

船を降りた呼子で生きた魚のグルメを満喫

する。食後一路博多へ。駅頭で二介介になっ

た唐津の皆さんに感謝して別れ小憩後、帰阪

組と袂を分けて有明号に乗り込む。

熊本駅にはもう芳仙氏を始め皆さんが出迎えて下さる。昨年受賞のため来阪された俊子さんの顔も見える。タクシーで夜の熊本市内を抜け菊地温泉に着く、着替えもそこそこに菊地観光ホテル自慢の露天風呂に飛び込む。夜の宴には一緒に泊まって下さった芳仙、俊子、幸子、昭代、康子の方々と共に語らいながらの川柳談義に刻を過ぎす。唐津の人達とはまた違った味わいがある。物優しい人柄に触れ楽しい夜を過ごす。

9月29日(火) 四日連続の快晴に恵まれ、早朝飛び起きて忠臣菊地一族を祭神とする菊地神社に詣でる。万緑のすがすがしい空気を吸って朝食後タクシーで水前寺公園に出る。成趣園とも言われるこの名園は澄んだ池の水と芝生、青が見事に調和した日本式庭園である。小憩の後三大名城の一つ加藤清正が築城した熊本城を訪れる。一名銀杏城とも言われ大きな銀杏がある。阿蘇を遠望した後、有名店で昼食をご馳走になって熊本駅に来る。

風格のある芳仙氏、優しくてきれいな俊子、幸子、昭代、康子さん達女性陣に見送られて特急有明は動きだした。列車のガラス窓を通してお互いにおくった投げキッスは永久に忘れられないだろう。

唐津の柳人、熊本の柳人、お国柄は違って和する心は一つ本当にいろいろお世話になりました。有難うございました。お名前を挙げ得なかった方達にも厚くお礼を申し上げます。

川柳を生きる支えに

春城 武庫坊

松永清太さんは尼崎おはま句会（黒川紫香副主幹指導）のメンバーで尼崎市シルバー人材センターの業務に従事しておられました。本年八月体の不調から入院、検査を受けました。

松永さんは両親と二人の妻をがんで亡くしており、死ぬまで患者をだまし通すことが非常な苦しみであった経験から担当医師に若しがんであっても知らせしてほしいと申し出ておりました。検査の結果は予測通りリンパ腺がんで手術は不可能、抗がん剤に依る治療との告知を受けました。

言われた夜さすが眠れぬ星をみる 清太
一夜の煩悶から救ったのは今迄続けた自身を見つめていき句集を作ろうと決心した。

「告知してもらって死への恐怖がないと言えは嘘になるが目標を持ってがんばると決出て来る。句集のタイトルは生への執念を滴の水が岩に当って飛び散ることになどえて「瀑」とする。協力してほしい」と頼まれました。

このことは去る十月二十七日の毎日新聞に報道されたので御存知の方もあろうが、東大講師で日本臨床精神腫瘍学会会長の河野博造先生は「松永さんは川柳を通して自分を見つめ生きる意味を自問自答しているのだろう。がんを告知すると患者が何らかの方法でそれまで生きてきたことの集約が出来るようにしてあげるのが大事。この意味で松永さんの例は成功と言えらるのでは」と言っている。松永さんはその覚悟の中からは献体を決意し、白菊会に手続をすましたと聞きます。今、おはま句会の有志はこの決意に協力するため交替で暖い手をさしのべています。

先生に生命あずけて旅枕 清太
難病のどん底ナースの優しい眸

喪中につき

年賀欠礼いたします

安藤寿美子

坂本仙吉郎氏（大阪市）より
亡妻粗供養として
金一封拝受いたしました

川柳塔 社

初歩教室

題一 掃除

阿 萬 萬 的

課題「掃除」は発表誌が十二月ということ
で煤払いの意も兼ねて出題したのですが、作
句される時期が秋だったので、

秋彼岸孝行のまね墓掃除
墓掃除つい念入りに母憶う

新仏墓の掃除も入念に

よかつた事許りを告げて墓掃除

結論を探しあぐねて墓碑磨く

(結論探しあぐねて父の墓掃除)

父知らぬ息子と墓の掃除する

お彼岸に野仏のそば草むしり

晩秋の清掃墓碑に枯葉散り

(秋深くお墓掃除に散る枯葉)

ともあれ落葉掃く姿は一幅の絵ですなえ

作務僧の無言が続く庭掃除

落葉掃く寂しがり屋が黙々と

(落葉掃く寂しがり屋の背がまるく)

落葉焼く掃除終えた寺の煙

街角の景色にとけて落葉焼く

お掃除は済んで愛する菊という

(お掃除済んで菊いじる背へ陽は温く)

櫛山に遠いが掃除しておこう 富士子

庭掃除終ったあとから落葉散り 三津江

(一息入れる掃除へあとから降る枯葉)

庭掃除おそろぎ草に蹲り 秀 香

(竹箒へおそろぎ重い脚で逃げ)

掃き寄せて芋の丸焼き落葉焚き 八重子

(掃き寄せた落葉でお芋焼いた夢)

秋のお掃除はこころで:

円く掃く今日はあまりに良い天気 正 子

(庭掃除隣と話している陽気)

お掃除の後のコーヒがまた美味い 悦 子

心ゆくまで掃除のあとのお茶の味 てる

掃除後の茶の一服へ花薰る 晃 世

(秋日和掃除を終えた茶がうまい)

老人の暇は色々と用事のあるものでして

掃除するあとから汚す孫二歳

(掃除するあとから汚した孫の顔)

朔日の朝は掃除の神参り 喜与志

宮掃除老人クラブの行事とし

下五を顔が寄りとしてみては如何 秀 香

公園でゴミ拾つてお年寄

(バス停掃除する老人の眼と出会い)

溝掃除となるとお喋りに身がはいって

溝箒握つたままの一時 隆 雄

一時間はちと酷で立ち話ぐらいに止めて

台風泥泥式の溝掃除

お隣と話がはずむ溝掃除

隣組みんな素顔の溝掃除

新妻も仲間入りしてドブ掃除

お隣の主人を知る溝掃除

団地住いの私には懐かしいですな大掃除 春 枝

本棚でへそくり見つけた大掃除

思い出が詰り過ぎてる蔵掃除 博 子

積んだ書を置き換えるだけ煤払い

大掃除済まぬに検査済の証

夫と子をたくみに使う大掃除

小学校のお掃除にもいろいろと……

掃除当番小さな校舎懐かしい ト キ

運動場子供スポーツ親掃除

運動会掃除役員ばかりの輪 方 子

(運動会の掃除PTAはよく喋る)

掃除と言えばこんなのもありました

城の屋根掃除へ奉仕の山男

本殿の屋根は山岳部に頼み

(高層の掃除にかり出す山岳部)

月一の掃除も兼ねて妻が来る

単身赴任掃除も炊事も手抜きする

(単身赴任だんだん手抜きをする掃除)

憂うつな日などには

うつの日はやたら掃除がしたくなる

窓際族時には掃除でもしよか

スランプの窓開け放し掃除する

そしてその愚痴を掃除機に吸込ませて 正 子

愚痴一つ吸うて掃除機動き出し

嫌意期の出口掃除機忘れた

だが一寸しんどい時もありまして

人が来る掃除しんどい年になり

美恵子

そこそこ掃除済ませて長電話
熱の朝四角い部屋を丸く掃き

白峰
みね

(微熱ある朝で掃除もそこそこ)
そんな時に限って

掃除せぬ時に限って客が来る

三千子

怠った掃除くやまれ不意の客

路子

手抜きしてテレビといれば客の声

トキ

掃除してない日の客へ説明でわび

花園

(掃除してない言訳客へする笑顔)

みね

手を抜いた掃除へ義母が訪ねて来

かすこ

だがその反対もありまして

悦子

念入りに掃除のあととは客が来ず

三千子

(念入りのお掃除娘に客が来る)

遊峰

布団干し掃除して待つ掃省の子

小鹿

旧友の来る電話へ居間だけ掃除する

太一郎

今時雑巾すら絞られない子がいて

しづ子

(雑巾を絞れない子が泣いている)

温子

掃除好きの母の自慢を子が継がず

すみれ

孫達に掃除教えた娘の根気

章久

腹ごなし孫を誘って庭掃除

てる

だが若い女の中にも

洋子

拭き掃除(ラハラしてるマニキュア

治

掃除屋が裏から見てる娘の嫉け

子

お掃除は下手だがハミング嫁若し

久留美

(お掃除とは別ハミングの嫁若く)

遊光

熟年の掃除に飽きて今日も留守

宛先

カルチャーな母はお掃除嫌いです

阿萬

(ダイエット カルチャー掃除の暇がなく)
掃除だけ取り柄女房に浪費癖

(社会悪の掃除を願う一市民)
では最後はもうものの掃除を

金吾

(掃除好き妻で意外に浪費癖)

繁男

耳掃除の句がありました羨ましき限りです

(壊れた掃除機のような軒をかく男)

しず子

耳掃除心許した膝枕

志重

耳掃除男はいつも眼を閉じて

露芳

檜山の話聞く日の耳掃除

純子

耳掃除除の温みか夢さそつ

サワ子

耳掃除やすらぎのある妻の膝

温子

だが齢というものは淋しいです

千鶴子

妥協癖という無職の持つ癖

八重子

掃除婦にも雇って貰えぬ齢になり

保夫

(職安は決めてる高齢者は掃除

昭治

だが妻が掃除を始めると男族は邪魔らしく

勝美

日曜の掃除機邪魔なテレビ囲碁

隆雄

(テレビ囲碁を妻の掃除機邪魔をする)

保夫

そしてそのあと

はる子

キッチンと片付けられて落着けず

保夫

ここでベットののお掃除もお忘れなく

隆雄

日当ばこ室内犬の大掃除

保夫

ちよこちよの仔大リユックに部屋掃除

隆雄

次は心の大掃除といきます

成明

借金の大掃除を先にと妻が言う

凡太

柏手を打って心の掃除する

円女

心の掃除もしていますかと母の声

遊光

色即是空心の掃除がまだ出来ぬ

久留美

題「葉」 12月10日締切(2月号発表)

「茶碗」 1月10日締切(3月号発表)

宛先 千598 泉佐野市中庄(一〇八一一九九

阿萬 萬的

結 論

渡辺独歩選

結論はお金のことと見つけたり
船頭の数へ結論遠くなる
母さんが出す結論で波立たず
結論はお金となった離婚劇
人生の余白に結論練りに練り
結論は急がぬことにする女神
結論を早く出さぬと冬になる
結論が先に出ている机上論
農捨てる結論が出ぬ早稲を刈る
結論は出来ているのに長評定
勤勉な父結論は急がない
つるべ落しの陽に結論を急かされる
結論に至らぬままの酒となり
結論はつまらぬ男と知っただけ
結論はやはり女が出したがる
結論へいつも経理が出し渋る
結論がノーとも知らず通いつめ
結論が出そう吸いがら山となる
結論へ母の意見もきいておく
結論を急ぐと死期が早くなる
結論を急がす盃攻めに来る
暮れてなお結論だせぬ蟬しぐれ

火葬場の煙が俺の結論だ
結論がなかなか出ない親の世話
大の字に寝て結論を考える
結論へ方程式がまだ解けぬ
結論はたった一言押せと言う
結論に大阪弁はまだ続く
不本意な結論一緒に泣いてやる
結論になると会議が踊り出す
結論が出てガタガタと膳の音
結論は伏せて意見を聞くつもり
さわやかな結論胃カメラからもらう
結論のないどんぐりの背くらべ
少し間を置けば結論見えてくる
結論は残し玉虫色の決を取る
顔触れを見れば結論みえている
住
結論へ納得出来ぬ矢を放つ
納得の結論反旗たたまれる
結論の見事さ拍手鳴り止まぬ
結論を急いで友を見失う
結論が出ない鳩の首ばかり
人
雪月花結論やはり酒になる
地
結論を隣の耳が聞きたがる
天
結論は妻の歩幅に合わせよう
軸
結論はソロバン珠に聞くがよい

思 い 出

藤田泰子選

思い出よ減るものはうつくしき
竹とんぼの思い出が有る蒼い空
コスモスが淡く咲くから思い出す
思い出の中の一人でいるだろか
君の名を思い出せないまま秋に
思い出の庭から消えた金次郎
思い出を風化させないそば枕
思い出をまだ作ってるフルムーン
傷負うた日の思い出に支えられ
思い出たは良友よりも悪の友
ケンカした友が一番気になるね
少年の日の思い出にタカラヅカ
村はずれ遊び地蔵が湖に沈む
法律の無知にあの頃泣いていた
天井が廻っただけの初句会
思い出の中の少女はすなおなり
思い出の妻はおさげでよく笑い
終戦の思い出妹がいた母もいた
楽しかった思い出いつも亡母が居る
耳掃除追憶にある亡母の膝
組み敷かれ母のお灸は熱かった
思い出がまだ新しい一周忌
思い出がまだ新しい一周忌

眼裏に消ゆることなきカンナの朱

人の世の雑音聴いている仏
凡太
耳底に今日も軍靴の音がする
たず子

冬眠の蛙に遠い春の音

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★尼緑之助出雲市文化奨励賞受賞祝賀川柳大会が十月十八日、出雲市駅前の大平食堂で開かれ百三十名の盛会であった。

★創設30年の歴史を持つ「国鉄川柳」は197号から「鉄道川柳」と改称再出発、連盟の名称も全国・鉄道川柳人連盟と改称。

★第六回没句川柳供養大会日時12月13日(日)9時半開場所・鳥取市共済会館「白砂荘」F3ホール

鳥取駅より徒歩五分参加費千五百円昼食作品集精進落しの宴二千円

各題2句・締切11時厳守「敗者復活吟」今年没句になつた句 小林由多香選

「はんのり」 羽津川公乃選
「拾う」 明星かつみ選
「膳」 野中 御前選
「決める」 大原 雅女選
「叩く」 土橋はるお選
「十二月」 金山 夕子選
表彰総十位迄 出席者優先
欠席投句 八百円 切手可
作品集呈 締切12月5日
投句先 下六八〇一一
鳥取市東大路六四
面川洋々宛
主催 川柳ふうもん吟社
後援 鳥取県川柳作家協会
★第39回三原神明会協賛
川柳大会
日時・63年2月14日10時
場所・三原市一円町
中央公民館
兼題 各題2句 締切13時
「一番」 小島 蘭幸選
「ハンサム」 三浦 宏選
「表情」 石原 伯峯選
「日記」 田中 好啓選
「他人」 岸本 広文選
当日席題
会費千五百円(昼食呈)
投句料五百円(切手可)
投句連絡先
〒723三原市旭町一二四
八島白龍宛
電〇八四八(六三)二九四七
★川柳みどり会 第一回
誌上ハイライト 作品募集
課題「傘」「雑詠」
各題5句宛計10句、必ず新作であること、用紙はB5程度
の用紙に連記。
選者 鍋島 十歩(柏原)
田口 麦彦(熊本)
渡辺 和尾(愛知)
句箋に清記した作品を三人の選者により共選、発表は六単位で行い、優秀作家に呈賞。一席の方は次回選者参加料一口千円、何口でも応募可、合点は一口単位
締切 昭和63年1月31日
発表 昭和63年4月号「緑」
出句先 下470-21愛知県知多郡東浦町森岡字下今池5-69 川柳みどり会
▽同人消息△
★東野大八氏(本社相談役)は、柳宴十一月号No.405に「河豚の季節」と題して執筆。
★本田恵二郎氏(参事・倉敷市)は、児島中央郵便局

新同人紹介

河瀬芳子
— 紫香・薫風・鬼遊推薦 —

植村喜代
— 岳人・泰子・薫風・智子推薦 —

真喜内實
— 甲吉・五楽庵・栞・薫風推薦 —

岩本笑子
— 静水・蘭幸・薫風推薦(以下同) —

古田太虚

石原淑子

に「川柳ポスト」の設置を
進言し、早速風流な川柳ポ
ストが完成。

★松江番傘十一月号No.23は、
当地の新聞記事「新風土記」
欄に八木千代・桑原伊都・
澤田千春の三美女（本社同
人・米子市）が顔写真入り
六段記事で紹介されたのを
転載。

★橘高薫風氏は、ねぶた十
月号No.64に「四十周年に当
つての感慨」と題し執筆。
青森の川柳家後藤蝶五郎氏
（故人）が「川柳雄誌」の
「川柳家の二十四時」のア
ンケートに答えられた内容
を引用されている。

★小林由多香氏（鳥取県川
柳作家協会会長・本社参事）
は、高杉鬼遊氏からバトン
を受けて弓削川柳社「川柳
紋土」の秀句鑑賞欄を担当

★奥山美智子氏（尼崎市）
は徳島県芸術祭の川柳大会
で徳島県文化協会賞を受賞
入賞の句「抱く」
花すすき亡母の句を抱い
ている

★吹田市文化祭の川柳部門
で次の二氏が入賞。

市長賞 木原 絹女
母が振る姉さかぶりの嶽の
音

教育委員会賞 山田里子
気配りをしながら嫁に出す
手紙

▽お便り△

■大原川柳社（岡山県）
土居耕花句集「やっこ風」

発刊記念句会には、大阪川
柳塔社をはじめ県内外各地
より百七十名もの皆様方の
御支援をいただき、柳友諸
兄の今更ながら絆の深さに
心より御礼申し上げます。

■黒川紫香氏（副主幹）他
十四名、熊本、水前寺より
寄せ書き拝受。

■堀江芳子氏（参事・島根
県）松川杜先生の路郎賞
受賞おめでとーございます。

■桑野晶子氏（札幌市）

貴誌から沢山のこゝろはせ
て頂いています。薫風さん
の「こころぎのように泣け
たら涅槃かな」の句は私の
座右の句にしています。

■流奈美子氏（広島市、川
柳塔賞準優秀作第一席受賞
者）

この度の受賞身に余る光栄
に心から感謝しております
当日どうしても都合が付き
ませず失礼し申し訳ありませ
んでした。立派な賞状並び
に記念品ありがとうございました。

■谷垣よし子氏（谷垣史好
常任理事母堂）十一月十五
日、老衰のため逝去。同十
七日堀町西会館で告別式が
行われた。謹悼。

■川村ミサホ氏（川村好郎
相談役夫人）十月十七日逝
去。八十歳。十月十九日高
石斎場にて告別式が行われ
吸江、鬼遊、一二三、月子
が参列。謹んでお悔み申し
上げます。

■奥田玉氏（西宮市奥田み
つ子氏母堂）十月二十二日
逝去。十月二十四日告別式
には薫風、紫香副主幹の他
柳友多数参列お見送りした。

■安藤寿美子氏（理事・豊
中市）の母堂が十一月一日

逝去された。謹悼。

■坂本仙吉郎氏（大阪市）
の御令室が去る六月二日逝
去。謹んでお悔み申し上げ
ます。

藤	田	信
解	村	本
静	新	博
風	造	子

本社 十一月句会

十一月七日(土)午後六時

メンズファッションセンター

六日竹下新内閣発足。一日経って、もう大臣の名前は、あらかた思い出せない。世評はどうあれ、頑張ってもらうしかない。

句集「絵皿」発刊をお祝いして高橋千万子さんに常任理事会から花束を贈呈。

今月のおはなしは、若者顔負けの元気で地方の大会へ東奔西走の黒川紫香氏。九月は九州唐津、熊本、十月はいずもへ行かれた。そのみやげ話。

唐津の大会では、小人数ながら地元の方が熱心に、誠実にお世話をしておられるのに感心した。お客さまを迎える心構えを教えられた気がする。いずもでは、58年2月号水煙抄に「どうぞよろしく十四歳」と可愛い前書で投句、将来を嘱望されていた中尾まゆみさんとバツリ。事实は小説より奇なり、の楽しい出会いであった。

今月の月間賞は藤田泰子さんが獲得。
(進行―柳宏子) (受付―年代・藤子)

(記録―射月芳・隆二・洋敏)

出席者―笛生・薫風・紫香・鬼遊・武庫坊
年代・萬的・杜的・楓云児・白溪子・柳伸・
池田寿美子・藤子・佳秋・栗・朱夏・千秀・
満津子・道子・月子・天笑・重人・太茂津・
柳宏子・柳影・春蘭・凡九郎・白峰・勝美・
狸村・章久・隆二・作二郎・元紀・英子・千
万子・美房・吐来・庸佑・喜風・悦郎・水客
規不風・はつ絵・小路・射月芳・三男・勝晴
文秋・正坊・ダン吉・智子・度・冬葉・あい
き・楓楽・頂留子・昭子・美代子・寿美・洋
敏・吸江・いわゑ・みつ子・外吉・史好・岳
人・寿子・東雲・雀踊子

席題「ひとり」

榎本吐来選

ひとり来て一人で帰ることになれ
女ひとり支えきれない床柱
戒律の寺で紅葉ひとり占め
ひとり身の気楽さ叱る冬の音
紅一点とても愉しい酒にする
空港にひとりで行っているドラマ
マイホームひとりて住んでもの足らず
十二月ひと夫々の指を折り
大勢に囲まれひとりのこともある
自作自演危い橋も渡り切る
熱い茶をすすする相手がもつけない
女ひとりきれいに生きる三面鏡
太陽をひとり占めして舟を漕ぐ

冬葉 英子 道子 楓云児 小路 智子 洋敏 吸江 満津子 千秀 柳影 年代 白溪子

席題「芝居」

久保田元紀選

モンタージュと見くらべられる一人旅
心まずしくひとり芝居をする鏡
風向きを憂えるひとりの大欠伸
月下美人開くひとりの長い夜
大輪の菊ひとり舞台を意識する
ひとりだと悟れるまでが一生サ
灰皿にひとりのウツを消し切れず
矢印なんか要るもんですかひとり旅
レモンティー人芝居の幕がおり
意地悪い夜がひとり責めにくる
よく笑う女でひとりにしておかぬ
羽んでいる女と言われまだ独身
ひとりになると通帳見ている女
言い勝ってひとりぼっちになっている
坂く子もひとり混った葎皿
ひとりものひとりめしやでめしをくう
二人からひとりに戻る萩の道
ひとり旅男謀叛を考える
ひとり居るときのピエロは哀しそう
俺ひとりだけで済まそう辞表書く
ひとりだけ謝りに来てほめられる
父ひとり残して嫁ぐ祝い唄
洗濯機男ひとりを攪拌す
ひとりの人を愛しつづける薄化粧
ひとり旅詩人の顔になつてくる
ロマンなど落ちてなかったひとり旅
肩書きとれたひとりの酒が美味くなる

外吉 藤子 太茂津 柳伸 水客 凡九郎 寿子 杜的 隆二 年代 隆二 度 三男 射月芳 寿美 正坊 みつ子 佳秋 勝晴 小路 外吉 美代子 いわゑ 英子 藤子 朱夏 吐来

三等の席からかかる成駒屋

仲人が一人芝居をうつっている

善人の下手な芝居はすぐばれる

芝居とは思っていても腹が立ち

夢芝居女は愛に生きつづけ

宇野重吉の気迫舞台を盛り上げる

文楽の芝居解説聞いてから

どき廻り稲かりすんだ村にくる

芝居裏お茶子が子供産むと言う

伝説を守りつづける村芝居

村芝居落人の里秋深く

村芝居嫁いだ姉を借りに行く

芝居ならここで拍手がある涙

金銭した後で芝居だと気付き

泣いて笑って寛美にタンノウして帰り

この芝居やっぱり姑の方が上

椅子取りゲームまた国会の猿芝居

舞台では一番ボロを着て主役

お芝居が本当になった離婚記事

待ちぼうけ影と芝居をして帰り

人形芝居島の子供にうけ継がれ

お芝居をしながら仲の良い夫婦

夕焼けの町から消えた紙芝居

団十郎襲名見たのが母の死に土産

新国劇もう名月へ幕が無い

お芝居に涙するのも良いことだ

ありがとうたえお芝居だとしても

重人

白峰

諷云児

勝美

悦郎

みつ子

洋敏

柳影

千秀

柳伸

頂留子

萬的

藤子

作二郎

正坊

あいき

柳宏子

年代

寿美

千万子

狸村

天笑

萬的

昭子

朱夏

笑子

外吉

満津子

美代子

デスマスクこれも芝居やないやろか

悲しくなるのでここで私が幕にする

役者の眼三階を見て芝居する

子役出て来て花銭を集めてる

討入りの芝居の雪を切っている

十二月忠臣蔵を飽きもせず

扇雀の余韻を抱いてちらしすし

誰一人見ないバントマイムを繰り返す

どき廻り楽屋で柿を食べている

芝居から帰ると老母はよくはしゃぎ

真面目な顔でお見合こっしています

花道の忠治に柿の葉が落ちる

兼題「座りだこ」 宮尾 あいき 選

お行儀の良さを自慢の座りだこ

母さんのとても可愛い座りだこ

人さまの情に弱い座りだこ

寝たきりの老母の哀しい座りだこ

人生の試練に耐えた座りだこ

座りだこ愚痴聞くとに痛くなる

座りだこ愛しく洗う仕舞い風呂

ひと晩で母縫いあける座りだこ

江戸っ子の気風が生きる座りだこ

座りだこまだまだ隠居しておれず

勲章を受けた筆師の座りだこ

すわりだこ母はちいさく老い給う

金庫番だけが取得の座りだこ

般若経さとりは遠い座りだこ

座りだこいつも自分をくずさない

天笑

雀踊子

凡九郎

作二郎

鬼遊

笛生

小路

太津

作二郎

月子

英子

元紀

重信

みつ子

諷云児

美代子

千万子

吸江

三男

外吉

洋敏

智子

新造

朱夏

章久

佳秋

凡九郎

座りだこ出来ても悟り開けない

まだ糸が通せる母の座りだこ

座りだこ撫でて居職の父無口

座りだこ浮いたはなしは寄せつけぬ

座りだこ昔かたきの母で居る

座りだこ痛むと亡母を想い出す

花嫁の晴着縫ってる座りだこ

男仕立ての貫禄見せる座りだこ

鯨尺三代を生きた座りだこ

柳影

紫香

規不風

月子

笛生

泰子

新造

武庫坊

杜的

昭和62年度

大阪文化祭川柳大会 秀句

鳩の出るハナシが続く電話です

島崎 信子

岩内 外吉

神前 朋義

米田 鉦平

いま黒く塗っているのは明日の空

水島羊之介

牛の専科で牛の言葉がよくわかる

小西 幹斉

横道へそれひよっとこの面を取り

広瀬 反省

おいで下さい我が家に門はありません

納谷 澄子

新人類すわりだこなど死語になる
妻の座が性に合つてる座りだこ
座りだこ撫でて修業の日を憶つ
しみじみと過去呼び戻す座りだこ
白足袋を綺麗に穿いてる座りだこ
厳格な亡父を知つてる座りだこ
裁縫の腕は確かな座りだこ
離れから睨みをきかす座りだこ
お寺さん若いに流石座りだこ
よう辛抱してきた母の坐りダコ
座りだこ母はむかしを語らない
眼の奥に糸車あり座りだこ
口だけはまだ負けてない座りだこ
もう旅はあきらめました座りだこ
真直ぐに女を生きた座りだこ
すわりだこがかゆい明日は雨と言ふ

兼題「うらおもて」 河井庸佑選

裁かれる日までは続くうらおもて
聞かなかつたことにしておくらおもて
うらとおもてのはざままで明日の策を練る
逆境を励ます友のうらおもて
うらおもてない善人の瞳澄む
裏表けじめはちゃんとつけておく
許される範囲で使ううらおもて
うらおもてない妻だから騙せない
ときどきは裏も使つて生きてます
客あしらいうまい女将のうらおもて
うらおもてあつて裸になり切れぬ

朱夏 道子 幸一 柳伸 白溪子 妻子 文秋 諷云児 小路 柳宏子 美房 荒介 智子 武庫坊 吐来 あいき

退社ベルそれからハイド氏に変わる
裏表改める手がかう欺し
うらおもて知つてる妻は欺せない
人生の裏も表も知つた皺
善人の裏と表を見てしまふ
きな臭いはなしで裏が透けてくる
職ひいて見えた会社社のうらおもて
うらおもて見てもやっぱり好きな人
ロボットもすこしは欲しいうらおもて
一枚の紙も主張のうらおもて
うらおもて無い人だからやりにくい
表では威張る男のうらばなし
うらおもて歩きつかれた皺の数
どん底で知る人生のうらおもて
出会いからあなたにあらうらおもて
土壇場ではつきり判るうらおもて
うらおもていやな予感が当りそう
うらおもて懺悔の文字で埋めてある
おもてからだんだん腹立つうらばなし
うらおもて女は夜叉にも変わる顔
先生に見抜かれてるうらおもて
うらおもて無い座布団を裏返す
うらおもて話の分かる極道で
うらおもてその裏に咲く小さい花
虚と実と薄い臉のうらおもて
うらおもてないのは将棋の王様だ
十字架が聞いたざんげの裏表
寿の文字が知つてる裏表
うらおもてない生真面目さ不安がる

外吉 柳宏子 洋敏 文秋 射月芳 月子 正坊 みつ子 いわゑ 美代子 藤子 はつ絵 佳秋 白峰 隆二 狸村 小路 武庫坊 萬津 智子 杜的 柳影 いわゑ 泰子 吸江 章久 勝美 庸佑

兼題「九官鳥」 辻 白溪子選

受付に九官鳥がいる画廊
来客に九官鳥のマイペース
おしゃべりが過ぎて売られた九官鳥
パトロンが変わり九官鳥を売る
九官鳥女の愚痴を聞き飽きる
風邪ひいた九官鳥にある地声
へそ曲りのところもそっくり九官鳥
初対面九官鳥がオバアチャン
九官鳥に顔を見られていた空巢
もの好きと九官鳥の瞳が出会い
溫和しい九官鳥で森を恋う
九官鳥にハゲと教えたのは誰か
九官鳥に誰が教えた好きやねん
九官鳥別れた人の名前呼び
ネクタイで演技をしたい九官鳥
おかえりと言ふのはいつも九官鳥
英語ペラペラ外人宅の九官鳥
九官鳥姑すくりの笑い声
九官鳥までがわたしをおいと呼ぶ
押し売りに愛嬌振りまく九官鳥
反論はしない九官鳥の知恵
九官鳥よその男の名を覚え
知り過ぎた九官鳥が邪魔になる
九官鳥のひとり芝居に罪はない
喋り疲れた九官鳥も眠くなる
いやらしい言葉も覚えた九官鳥
九官鳥に代弁させている隠居

みつ子 荒介 幸一 外吉 天笑 美房 英子 あいき 英子 吐来 佳秋 年度 博子 どんたく 吸江 幸一 満津子 鬼遊 諷云児 楓楽 鬼遊 天笑 千秀 重人 萬の 武庫坊

ペラペラ喋って九官鳥は無表情

九官鳥余計なことを喋り過ぎ

九官鳥ひとり喋って誰も居ず

九官鳥素直に愚痴を聞いている

九官鳥に不倫の言葉覚えられ

退屈をさせぬ客間の九官鳥

九官鳥午後のめし屋は閑らしい

ご機嫌の九官鳥と喋り合う

喪の家の九官鳥の喋りすぎ

ご用聞き九官鳥にあしらわれ

集金へ九官鳥が留守という

飼い主に似て口下手な九官鳥

要らん真似したとは九官鳥知らず

お早ようと九官鳥が夜も言う

兼題「皿」

橘高薫風選

再会の皿のトマトが新鮮で

秋の空へ皿廻しなどしてみたし

一枚の皿を買うにも二人連れ

その日のために欠け皿がとつてある

想い出の皿を一枚大切に

新築のときから置いてある絵皿

ちよつぱりと盛ってあるから光る皿

薄っぺらい命と思うカレー皿

お皿に盛るけど五目ずし食べにくい

ハンバーガー紙のお皿でも平気

真っ白い皿のスープはおしとやか

おすましなおしやべりを聞く銀の皿

皿一枚位で井戸へ沈むまい

萬 隆 二

紫 香

柳 影

水 客

柳 伸

作 二 郎

笛 生

寿 美

柳 宏 子

鬼 遊

風 雲 児

小 路

白 漢 子

はつ絵

いわゑ

頂留子

冬 葉

寿美子

智 子

凡九郎

智 子

満津子

満津子

いわゑ

朱 夏

美代子

ベン皿に国際人の視野がある

楽焼きの皿が楽しい泣きこも

一枚になって割れない皿がある

手拍子へポリの小皿は頼りない

松茸の絵皿で秋刀魚焼いている

インテリの河童の皿は乾きがち

飾り皿炎の修羅場ふと思う

一すじの髪見逃さぬ白い皿

大皿で育って兄弟仲がよし

秋の皿長い話になってくる

皿を見ると数えて見なくなる女

飾り皿リンゴの肌はまだふれず

釣り合つた絵皿と思うお仲人

あらを煮て皿の唐子に盛つてある

区別され鮎と鯛をのせる皿

世帯持った皿が一枚未だ残る

わたくしを盛るに手頃な手塩皿

罪を盛るほどの絵皿がみつからぬ

自画像の鼻を嫌っている絵皿

廿一世紀の同んなじ皿に乗る定め

僕の絵皿恋の色味もう出ない

皿の数ふえると女強くなる

不揃いの皿子育ては終らない

くつきりと指紋押捺中華皿

皿まわし皿がへらへら笑うてる

実篤の皿は仲よくせよと言う

彼の掌はわたしをのせているお皿

皿に盛られた認証式の写真です

みつ子

小路

年代

外 吉

東 雲

史 好

度

千 秀

正 坊

度

三 男

あいき

妻 子

作 一 郎

美 房

美 緒

荒 介

緑 良

千 子

吐 来

あいき

吸 江

洋 敏

美 緒

度

元 紀

泰 子

風 子

第一回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 昭和62年12月6日(日)13時開場
堺市立梅文化会館

3F 第一講座室

堺市桃山台二丁二の一

TEL〇七二(九六)〇一五

(但し泉北鉄道梅木多駅下車
西50m)

記念講演

宿題

南 蛮

童 謡

鯨 台

灯 台

芸 台

十二月

碑

出句締切 14時(各題2句)

席題なし・欠席投句拝辞

各題秀句に呈賞

一、〇〇〇円(作品集呈)

賞 状

主 催 堺市・堺市教育委員会

後 援 堺市川柳協会

連絡先 堺 番 傘 川 柳 会

〒590 堺市柳屋町東一丁二二

TEL 二二一〇一〇二



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

駒つなぎ川柳会

里

小路報

笹舟のワルツ平和な風が吹く
風の無い酷暑ズボンが燃えてくる
門限がなくなり羽根が伸びてくる
門限が不満土曜の夜が更ける
フオーカスが鶴の目鷹の目夏姿
大正にロマンがあったアツバツバ
三十が近いためらう暇がない
ポストまで来てためらいが邪魔をする
真ん中に居る雑兵の血がたぎる
分譲地真ん中丈が売れ残り
つきのない男風まで避けて行く
屋上の風に愁められていて
門限をいつかは破りそうな恋
門限を意識してから遊べない
イメージの狂うのもある夏姿
たそがれに美人に見える夏姿
ためらいの道がだんだん細くなる
愛にゆれながらためらっている花芯
十字架の真ん中で聞く神の声
日の丸の真ん中晴れて慰霊祭

幸治 邦晴 隆二 曲久 甘平 新造 春蘭 真砂 覚然坊 好子 美幸 文秋 冬葉 頂留子 博子 柳石子 壮之助 喜代治 憲太郎

逢うのではなかった風がなまぬるい
路地裏を抜ける居職の風通し
門限を守る男で頼れない
門限がなくとも妻に気を使い
すだれ越しどうも色気のない昼寝
薄もの好きなおんなは人を刺す
ためらいも試行錯誤の土用波
ためらいの傷のままで男は森を出る
長い橋真ん中へ来て気が変わり
真ん中でいつも思案をするカエル
あの虹を渡ると風になれるだろう
風見鶏風の浮気を知っている
門限に裏口だけは開けておく
門限はもう直ぐ帯が結べない
火のような恋をしている夏帽子
シロクマのストレス溜る夏の午後
ためらいの演技悪女は心得る
ためらうな仕掛け火花はもうあがる
盃の真ん中へんに嘘がうく
夏の絵の真ん中にある冷や奴
めし屋出て人間臭い風にあう
根回しをした風だろう生臭い
門限を破ったことのない悪女
真夏女つづく向日葵の首太くなる
夏姿女は軽い嘘が好き
ためらいの中に入柄のぞかせる
浅漬が真ん中にある飯場酒
風葬を知るや大陸横断記
門限にすこし恨みのある若さ
クーラーをきかせ小泉八雲よむ
目には目を男にためらいなどはない

眉水 勝美 凡子 東雲 律子 正一 善信 作二郎 庸佑 美津枝 洋子 射月芳 悟郎 外吉 重一郎 千代三 幹齊 国公 英一 翠公 あおい 度 萬九郎 凡九郎 章 雄次郎 素灯 楓治 信治

クモの果の真ん中にある殺意
まん中の鬼はとっても苦勞人
ためらいもなく半分の胃と別れ
柳柳泉尾
三年目ちよつと冒険したくなる
三巡りの歴史を綴る夢を盛り
桃も葉もたわわに実る木を信じ
すず虫よ天は二物を与えない
大正も昭和も長く遠くなり
イワシ雲秋の終りをつけて冬
都合良いとこだけ運勢拾い読み
握手したあとで気付いた手の温み
逆らってみたい気まぐれ秋の空
一針の糸のモツレが仇となり
のりやすいたちで名前が先行し
雷が怖くてボチは部屋の間
クーラーのツケを残して夏が去り
優しさを捨てた都会で生き延びる
肝心のところで理性のもどる女
筋書きのわかる嘘でも親心
筋書きが読めて恐ろし機密法
筋書きの無いページが面白い
筋書きをはすれフィナーレに出たヒエロ
先生を慕う心が恋になる
大胆に心開けども道も見え
大胆に脱いでもネコは知らぬ顔
大胆細心額の奥には亡父の笑み
大胆と見せてる肝の小さい奴
大胆なニュースに馴れていく怖さ
飛び降りる大胆さ持ち死ぬ阿呆
バスタオル巻いて電話で恐縮し

雀踊子 柳伸 小路 寿美報 淑子 シメ子 美代子 はつ子 シマ子 三世 三千代 敦子 和子 清子 光子 伴子 悦子 美子 敏子 素子 二三 弘子 白水 途子 美奈子 葉子 満洲子 義一 昭子 トミ子 文子

キラキラと煌めく若さよサラダ記念日
西宮北口川柳会 松本 一郎報

花道がも一度欲しい父の靴
迷わずに真赤なバラを束にする
幾度の修羅をくぐって来た素顔
秋風の出好きになった老母の靴
素顔で言う人の話を信じよう
腕時計夫婦で五分違っただけ
花の名に疎くて婦唱夫随です
機嫌よく遊んでいます古稀近く
花束を渡す少女の瞳がきれい
素顔の美媚びぬ心を誇りとも
無造作に松茸買うてはるお人
素顔ではもう頼めない借りができ
騎馬戦のひととき強い女の子
子育てに夢中紅ひくゆとりなし
夢ばかり追うて五年のバスボート
亡母がしてくれたよく効くおまじない
寡婦の部屋白い椿がよく似合う
鬼やんまがキ大将を知っている
下駄箱に帰したくない靴を入れ
燃えたくて花束嫌う彼岸花
素顔です涙の跡が怖いから
おしやれして花の素顔に負けている
白桃のうぶ毛素顔のおさなかり
さいはての町で日本の素顔見る
ジョギングは三日坊主の靴がある
肩書の数だけ敵が増えてくる
靴脱ぎ石格式張った暗い家
杉村春子の演じ切った素顔

寿美 一 郎 報
美 子 静 子 園 歩 笑 津 紀 雄 佳 秋 千 世 子 陽 露 子 春 子 凡 九 郎 幽 香 正 一 柳 影 英 友 和 友 年 代 武 庫 坊 一 郎 正 坊 眉 水 郁 榮

ひとつずつ積木をつんでいるゆとり
ニューモードの女の方がよく喋る
歯並びは少し悪いが美人です
鬼あざみ花束からは遠くいる
私の地図です廃止線は消しません
ブランコの思い出タムの底にある
女ひとり素顔で生きた自負がある
ずんべんらぼうの朝の素顔に眉を描き
一線に並ぶと靴はあせり出す
旧交を温めて友素顔になる
うっかりと素顔を見せた不意の客
道祖神白いすが続いている
花束は身内ばかりの初舞台
向き合って久しい父と飯を食い
花束を妻にささげるときがきた
大輪へうなす返す菊日和
わかつたとウソも承知で聞いてやる
雑草の花束もよし愛ならば
今だから素顔で言える過去の事
勝ち力士胸上げ出来ぬ二百キロ
ハイヒール今日は淑女の顔で出る
選を終えやつと素顔を取り戻す
秋風に揺れる芒の独り言
神様に近づくために登る坂
信じないが運勢欄を読んでいる
羅漢さんの靴がベンチに置いてある
赤とんぼ素顔の肩に来てとまり
カエルコール覚えてますか質されて
ソプラノも金切声も女です
言いたいことが思いだせない靴を履く
悔いのない生活でしたと嘘をいう

美智子 萬 的 白 溪 子 い わ ゑ 杜 的 惠 美 子 岡 芳 子 米 朝 香 子 三 笑 子 作 二 郎 白 宗 水 声 天 樹 定 人 保 藏 み つ 子 ノ ブ 文 夫 光 代 青 珠 森 生 博 子 俊 子 良 征 紫 香 六 郎 太 保 枯 梢 ま さ お

だんまり癖についてパチンコ強くなる
水鏡汗の素顔が労われ
敗者復活明日は靴を履き替える
先生は都合で赤旗振ってます
横道をして来た靴はゆがんでる
ブラットニクラフで素顔は見せぬまま
眠ってる時の素顔は仏さま
高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
お墓への切符まだまだ要りません
絵日記へ切符切る父描き残す
お芝居の切符ごとくで騙されぬ
切符拝見なにもあわててことはない
秋風のふたりは違う切符買う
秋篠寺こぼれる萩の花の道
花道へ敵が一人又増える
白百合が匂う花道妻がいる
花道を首を曲げずに見たい席
花道になって国鉄見直され
花道も舞台も客も無いままに
ひよっとして老いの花道恋もする
セピア色の花道温め満ち足りる
喝采もない花道だけと妻がいる
妻の座に花道もなく姑となり
宰相の花道見えたり隠れたり
女の花道の重さがつきまとい
亡妻がいたこの花道を渡りきる
渡り終ってあれが花道だったのか
花道を太郎が通る村芝居
先輩を越える日の風冷たすぎ
渡月橋越えて嵯峨野で豆腐を喰い
山二つ越えて拡がる住宅地

千 秀 曲 手 荒 介 伊 三 郎 善 太 郎 芳 仙 紫 香 悦 子 百 合 子 年 代 外 吉 永 次 山 久 曲 手 多 賀 子 彰 一 景 治 越 子 静 江 高 子 よ 志 子 と 磨 的 萬 的 暢 子 惠 美 子 ス ミ 子 春 風 節 子

海越えて貴女の愛だけ信じます
島の女が高波越える船を待つ
越えられぬ坂のむこうに花がある
峠を越える女と軽いそばを食べ
坂越えるたびに潮騒荒くなる
近道は小さい谷を越えただけ
逢えそうな娘がして越える三の橋
若作りこれは娘の古着です
齡取って我慢強さもこころえる
同病で話がはずむ時間まち
ビンに詰め水の値うちがはねあがり
ハンマー音内需拡大かきたてる
敬老の日が足りなくなるよな高齢化
本音まで言えず口紅だけが濃い
出る前に用事が多い外出着
履き捨てを思い切れない父の靴
癌淘汰私は言わない方がよい
秋くれば秋の誘いにのる風船
ばっぺんばっぺん少年の顔父の顔
メロドラマ夫婦で見たらはずかしい
晴れた空自分の好きな雲を描く
ふとこにビストルを持ち風があり
距離少し取って友情が付かず
外人の妻鈴虫を飼っている
外国の酒は夏でも火の匂い
堺川柳会 十月句会 河内 月子報

房 子 和 友 佳 秋 冬 葉 如 洲 真 笑 紫 香 二 三 子 逸 明 子 章 武 茂 草 木 伊 三 郎 花 代 子 陽 露 子 栄 子 さ と 美 貞 夫 森 生 鬼 遊 庸 佑 作 二 郎 薫 風 東 雲 月 子 報 薺 楓 里

家計簿もサラダの詩もある机
久しぶり少し乱れて良いですか
駅までをばくと歩いてくれますか
今日からはひとりて歩くハンを押す
すぐ踊るバカを上手にこき使い
花飾る机に友が還らない
カラユキさんの道をカラユキさんが来る
秋日外人さんも祭好き
それ以来雨でも歩く御堂筋
單身赴任皿は情けに飢えている
片付いた机に恋がまだ遠い
金とコネ序列乱れる舞台裏
男出入りを少し案じるケーキ皿
母の皿どの子も同じ皿が通う
民宿の皿に民話盛つてある
焼き芋を盛ったお皿がよく喋る
外人の嫁からお父さんお母さん
もつすぐに消える机だから光る
秋の机にまだ読みかけの花衣
吉日の皿に話題をたんと盛る
歩くだけならば長年やつている
デモ隊の後尾が屠所の羊めく
響かぬ男の背をどんと打つ
コスモスの想いを乱すわい風
モラエスもアルノタウトも富士が好き
これ以上踊ると妻が妬く相手
生き延びるためなら裸踊りでも
母さんの歩いた道を嫌い抜く
養父母はまだ外人でない涙
秋茄子を催促してる嫁の皿
花鉄幹かに響く母の秋

半 銭 小 雪 天 笑 月 子 千 万 子 笑 痴 一 二 三 素 灯 邦 晴 金 三 郎 柳 影 信 博 幸 子 年 代 武 庫 坊 眉 水 夢 成 浩 一 郎 藻 介 恭 太 太 茂 津 鬼 遊 元 紀 千 代 美 景 子 芳 子 幸 代 敬 吉 郎 涼 一

文机に静かな母の午後がある
外人を九人ほしい負けっぱり
オーブンの行列に居る自己嫌悪
行列を抜けると見えぬものが見え
外人に旨い寿司屋を教えられ
琴線に響く毒舌もていて
しくれても乱れを見せぬ女下駄
乱れると人間くさい鬼になる
日本人妻を大事にする大使
笛太鼓過疎に響いて子ら帰る
蟻の列ひととき塾を忘れさせ
よく笑う外人でしたスパイです
星の下で踊ると露になるふたり
男より女が先に歩いている
歩き疲れて羅漢の胸に眠りたし
三浪の机に別ればなしなど
精一杯踊って幕を引くつもり
回らねば奈落へ墜ちる皿まわし
仏壇のお皿が今日も飢えている
制服の乱れを親は気付かない
留学の土産は青い目の娘
外人が稼ぐ日本のプロ野球
スーパ皿離婚話を纏めて聞く
南蛮行列の絵がおもしろいカステラ
樹をおりて月夜に踊る森の精
時どきは行方不明になる小皿
素晴しく踊ろう男をリードして
一浪へ机の位置を変えてみる
今もなお外人嫌いをする老母
一時間歩いて好きがまだ言えず
皿一枚人の命が消えてゆく

湖 風 蕉 風 信 治 淳 一 公 子 正 子 幸 幹 齊 登 志 代 英 子 千 寿 子 狂 虎 三 男 重 人 泰 子 美 緒 今 日 子 史 好 ミ ツ エ は つ こ 緑 英 子 子 射 月 芳 健 司 狸 村 さ と 子 ひ で 左 久 良 隆

安売り日卵を買いに行かされる
秋風が吹くと便りが厚くなる
懷を氣にし合つてお付き合い
一流の店で雑炊食へて来る

いつまでも好きになれない妻の鼻
花束を持った女の齒がきれい
折り紙を無心に折つて旅の宿
整理する母に捨てたものはない

図書館に通つた街も変りすぎ
迷える子母は十字架背負うとよ
流れ弾他人の噂はせぬように
新幹線台風通過待ちの駅

呼び声の高い女の裏話
座布団の端に座つて詫びを入れ

尼崎をはま句会 上田

神主が祭りの後を掃き寄せる
離農するこれが最後の祭笛

お祭りて孫に年金せびられる
旅に来て妻が氣にする火の始末

髪白い姉妹で秋を京の旅
豊作に旅芸人の職立つ

写真より富士のお山は美しい
夢ばかり追いかけて今日も旅に出る

すばらしい陽の入り明日も続く旅
電柱に片足あがれる大の知恵

高圧の鉄塔真冬は泣き通し
電柱でもがき続けるやつこ風

虫の音がとどえて秋も深くなる
古里を遠く感ずる齡となり

写真より素顔がよいとお世辞言つ
ボタン一つ残り男に逃げられる

保藏 年子 英子 一郎 伊三郎 萬的 芳子 白漢子 美代子 曲ん手 貞子 歌子 紫香 定人 武庫坊 保藏 弘治 江美 敏之 いわを 寅之助 夢之助 十四郎 貞吉 すみ 美代 よしつぐ 向秋 佳秋

石鹼を削つて母のシャボン玉
妻の座を時には逃げてみたくなる
いい旅をしてますと書くハネムーン

中西兼治郎報

先見えた命へ禁煙もつ言えず
息子よお前の背中が道しるべ
松茸を買つ約束がしんどなり

まわれ右すれば一番近い位置
吊橋はうしろ振り向く氣にならず
約束は泣かないはずの岐れ道

うしろ姿そっくりに叱られる
うしろから深いしじまが追つてくる
箱庭のような我が家に灯を点す

ドクターに命預けて禁煙中
かあさんの眼はうしろにもついている
約束の人へ時雨のちいそぐ

後輩の世話ばかりして追い抜かれ
こうと決め女はうしろ振り向かず
禁煙のきつかけ妻の軽い咳

うしろからくるランナーの執拗さ
長生きを約束しあい西ひがし
禁煙を何度したやら数知れず

曉障川柳 稲田

転んでも砂地と石の運不運
境界の石あり隣と平和です
苔蒸した石に寄付額先祖名

石段に年が重たい宮参り
石臼を廻すと母の顔がある
捨石の音が聞こえる不運と言つ

押し石の重さこたえて古稀となる
虎石を祀つて米寿の寅の年

昌子 歌子 紫香 兼治郎 文子 美津枝 さと美 東雲 照子 君子 春子 良江 為子 楓楽 光子 綾子 仙吉郎 みつ子 登志実 鬼遊 豊作 文古 みつる 和江 三香 一眺 真女 承平

約束は石ほど固く守るべし
夫の墓石磨いて達者十六年
墓石に無沙汰を託びて青い空
母を恋う声かすかなり石を積み

石とても墓に立てれば手を合わせ
三幸川柳教室 桜井 千秀報

白けゆく余生に孫が活を入れ
父母が居て余生の席がまだ空かず
余生塗る画布透明さ欠けてくる

幾許の余生かトマトまだ青い
限りある余生大事と思う日々
ノルマから逃れ余生に憧れる

余生から均等法に切り変える
幾山河越えた余生の花鏡
巻き戻しきかぬ余生でもたつけぬ

敗戦の日日照り田の赤とんぼ
死刑囚の目にあざやかな赤とんぼ
愛されて幸せですよ赤とんぼ

石けりの夕日を背なにも赤とんぼ
赤とんぼ思い乱れて来た川辺
ノラになる羽を下さい赤とんぼ

赤トンボ小さな秋を告げて去り
赤とんぼヒヨイと止まって考える
赤トンボ飛んだ父居る母も居た

グラウンドの死闘をよそに赤とんぼ
ビルドのドア押して建前だけになり
ビルだけが天道様を独り占め

ビルの中ホワイトカラが幅きかせ
雑居ビルここは歡樂一番地
地階からうなぎの匂いまきちらし

真夏日へビルは丸ごと冷やされる

行江 八恵子 八恵子 進一 健太郎 金一 孝子 敬子 美子 三千子 高夫 愛子 寛子 美智子 当代 和子 文子 靖子 辰治 重次 幸子 智水庵 千香子 隆行 かなめ 千秀

ターミナルビル蟻ともぐらの顔になる
大空を四角に切つてビルが建ち
高いびき蛙のような寝入りばな
眠られぬ影が動いて風が逝く
あら不思議夢のデパートに妻もいた
白昼夢夫以外の名前呼び

サークル檸檬

松本今日子報

負けた日も旗振るファン温かし
突然の秋風風鈴狂い出す
現実はいきびしいものよ秋の風
いも姉も鏡をみてる青春です
芋のつる命つないだ時もある
みな晶肩したいと絵馬へひとりごと
晶肩めに見てのお世辞につこりと
芋判に凱旋門が彫つてある

にた川柳会

西村

早苗報

自然には行政という敵がある
いざこざを洗えば白いもの血
回復期しびんにバラを生けてくれ
プロフィール書いては消して秋が来る
休日は妻を寝かせて米洗う
病む床で蠅一匹を持て余し
海へ山へそしてそれぞれ夏終る
仏門のしきたり魚肉女断つ
夫婦傘今日は妻女の肩が濡れ
喫茶店女は泣いているらしい
クルミ割る力があつた病み上り
仙人の仮面がとろけ出す地酒
物言わぬ男が秘めている野心
篤農の誇り豊かな蘗を積む
誓わせてみても重なる袖導歴

保 鉄治 千枝子 芭 邦郎 みね 今日子 泰子 美緒 三四子 千代女 智恵子 雅子 薫風 宗光 夢酔 三和 節子 為一郎 重一 哲三 巡歩 裕 紫泉 静子 景子 幸一 花子

蟻塚をそのまま残し庭を掃く
夏が過ぐサマージャンボのはずれ券
泣くわけをたずねてほしいのの子供
雲掴む話に男背伸びする
お迎えは蛇の目の傘の温み恋う
野地蔵に誰が捧げたふかし芋
乳房からそつと離れた児の寝顔
懐を狙う言葉が甘すぎる
責任の無い足並みがよく揃い
火打ち石古い科白を持つ夫婦
いい場所にちやんと出ている私の名
静岡市川柳塔同好会 永倉 僕川報
悲しさをこらえ名簿の朱線引く
雑踏の駅で左遷の旅に立つ
正直に居留守をつげる小さい手
父さんに言うなどで母がくれ
夏草は摘んでる内に生えてくる
金の要る話になると皆無口
歯車が合う幸せの共白髪
八十路ともなれば何処かが欠けてゆく
酔い過ぎて連れた彼女を置き忘れ
母さんの拳骨なんて痛くない
松茸は札を咬むよ孫がする
はらはらと付き添う孫の泣り台
カーテンの影が気になる好奇心
老化には待ったからぬ老いの坂
消防車ボヤで終つて気抜けする
裕次郎映画に歌に生きている
やがて来る靴と老人使い捨て
何事か右往左往の蟻の列
蟻螂でなくてよかつた浮気虫

雪代 弘幸 多賀子 鉄花人 登美也 雪子 雄々 弘朗 雀踊子 早苗 孤秀 金吾 紀代志 ゆたか 定次 やす たま 志げ 千代 ね さん きぬ まつゑ みつ 静代 孝平 庚子郎 喜平

美しい笑い振り袖からこぼれ
川柳ささやま 脇田 米朝報
もう一度鰻ご難になる残暑
ぐずついた残暑梨狩りぶどう狩り
三回忌残暑の膳に残る悔い
残暑みぎり海水浴に孫連れて
落着いた貨車を走らす妻の挺子
落ちつこつ落ちつこつと三本目をつける
いつの日も荒れてはならぬ母の位置
荒れている花芯を知らず蝶は舞い
荒れていた男も静か母の海
親の腰かじる卵に願をかけ
気前よく割つて大きな卵焼き
卵殻山ほど積んだせんべ焼き
台風の際に目玉がついてる
医の進歩若い卵に夢をかけ
卵焼きのりに巻かれて丸い顔
久世川柳クラブ 二宗 吟平報
ほんとうのこわさのわかる年になり
暑中見舞い一句を添える友をもち
直せない流儀出世の邪魔をする
私ならこうする知恵を貸してくれ
冥土まで着てゆくつもり家紋入れ
一坪の庭にめくくもり家紋入り
吟詠う夜空に遠い季の川
奈良漬けを姑嫁で漬けて今日も無事
渡らせてくれる車の主が好き
明日の計立ててゆつくり仕舞風呂
蟬時雨過疎に昔がまだ残り
深入りし抜きさしならず身を悶え
歯が抜けたように淋しい過疎の村

僕川 可住 ひか平 百合子 久恵 法齊 文平 やよい ゆう也 越山 とみ子 和子 エキオ 米朝 きしゑ 千代子 吟平報 賛平 保恒 美恵子 つた子 虞人 ふさえ 江山 アヤ子 静香 伊久栄 半仙 光水 禪心

踊りの輪しめし合わせて二人抜け
カレンダー大事の日だけ丸をつけ
大安日結婚式場花ざかり

暦ほど素直に季節来てくれず

生き暦白寿で町の文化財

かけ出しの保険屋身内からのみ

目標を初心のうちにたたき込み

挫折して初心にかえる我が人生

初心をば忘れて飛べば三年目

初心でも見事ゲートを通過させ

背伸びした貴方は初心忘れてる

初心者の妻の運転気がつかれ

迷いから醒めて初心をかみしめる

六十路越して初心の筆をもち

初心者のマーク走ればよけて待ち

初心者の句抜けて余生に灯がともり

男です初心貫く勇氣持つ

川柳たけはら

森井

青居報

幼ちえ

小二史子

小二昌之

小四晴美

小四晶美

中一純平

小四視幸

中二亜貴子

小三裕次郎

小五由博

青居

蘭幸

静水

亡き父によく似て来た妻がいう
追い越されても古里の温い風
盆をすませてゆっくり帰る故郷よ

雨の日は孫の手紙を出して読み
古ばけた鏡に写るのは私

赤ヘルが栄枯盛衰見せてくれ
オーケストラの虫の音ひびく庭がある

私の影法師誰が見てくれる
亡母思ふほどの母にはなりきれぬ

ふと思つ蛇口の水のありがたさ
蟬しぐれ明日は何処の地に果てる

片足のコオロギがいた秋の部屋
八分の一の血縁ひまこ抱く

疲れた日抹茶の香りの中に座す
健やかに老い有難さ身に沁みる

苦勞して今の暮らしまだ足らず
思慕ひとつ開くことなき門に置く

無名でもにんげんという自負を持つ
生きている生かされている墓参り

八方美人遂にもつれた交差点
悲しみの町にも太陽が昇る

たたかいは終わらぬわれもキズつきぬ
真直ぐに咲いて木槿は空を恋い

誤診かも知れぬ目をやる求人欄
ミニチュアのピンを集めて酒きらい

太陽に涙は見せるものでない
お陽様の愛に飢えてる部屋の鉢

夕焼け雲よお前は裏切りなどすまい
秋となる障子に亡父のシルエット

ハッピーで終わる筋書きにいてる
主張すれば悪妻となる同権よ

清水

栄恵

愛子

房子

ヤスエ

蕨

浪子

麻代

静佳

千年枝

喜美子

八重美

雪子

喜久恵

君枝

俊夫

こうじ

のぼら

正宏

貞子

笑子

静風

ふさ枝

静火

山久

一路

淑子

太虚

比呂子

九十坂をアイドルという温か味
ひと押しが足りずお得意減っている
腕相撲あの日おやじに負けたきり
父逝きて母の背丸く丸く見え

むらくも川柳会

藤井

明朗報

旅先の雨が冷たく降る無情

四国路も一足飛びの橋が出来

旅先で意外な友と再会し

いい香り大根漬の思い出し

旅先を気づかう薬も入れて出る

穫入れて農家の倉の満ちる幸

漬物のコツを教ええた亡母おもつ

立場上引くにも引けぬ役どころ

旅先で人に迷惑かけぬよう

絶壁に立つて立場が逆になり

つたなくも色紙に米寿心満つ

立場から言えず陰から援助する

人前は良妻賢母の名でとり

旅先で出会う訛りで飲みなおし

失言へ立場なくしてから悔いる

漬物の味母の味まだ出せず

川柳化粧槽

植村客遊子報

無色透明偽りかくすかげ捜す

廃線に開通記念の樹が残る

何くわぬ顔で切札持つっている

離婚してあげると一億くれるなら

一度来た客も女将は顔を知り

犬の瞳だけが僕を信頼してくれる

政治どう変わろうと生きてゆくしかない

シゲヨ

笹舟

白狐

満子

秀子

鶏生

よし子

武衛

はる代

ヤス子

吉野

百代

千里

義朗

竹乃

みどり

文子

林蔵

正朗

芳子

明朗

岳詩

越山

白李

秋月

紅葉

葉香

礎石

献血をしてアベックが肩を組む
 旅立ちの明日が不安月の暈
 敬老の一日よりもねぎらいを
 盆踊り更けて夜風に遠太鼓
 停電へ昔むかしが馳けめぐる
 何時来てもゆつくり気分母の家
 純行で方言聞いて旅うれし
 夕顔に心の鬼を吸い取られ
 棚経へ御布施はすんでお盆すむ
 頑なに女人通さぬ大峰山
 N T T 買えない株の動き見る
 法善寺無茶苦茶水をかけておく
 川柳わかやま
 神平
 まる優で借りた名前に惚れている
 たかがまる優アワダチ草が笑いだす
 まる優がケラケラ笑うくらしむき
 まる優が消えてもN T T 持っている
 まる優もすつたもんだでけりがつき
 まる優がタンスで眠る姑の城
 まる優で静かに枯れてゆく夫婦
 まる優の梓にわたしが縛られる
 まる優にされて家族にいたわれ
 まる優の期限気になる娘が二人
 まる優にすがって余生とは佗し
 まる優や明日の風は気にすまい
 お色気を出そうと気取ることはない
 制服の色気が噂になる少女
 お色気を研究したる三面鏡
 あつさりと振られた色気の無い話
 ありすぎる色気でドラマ絡み合う
 秋を掃く尼僧の裾にある色気

悲子 秋信 サワ子 遊峰 遊光 みつこ とし 輝月 美子 永楽 和子 客遊子 狂緑報 緑良 英子 稚代 栄美子 登志代 恭子 忠雄 信秋 紀美女 公子 武雄 寿子 芳朗 与呂志 紀久子 照子 幸三 男

彼岸花もえて稲穂も色気づき
 先入観で俺の色気を妬いている
 財テクに出した色気が波立ってる
 名人の手の人形にある色気
 寡婦五年色気出そうとか出さまいか
 近道を選んだ奴が未だ来ない
 発車が近いだのに女がまだ見えぬ
 近づけば貴方の色に染められる
 近道を知らぬ男の禿り下駄
 近づくな俺は暴れ蚊毒を刺す
 やさしい方に傾いてゆく花の首
 首無し地蔵も私も秋の絵に入る
 わかあゆ川柳会
 小砂
 唇が口紅いらぬ色で炎え
 口紅を足して若さを買いもどす
 未亡人ゲートボールで角がとれ
 歩道橋あはらしいけど渡らねば
 きりぎりすと仲良く毎日茄子胡瓜
 ライバルを意識している金魚鉢
 大海の水を知らない金魚たち
 ゲートボール孫が二人で待っている
 追いつめた運命女の紅をひき
 妬いてみるたかが口紅だけのこと
 方尺の水を金魚は信じる
 川柳高知
 川竹
 道順は母の通りに老いてゆく
 むきになる妻を可愛いなと思っ
 よく笑うお人私め笑いたい
 孫が来るから孫に貰った服を着る
 矢印の通りに歩く甲斐性なし
 神経の角を丸める酒が要り

信子 太茂津 光代 千寿子 克正 豊博 桂香 石子 忠子 正子 狂虎 白汀報 世似 蒼流 聖子 ヒデ子 天痴人 かつ子 鈴江 民子 清泉 白汀 松風報 節子 佳風 康子 とみ子 菊野 紅雨

日曜の始発のバスに客がない
 水割りやを仏と飲んだ暑い夜
 日記帳余白を埋めに逢いに行く
 流れ星一期一会の願いごと
 一陣の風風鈴が目を廻す
 故郷へ都会のセンス持ち帰る
 お人好し貧乏神を飼っている
 祝盆を無理に満たした土佐の酒
 人生の回転椅子が重すぎる
 窓際の椅子に我慢の二度の職
 時々は誉めて息子の舵をとり
 椅子浅くかけて待っている応接間
 川柳唐津支部
 久保 正敏報
 人間ドック見事進水出来るやら
 一瞬の花火の裏に見る疑惑
 雑用を笑う男の離婚沙汰
 柄の折れるまでは離せぬ男傘
 相談の相手に孫がなつてくれ
 安眠を破る深夜の暴走車
 夢追つて夢追つて廻り道
 老いの身に便利な足は娘の車
 ミニカーで通う出店にある生活
 頑固さと淋しがりやの裏表
 青い目の女を許す鬼瓦
 京都塔の会
 松川 杜的報
 軽口のおとこと旅に居る平和
 爽やかにどこもかしこも運動会
 終電を降りれば中華そばの湯気
 爽やかにサラダ記念日読み終る
 落日の羅漢をみてる裾の冷え
 戸がくしは蕎麦まつりとか秋便り

朱坊 良久子 和広 千鳥 春枝 孜郎 幸功 竹萌 松風 かず子 旭恒 高明 虹汀 朴竜 久仁於 掬水 香代子 正敏 花代 杜的報 水客 紫香 杜的 紅陽 英子

軽口の祝辞は席に受けている

辞令出る朝爽やかに髭をそる

ケールを降りたら爽やかな秋がいた

待たされる間にそばがのびてくる

ふんぎりがつき爽やかな顔になる

手術日をあすにひかえた萩の径

軽口の中に鋭い針がある

虫の音をしんみり聞いている終い風呂

敗北の顔が並んでそばすする

点滴の窓辺さわやかな秋の雲

出雲そばここから海が青くなる

まだまだと尺取虫は嘘をつく

幸せは逆縁のない墓参り

ゆく過去を惜しむ野外のシンフォニー

ひとりぼっちがだんだん重くなる衣桁

うそ少しまぜると真顔になる他人

嬉しさを話せば気抜けした返事

善行の記事爽やかな朝にする

蕎麦を食う人待ってる発車ベル

爽やかな余韻残して友帰る

赤とんぼ薄と秋を語ろうか

北国の訛りがとれぬにしん蕎麦

爽やかな笑顔に弱い財布もつ

岸和田川柳会

弟の方へ傾きかける恋

弟の気まで気になる姉である

弟の気楽さ燃える恋が出来

仲のよい兄弟はめて親もほめ

衛門で別れたままである弟

秀才の兄へそれ程でもない弟

弟から見れば頼りない兄貴

白漢子

佳秋

求芽

麗水

三求

年代

風云児

芳子

武庫坊

栄

和友

ただし

白季

達子

幸

英壬子

花代子

飛鳥

陽露子

巨詩

美穂

正坊

葉子

武助報

植山

白光子

ひで

春栄

加代子

佳生

浪速子

愚弟賢兄社会は甘くない歩み

過疎の田を弟あつさり継いでくれ

久々に快く聞く雨の音

稲焼いた煙速くに国がある

与作居る炭焼き小屋にある民話

手作りの皿へ私の彩を焼き

焼場の煙を眩しく見とおこう

口うるさく亭主気遣う古女房

一人旅お金を分けて入れておく

老いて子に従うつもりの子が別居

柳縁に芭蕉も子規も道の連れ

図太くもろくもなつて年をとる

どびんむし食べた食べぬと議論する

山男タビに風哭き山が暮れ

月まるく昔話が尚はすむ

川柳塔きやらばく

ひとり旅白い野菊にこころ干す

大切な余白をなんでも埋めようか

白衣ぬけばナース普通の娘に戻り

足跡をたどると貧しい風が吹く

足跡をたどると雨が降って来る

賞うけた老母の足跡喜雨にぬれ

足跡は桜吹雪でうずまいた

子へ譲る足跡深く深くつけ

足跡がのこせる様に踏みしめて

山頭火の足跡たどる第一歩

足跡を消すとへその緒が痛む

足跡がとつても若いオバアチャマ

御先祖の足跡守る灯をいれる

恩のある足跡いつか超すつもり

骨壺の音より白くなる記憶

武助

甘平

こう

ダン吉

一弥

狸村

寿美子

みよる

さよ子

通彦

圭一

富志子

勝晴

初太郎

操子

花子報

夕子

田鶴

とも子

玲子

富美子

朗子

登栄

八重子

恵子

瑞枝

日枝子

花子

てい子

正子

荒介

賑やかな足跡がある森の道

足跡の交錯しあう朋友がいる

川柳塔まつえ10月例会

恒松

ワープロを悪用司法の手を焼かせ

ワープロで頭の体操しています

私小説ワープロだけが知っている

ワープロが手話の心に灯を点す

ワープロで届いた賀状の味気なさ

ワープロの知恵で不動の文にする

ワープロの手紙が母の気に入らず

ワープロで縁者に配る一行詩

選職の時代ワープロ生きる道

ワープロと手書きを巧く使い分け

極道をとことんやって老いている

とことん待たされ別れ話あつけない

面倒は見ずにとことん遺産もめ

とことん惚れた弱みの妻が好き

腹切りの覚悟とことん風になる

淡水化反対とことん主張する

とことんやるだけやった明日がある

儲け過ぎとことん日本叩かれる

おのろけをとことん聞く秋夜長

口喧嘩とことんやれと腹の虫

旅仕度うれしい切符買っていく

切符二枚何か不倫の臭いする

おそすぎた春の切符をかう女

原宿へ恋の切符を買いに行く

発車ベル切符持つ娘がまた来ない

割引の切符が誘う遊園地

フルムーン妻のリードで買う切符

千代

より子

笑円

雄々

寿美子

鳳人

秀子

たつみ

桂子

満江

翠星

愚童

昭二

貢範

山久

芳枝

瑞枝

多賀子

きみえ

由郎

静翁

友恵

静恵

蒼流

ちかし

代仕男

房子

正朗

ノブ

ブ

天舟
本蔭棒

重人
虎醉吟

金天
太平

醉金舟

あすか
笑風

比呂志
一步

三哲一流

三千雄

義雄
与呂志

みつる

アキラ

律信
子治

雀踊子

外吉

百合村
美子

庸佑度

喜風
啓風

孤舟

章久

— 87 —

心変り男が欲しい手切金

部屋中の空気を交える退院日

好きやねんそのひと言が交えさせた

変人にしてしたたかに生きている

豊中もくせい川柳会

壁一つ隣にこわいお兄さん

秋空に溶けて流れてゆく挽歌

歩道橋登ると空も高くなる

世界中空は一つで雁が来る

牧水の空わたくしの青い空

星空に小さな意地を笑われる

なるようになるさと父は席を蹴り

席蹴って立つたが続く者がいない

怪しめばみな犯人に見えてくる

ストレスが寄って怪しい話する

どこかしら素振り怪しいネックレス

ややこしい辻で怪しくなる背中

怪しいと思った日から貯金する

追越しをしない車が怪しくて

年寄りに何思ってか怪電話

銀行のかくしカメラにまた写る

口紅のついたワイシャツまた洗う

盗み読みすると新聞たたまれる

空白を埋める証のないあせり

自由さが二十歳に似てる老い楽し

コスモスに子供の頭が見えかくれ

松茸の売場が子供の頭を嗅いだだけ

松茸の匂いを改札嗅がされる

喉乾くあたりに柿の無人店

家中のふとんふくれる秋日和

駄菓子屋の軒秋風が昔のまま

慶三

晋吉

頂留子

湖風

正坊報

博史

曲手

武庫坊

英子

きし子

メ女

富子

正坊

庸佑

明

諷云児

つえ子

史子

紫香

房子

喜代子

よし子

山久

福一

洋子

典子

登志実

白溪子

隆

慶子

作二郎

箸で食うフランス料理はお喋りな

石蹴って蹴って決心まだつかず

一徹の老父にも涙ありました

打吹川柳会

家族からやがて他人の舟を漕ぐ

後姿の美事な父になりたくて

適当に飲めない酒に妻案じ

秋らしい雲を見つけた遠まわり

結論を急かせるように遠花火

残り火がかすかにはてる年となり

耳栓を外し右向く社会党

長煙管江戸小ばなしの残る小路

故里の和の頂点に母がいる

うっかりすると秋の女に逃げられる

割切って味方欺く嘘をつく

夏茶碗涼しい顔で嘘を聞く

海が言う何のクヨクヨしなさんな

相好の崩れた笑みに仏住み

平幕が一泡ふかす土俵ぎわ

紅い灯へゆれる心の老いを知る

どんぶりにこぼれる愛を子に持たす

図書館に孤独な友が屯する

神さまの代理しあわせ売りになる

南大阪川柳会

中川

穏やかな日はじっくり豆を煮る

穏やかな人柄だつたたまされた

村平和駐在さん菊に凝り

穏やかにフランコがゆれている広場

穏やかな父が怒った日の恐さ

穏やかな厄日嬉しい案山子さん

江原とみお報

雄々

雀踊子

弘朗

早苗

道子

巡歩

宗光

紫映

規仔

蛭

たつみ

日枝子

梅朗

柳風

亮二

孝美

三和

白峰

とみお

千

外吉

恭太

白兔

公一

善信

新造

折り目伏し目心得小さく生きている

残された日の心得はしておこう

ライバルが来て心得が反古になる

心得がいが女はそれで済まされぬ

心得た膝はまあいい型で酔い

早起きの心得だけが又消える

つき放す子に心得は植えてある

ライバルの心得気になる日の口調

心得があるのて無理を無下にせぬ

年金があるのて粗末にされてない

お粗末な嘘が洩れる桶の底

粗末に出来ない小さな借りがある

お粗末な話責任なすりあい

粗末でも心は錦着ています

当分は愛があるから生きられる

金のある内は当分寄りつかず

当分はそれしか言えぬ身のつらさ

当分は文句言わさぬ鼻薬

当分は秋刀魚が続く秋の膳

当分は一人芝居で切り抜ける

当分の仕事が年金まで勤め

能書きを信じて飲めば効いてくる

枯木に花のように能書き並べたて

立板に水の能書き聞きはれる

という事もおますそれが能書きで

川柳はびきの

湯豆腐の湯気とゆずの香ふたりきり

雁首をすらり並べてマンガ本

ついて来た孫もついでに診て貰う

子には子の言い分がある遺産分け

年寄りに宿題がある趣味の会

楓

久子

柳伸

慶三

覚然坊

三恵子

曲手

山久

晴風

重人

章久

雀踊子

寿美

ハル子

智子

柳宏子

頂留子

文秋

勝美

隆二

雅風

庸佑

滋雀

恒明

凡九郎

隆二報

与呂志

吐来

繁夫

比沙胡

蛙声

小氣味よく二階へあがる若い足
うす切りの松茸包丁褒められる
夫という身近な男の面白さ
アングルを変えて才女に迫ろうか
高速渋滞の先に里がある
早合点人の話の腰を折る
お湯巡りお湯の香りが街にある
太陽の指輪をのぞく煤ガラス
兎小屋塀で情が薄くなる
宅急便開けると郷里の土こぼれ
想い出を語りつづける旅日記
しばらくは詩人となつて秋深む
蓋をして嫌な匂いをとじ込める
虫干しの思い出ばかり走り出す
三日めの雨でジョギングやめました
稲刈りを見ずにつばめは旅に出る
なで肩のあたりに少し香を残し
女客減つて劇団灯が消える
一病もいのち愛しき万歩計
群集心理あの娘が見せる別な顔
発車ベル若さで走るハイヒール
凶星だな順風満帆と恋進む
編笠が美人に見せる阿波踊
ためらいがあつて後からついていく
淋しさの本を引出す秋の夜
検診も無料老後というショック
お茶席に入りやすさ取り戻す
天辺の柿竿竹が背のびする
大胆な娘も今日は角かくし
コスモスの庭に群れとぶ赤とんぼ
彼岸花すこし悲しく陽が沈む

みつる
トミ子
三千代
敏
ダン吉
清子
淑子
美津子
希代司
優
末一
美代子
弘子
伴子
重人
白水
美子
健三
たけし
隆
敦子
忠宏
志洋
隆二
悦子
昇
キミ子
胡村
昭村
正義
一屯

二人分ユカタを縫つて医者通い
一番茶仏さまから動く朝
花嫁の赤いワトンと共にゆく
孝行の真似ごとと老母に羽根布団
杵と白並べたような老夫婦
トランプのパバ引き抜いた孫の顔
頭から金はないぞと断わられ
頭だけ下げていればと母が言い
南海電鉄川柳部
敬老日ちよつぱ若い服を着る
百歳迄生きろと氣持ちと身体あり
敬老の夫婦に温い椅子がある
年寄りを敬う素直な子に育ち
貸金庫ダイヤモンドが身を潜め
母の手の温もりダイヤにも勝り
我が道は急がずゆつくりと老いの日々
急ぎ足デイト時間にあせる顔
秋を急ぐ輸入松茸出廻りぬ
旅三日急いで帰る菊つくり
血圧も忘れて急ぐ忘れるもの
翌日はゴルフの疲れもつくる
ホールインワン万が一を考える
舶来のクラブ買つても腕伸びず
服装と用具は負けてないゴルフ
趣味兼ねた健康法と言うゴルフ
クラブ振るその目はやさしい母でない
駒つなぎ川柳会
眼くせも氣付かず回転にふい彼の
のろくとも堺の浜にある風車
封筒の窓からせかす癪な税

三世
ケイ子
律一
石橋義一
寿美
満洲子
重樹
葉子
絢子
山久
季柳子
悦郎
庸佑
志華子
真砂
重之
一進
曲ん手
しづ子
千万子
圭水
勝美
東雲
重人
覚然坊
凡子
頂留子
邦晴
憲太郎

伝言板こんな都合もあつたのか
先方の都合無視した自己主張
子には子の筋書通りの歩く道
書き置きに筋書きんな潰さる
氣まぐれに人形を買ふ独りばち
氣まぐれの寄付でなかつた妻の金
氣まぐれを承知奇麗にあしらわれ
首飾り都合でメッキに変えました
耳の穴こそばうなつて来た都合
筋書をまもるおひとに見えますか
筋書が読めたドラマのあはらしさ
氣紛れな客に易者がなぶられる
氣まぐれな塔の真上のちぎれ雲
初対面もつ氣まぐれを見抜かれる
回転に飽いたピエロが水を飲む
真白な封筒で来る果し状
三歳の児にも都合があるらしい
親の都合を水子地蔵に詫びたとて
その先の筋書が見え席を立つ
氣まぐれに出した指先噛みつかれ
氣まぐれの旅で地酒の味も知り
氣まぐれな母の早寝を娘が覗き
封筒に女心が匂う文字
回転木馬少しリッチな秋にする
封筒のなか大胆な愛をいう
美しい筋書き少女に夢がある
氣まぐれに自伝の彩を塗り替える
氣まぐれな旅で氣の合う連れが出来
風向きが変わつた飯面つけ替える
花嫁の都合で華式早められる
切り換える早い男で風に乗る

美津枝
春蘭
章久
悟郎
博子
市雄
しんじ
東雲
恒明
凡九郎
文秋
覚然坊
善信
庸佑
美幸
潔
射月芳
恭太
柳石子
幸治
新造
喜代治
国公
冬葉
藤子
眉水
正一
柳宏子
重人
比沙胡
甘平

現金封筒母の小言も入れてある

筋書になかった八月十五日

気まぐれな男花屋に用が出来る

封筒へ妻がうたぐり深くなる

その時の都合で右派に左派になり

乗っている若さ筋書から外れ

羅漢それぞれ気まぐれ者の顔でいる

都合よく進む話がおそろしい

筋書を通して一度は負けておく

八尾市民館川柳教室 高杉

娘の寝顔も明日からは叱るまい

明日ならなんとかなるよと寝てしまい

今日という積木をつんで明日を待つ

明日からは明日からはを繰り返す

明日小雨のところによりという予報

少しだが未だ明日への夢がある

開店を明日にひかえて立つ花輪

明日会えばすむことなの長電話

落葉掃き明日の分まで枝ゆすり

言ひかけて明日咲く花の数をよみ

明日からする勉強は逃げ口上

誰もみな明日も無事と思ってる

明日あたり実家から柿が届くはず

寝酒一合あすはあしたという悟り

あすの旅夕焼け雲がわらってる

明日のため明日のためにためて

明日は花嫁家族で囲む鍋料理

菊人形あすは他人になるふたり

明日ばかり夢見る若さ羨し

川柳藤井寺

食通も通う屋台の味自慢

曲ん手

素灯

雀踊子

浩一郎

笛生

萬的

柳伸

小路

鬼遊報

能子

泰成

英一

友一

重善

龍裏

トシエ

初子

道子

春子

恵以子

その

シマ子

章

幸子

公子

美与子

百子

はる

和子報

志洋

付合いの幅が広くて家細る

あの月に若し未来がうつるなら

ちぎり絵の重ね重ねて恋いくつ

名月を肴に独り酌むもよし

どうしても勝てぬ相手の駒笑う

喰って寝るだけにこんな無駄な汗

敬老日夫を杖ととも柱とも

耳遠くなくてアンテナ鈍り出す

飽食の果お茶漬の味に尽き

外出に土をじらす厚化粧

月の土地二十一世紀へ買って

見物の方が焦れてる魚釣り

つきあってみれば優しい髭だるま

PLの校歌おぼえた甲子園

風鈴を外して秋の風と知る

あわてずにじつと相手の出を待とう

苦い水飲んで男は脱皮する

あと一球のところでバットとコマーシャル

五割引き衝動買いを狙ってる

自動ドア半分開いて停電し

觀光を踊りて稼ぐ阿波の国

豊作へ案山子気になる秋の風

銭湯に行くのに念入りな化粧

今年こそ去年は負けたこの相手

ふるさとの茹でいかの味母の顔

じれったいついに手がでる声がとぶ

誰よりも味覚が知らず恢復期

弱つた後味わるい叱りよう

ストローに初恋の味吸い上げる

宮参り紐銭腰にぶらさけて

肩パット外せば溶けるわだかまり

ときお

スミ

治子

きよし

喜道

吸江

つやこ

昭子

美房

作秀

三郎

重樹

美代子

本蔭棒

与呂志

美佐

正人

祐二

伴男

繁男

うめ

末一

みのる

てつお

清子

かな女

和美

雅美

彩

初枝

正枝

待ちばうけひやかして行く秋の風

美術展分ったような顔で見る

相手なら心の通う友がよい

秋の夜に相手がほしいひとり酒

こおろきは三坪の庭でラブコール

三代目苦い意見は聞き流し

天命を待つうなだれてより二三日

川柳後案

仲のよい二人を割いたのも二人

雑念を振り切るように遠花火

誕生日忘れて暢気を叱られる

日本の春気は核の中に寝る

のんき者ローンの督促来てあわて

巻きついたテープが優勝祝福し

テープカットそして苦境の旅ばかり

テープカット鉄が切れないかも知れぬ

猫なでと思わぬとこでひつ搔かれ

香水の匂いを妻にひつ搔かれ

老いの身の背中に柱撞いてくれ

お互いの背中を掻き合うほどの仲

みね打ちの恥かく私はロボットか

安竹も宮でも良い明日の米を研ぐ

分か合う心がきしむ総裁選

良心も空缶とももボイと捨て

空缶を蹴って昔が蘇る

成仏が出来ず空缶転がされ

空缶を蹴ると嘲笑めいた音

ふゆ

敦子

幾

秀伸

秋園

漬心

和子

井上柳五郎報

吟平

健一

浄美

鮫虎狼

哲友

美智子

草風

玉水

佐加恵

金吾

拓治

照路

桃風

文平

柳五郎

智彦

たけ志

秋月

12 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 区 先
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後1時半より 追う・塩・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田測定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
八尾市民 川 柳 会	10日(木) 夕6時より 終・問題・映画・好き	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 ま つ え	12日(土) 午後1時半より 裏方・ギャル・手帳	慈 雲 寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	12日(土) 午後1時半より 喉・望み・残る・狼煙	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 わかやま	13日(日) 正午より 招く・元気・習慣	「まつや食堂」和歌山県庁前。バス停前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 会費 5,000円(忘年会のため) 投句料 60円切手 3枚
西宮北口	14日(月) 午後1時より 片手・歳月・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
富 柳 会	17日(木) 午後1時より 空白・靴・暮れ	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南海電鉄 川 柳 部	17日(木) 夕6時より 忘年会・悩む・痛み	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪府南区難波5丁目1番60号南海電気鉄 道(株)(川柳部)不動産管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17日(木) 午後1時より 相性・震える・自由吟	高槻市民会館302号 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市明野町15-27 上原 逸 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南 大 阪 川 柳 会	19日(土) 夕6時より 罰・まずい・屋台・乱暴	寺田町高松会館 J R環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪府生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	20日(日) 正午より 未来・自腹・温室・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	21日(月) 午後1時より 筆・光る・眉・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線豊中下車南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
川 柳 東 大 阪	26日(土) 夕6時より あわてる・燃える・甘い・幕	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅下車北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ川柳会はお休みです。		

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
住所が変わっています 〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘 高薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)

「負担」 石川 侃流洞 選
「霜」 稲田 豊作 選
「飾る」 山下 みつる 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘 高薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)

「客」 内芝 登志代 選
「水」 吉岡 きみえ 選
「隅」 奥田 みつ子 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

12月の常任理事会は1日(火)

定価 五百円 (送料50円)

半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

昭和六十二年十二月二十五日印刷
昭和六十二年十二月一日発行

編集兼 西尾 巖
発行人 藤原 童心 社
印刷所 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二〇二番
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話 (三巴) 一六九一四番
振替口座大阪 81333268番

本社12月句会

日時 12月7日(月) 午後6時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一丁目 電話 06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「錯覚」 橘 高薫 風 選
「狸」 高須賀 金太 選
「化粧」 吉岡 美房 選
「終り」 塩満 敏 選
「終り」 高杉 鬼遊 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「花形」 「元氣」 「矢」

1月の本社句会は7日(木)

『夜市川柳』募集

第7回「目」 赤木和子選

3句・締切 12月末日

第8回「蓋」 新家完司選

締切 1月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

菊正宗

伝統の味を贈りものに……



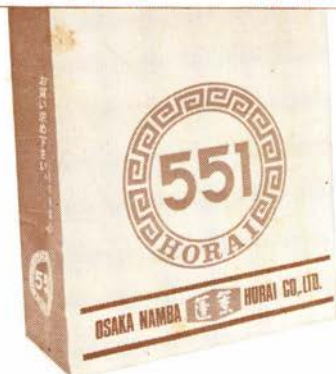
料理がいきる
 辛口の本格派

日本酒で乾杯!

神戸・灘
 菊正宗酒造株式会社

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551